兵衛泰景ト稱ス、是當城ノ主タリシカハ、泰景卒シテ其子泰朝ヲ守立、成長ノ後、所領ヲ弟左近大夫景村、元弘年中遺跡ヲ繼、在城シテ朝泰ヲ返シ、當城ヲ讓レリ、朝泰カ八代ノ孫ヲ勘一郎由左衛門泰明ト、長尾景春ニ味シ、管領上杉修理大夫定正ニ四月、泰經、弟平左衛門泰明ト稱ス、文明七年ニ背キ、江戸河越ノ通路ヲ塞キ、門カキ、平塚ノ城ヲ取卷、城外ヲ放火シ、手痛ク攻ケルニヨリ、太田道灌江戸ヲ打テ出、平塚ヲ救ハンヲ爲、當城ヲ出テ、多摩郡江古田原、沼袋ニ於テ、同十八日、城遂ニ陷レリ、鎌倉大草紙ニ敗績ハ、一族ミナ戰死シ、殘兵カッキテ、道灌ト接戰シ、泰經、泰明敗績ハ、文馬城ヲ取立、四月、豐島勘解由左衛門、同弟平左衛門、景春ニ一味シ、當城及テヒ平練

城跡

城山

〔東京府志料〕

九十九神井村第八大區八小區

上石神井村

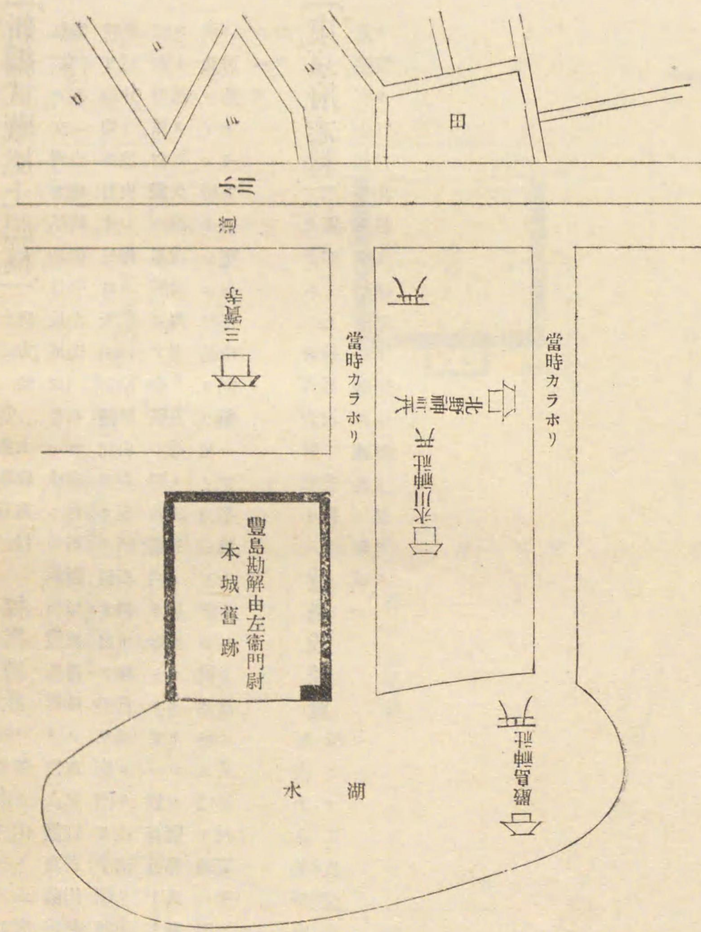
衛門泰經ニ至リ、文明九年、其弟泰明ト共ニ、長尾景春ニ一味シ、管領上杉定正ニ背キ、江戸越ノ通路ヲ絕シ故、定正ノ將太田道灌ニ江戸ヨリ打テ出、泰明居城平塚ヲ圍ミ、手痛ク攻ケルニ、泰經之ヲ救ハント接戰シ、泰經、泰明敗績シ、一族ミナ戰死シ、殘兵カッキテ城亦陷ルト云、今高ニテ、前ハ三寶寺城ニ臨ミ、廻リ堀アリ、山城ト云ホト、コノ池水ヲ引沃カサレ、自然地高ニテ前ハカノ三寶寺地址ニ、堅固ノ城郭トナルヘシ、櫓ノ方ニ城山ト唱フル地アリ、道灌ノ當城ヲ攻シ時、コヽニ砦ヲ築キ軍兵ヲ置レシト云、豐島城趾ヨリ四丁許リ隔リ、平地ヨリ少シク高シ、圖面下ニ出セリ、

## 豐島氏城跡

豐島氏累世ノ居城ナリ、勘解由左衛門尉泰景ト稱ス、是當城ノ主タリシカハ、泰景卒シテ其子泰朝ヲ守立、成長ノ後、所領ヲ弟左近大夫景村、元弘年中遺跡ヲ繼、在城シテ朝泰ヲ返シ、當城ヲ讓レリ、朝泰カ八代ノ孫ヲ勘一郎由左衛門泰明ト、長尾景春ニ味シ、管領上杉修理大夫定正ニ四月、泰經、弟平左衛門泰明ト稱ス、文明七年ニ背キ、江戸河越ノ通路ヲ塞キ、門カキ、平塚ノ城ヲ取卷、城外ヲ放火シ、手痛ク攻ケルニヨリ、太田道灌江戸ヲ打テ出、平塚ヲ救ハンヲ爲、當城ヲ出テ、多摩郡江古田原、沼袋ニ於テ、同十八日、城遂ニ陷レリ、鎌倉大草紙ニ敗績ハ、一族ミナ戰死シ、殘兵カッキテ城亦陷ルト云、今高ニテ、前ハ三寶寺城ニ臨ミ、廻リ堀アリ、山城ト云ホト、コノ池水ヲ引沃カサレ、自然地高ニテ前ハカノ三寶寺地址ニ、堅固ノ城郭トナルヘシ、櫓ノ方ニ城山ト唱フル地アリ、道灌ノ當城ヲ攻シ時、コヽニ砦ヲ築キ軍兵ヲ置レシト云、豐島城趾ヨリ四丁許リ隔リ、平地ヨリ少シク高シ、圖面下ニ出セリ、



城跡圖



〔新編武藏風土記稿〕十三　野方領　豐島郡五　上練馬村

練馬城趾

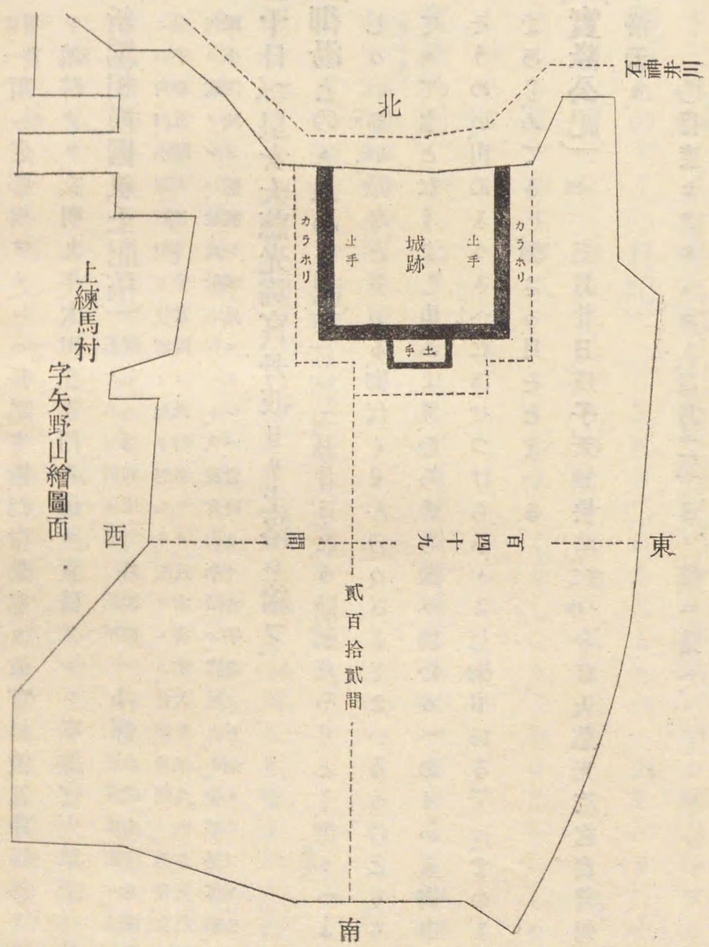
ハ矢ノ南ニアリ、土人或ハ山ト云、鎌倉大草紙ニ、文明九年正月、長尾景春、一味ニハ武州豐島郡ノ住人、豐島勘解由左衛門「按ニ泰經」同弟平左衛門「按ニ泰明」石神城、練馬城ヲ取立、江戸川越ノ通路ヲ取切、四月十三日、太田道灌江戸ヨリ打(井脫カ下同ノ)出テ、平左衛門ガ平塚城ヲ取攻ムト、道灌ヲ來リ、石神城、練馬城ヨリ、一族百五十騎人打死ノ後、又コヽニ居リシニヤ、是ヨリ北ノ方三丁許ニ海老谷ト唱ル地ハ、則左近ノ居跡ナリト云、寛永年中、開墾シテ平地トナレリ、故ニ其廣狹等今ヨリ計ルヘカラス、

〔東京府志料〕九十八　上練馬村第八大區七小區古跡

豐嶋氏城趾　村南、土人矢野山ト云所ニアリ、(文明)長祿九年、豐島勘解由、弟平左衛門ト、石神井、練馬ノ兩城ヲ築キ、江戸川越ノ通路ヲ絕ト、卽チ是ナリ、







小磯城

〔新編相模國風土記稿〕四十一村里部・陶綾郡三ノ宮在二西小磯村　城山　西方ニアリ、登一町許、頂ニ老櫻樹アリ、コハ長尾左衛門尉景春カ被官越後五郎四郎カ籠リシ城跡ナリ、文明九年、太田左衛門入道ニ責破ラレシ事、鎌倉大草紙ニ見ユ、

〔新編相模國風土記稿〕五十八村里部・愛甲郡五毛利庄　角田村　小澤　正保國圖ニ、上川入之内小澤、元祿國圖ニハ角田、小澤新田ト枝郷ノ如ク記セリ、按スルニ、北條役帳ニ、拾貫文小澤金子新五郎トアリ、今當國ニ此村名ナク、且本書津久井衆内藤左近將監ノ次ニ載タレハ、蓋此所ナルヘシ、又鎌倉大草紙ニ、文明九年、金子掃部助某、當國小澤城ニ楯籠シ事見エタレハ、當時ヨリ金子氏ノ所領タリシナラン、

敵出デヽ路ヲ妨ゲントス

小澤城

二十日、戊子、皇女大慈光院宮、丹波ヨリ上洛シ給フ、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　三月廿日、れゐ殿御はてゐりとゝ、御ゐへ（ゐ脱カ）ゑ御うしゐゐい（マヽ）殿なとゐいる、御代くゐんのゐさよゐまいるものとも、ゐきいてゝてなとれうよし申ふよりゐ、むろまち殿へ御むゐへのゐいり御申ゐり、そうめい山ゐよりさへれ（くカ）ゐせつけらゐゝよし御申ゐる所に、ゐゐゐよ御つゐあり、めてさし、御さゐ月そとまいる、

〔實隆公記〕四　三月廿日、戊子、天顔快晴、略○中今日大慈光院宮自丹州御上洛云々、

○得度セラルヽコト、四月二十日ノ條ニ見ユ、

二十三日、辛卯、伏見宮邦高親王、右兵衛督飛鳥井雅康ノ第ニ移徙セラル、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　三月廿二日、ふしみとのへ、御ゐさましめてさきよし申されゑ、御まゐ二いゐ、御さる三ゐ代三百疋まいらるゝ、御うつりのゝち、源大納言御つゐひよゑ、めゐさくゐしこまり申さゐゝよし、ゐさねゑ御申ゐり、

〔實隆公記〕四　三月廿三日、辛卯、霽、晩頭雷鳴雨降、略○中参伏見殿、其夜御移徙也、此間（飛鳥井雅康）右兵衛督陣屋被召置之者也、小時歸家、

酒饌ヲ進獻ス

二十六日、甲午、義尚及ビ生母日野氏参内シ、宴ニ侍ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　三月廿五日、むろまち殿よゐ御まれ二色ゐいゐ、あすの御さんさゐ、ふしみとのくろ御所〳〵御まいりとものゐ事、あれさよりゐふ御申ゐり、

廿六日、御さんさゐ、八ゐ時分、をり十ゐう、御れさへ物十ゐう、御さゐ月のさい、御さる十ゐ、いゐゐ二ゐゐいる、御ゐし〳〵とめてさし〳〵、

廿七日、御さいの御ゐさへ、昨日れめゐさ、すけとのゝ文よて御申ゐゐ、

〔實隆公記〕四　三月廿六日、甲午、天顔快晴、今日武家佳例之御申沙汰也、准

義政病後ヲ以テ參内セズ　參會ノ公卿

大飲深更ニ及ブ

后舊冬御顔御雜熱之痕見苦之間御不參、宰相中將殿(嶋尉)、一位殿(冬子)等御參内也、爲參會午下剋參内、自裏西門内々御參、御直垂也、參會輩、勸修寺大納言、新大納言、源大納言、按察、滋野井前宰相中將、藤宰相、民部卿、下官、言國朝臣、元長等也、御供藤侍從永康也、日野拾遺政資、以量、菅原在數、源富仲等祗候、大飲及深更、退出之刻巳丑之下剋也、

〔歷代殘闕日記〕七十八　重胤記　三月廿六日、

一御方御所御參内也、

禁裏丙穢　幕府乙穢

二十九日、丁酉、晴、自午後雨降、○中略抑自今日禁裏丙穢也、

〔實隆公記〕四　三月廿九日、丁酉、禁中、幕府觸穢、

武家乙穢云々、其謂者、畠山式部大輔宿所之井、下女墮落死去云々、

## 四月　小　戊戌朔盡

更衣

一日、戊戌、御祝、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　四月一日、をゝぬよりの御きぬ、新すけとの、御いりとのゝふしの御あん御ゐいり、新もしの御りゝ、

此御宮けの御さる、御所へわけゐいらせらるゝ、

祗候ノ人々

〔實隆公記〕四　四月一日、戊戌、天顔快晴、早旦退出、行水、晚頭著束帶表衣新調、參内、御祝祗候人々、新大納言、源大納言、民部卿、季經朝臣、下官、源富仲等也、退出之次參竹園、深更歸家、

二日、己亥、山名是豐、一條家領攝津兵庫ヲ押領ス、大乘院尋尊、之ヲ回復セントス、

尋尊大内政弘ニ依頼スレドモ應ゼズ

〔尋尊大僧正記〕七　四月二日、

一攝州兵庫(武庫郡)事、于今山名彈正(是豐)知行之云々、家門領家分事、池田(元正)申入子細有之、被仰合于大内左京大夫(政弘)之處、不存知由、返事申入之、

○是豐等、大内政弘ノ兵ト、攝津兵庫ニ戰ヒテ之ヲ破リ、一條政房、兵庫ニ於テ、東兵ノ爲メニ殺サルヽコト、元年十月十六日ノ條ニ見ユ、

五日、壬寅、義政、夫人日野氏ノ小川新第ニ移ル、

〔實隆公記〕四　四月五日、壬寅、宿雨未休、今夜子刻小河新造御徙移云々、

七日、甲辰、晴、終日餘酬過法者也、晩頭參小河御所、御徙移御禮申入之、申次畠山刑部少輔也、源丞相、花山院丞相等令同道了、

〔長興宿禰記〕四月五日、室町殿小河御所常御殿（御臺樣御坐所也）御移徙子刻有御祝之儀、後日、七日、諸大名以下參賀被進御太刀、於御臺樣者被進折紙云々、

六日、癸卯、稲荷祭ヲ停ム、

〔東寺長者補任〕五　文明九年、丁酉、稲荷向御祇（札カ）供之、四月六日、

〔東寺私用集〕

一文明九年、丁酉、稲荷五所御宿所御出アリ、（三月午三ツアリ、二日、十四日、廿六日、此十四日可有御出事也、）三月廿日戊子、御出アリ、（法成寺ノ御栗屋入道如此仕也、）同廿三日、辛卯、五所御還御ナル、酉刻、猪熊ヲ南ヱ、八條ヲ西ヱ、大宮ヲ上ヱ、東寺ヘハ御出無之、

同四月六日、癸卯、依爲本日稲荷御祭、儀式向御札有之、半濟之殘分供之、

近年ハ悉皆畠山右衞門佐（義就）殿御內者法成寺御栗屋入道爲計、如此任我意、

三月十四日ニハ不奉出シテ、廿日戊子、奉出之也、軈同廿三日奉成還御之間、

諸大名太刀ヲ義政ニ贈進ス

還御

近年ハ畠山義就部下ノ計タリ

寺家六頭人、幷大宮太頭モ、本式日四月六日癸卯、向御札奉供之、

〔續史愚抄〕四十後士御門院中之上　四月六日、癸卯、無稲荷祭、長者補任、

十日、丁未、長尾景春ノ黨矢野兵庫助等、武藏河越城ヲ攻メントシ、苦林ニ陣ス、太田道灌等、勝原ニ逆ヘ擊チテ之ヲ破ル、

〔太田道灌狀〕○肥前

○上略、三月十八日ノ條ニ收ム、（宗碧）小机城主矢野兵庫助以下河越城爲押苦林（宗碧）クハヤシ張陣候處、（宗碧）圖書助（宗碧）文明九月十日打出彼陣際相散、招出凶徒、於勝原令合戰、得勝利候、○中略、（宗碧）文明十一月廿八日

道灌判

謹上　高瀨民部少輔殿（宗碧）山內家人式部丞イ

〔鎌倉大草子〕○上略、三月十八日ノ條ニ收ム、景春一味の寶相寺幷吉里宮內左衞門尉以下、小澤乃城の後詰乃ため、横山（武藏）より打出、當國府中に陣取、小山田ゝ城を攻おとさんとして、矢野兵庫助を大將として、河越乃城の押へのせめゝ、苦林と云所に陣を取、是をミて河越に籠ゐ太田、上田等、（文明九）同四月十日に打出々を、は、矢野兵庫助其外小机城衆、勝原と云所ゝ馳出、合戰ゝ、敵ハ矢野を初めとして、皆悉打負、深手負て引退、○下略

寶相寺吉里宮內左衞門尉府中ニ陣ス

小山田城ヲ攻メントス

〔鎌倉大日記〕文明八(九)丙申四月十日、關東藤(勝)原豐嶋與道灌合戰、

○道灌、兵ヲ遣シテ、景春ノ黨ヲ溝呂木、小磯、小澤ノ諸城ニ攻ムルコト、三月十八日ノ條ニ、豐島泰明ヲ武藏平塚城ニ圍ミ、石神井、練馬等ノ諸城ヲ攻落スコト、本月十三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

苦林野

鎌倉古街道

〔新編武藏風土記稿〕五十八　未勘　入間郡十七　玉林寺村　又村內ニ苦林野ノ古戰場ノ塚ト云モノアルトキハ、古ハ苦林野ノ內ナリシコト知ラル、其地ハ本村ノ東ニ當リテ、大類村ヲ中間隔テヽアリ、○上下略

苦林野古戰場　村ノ北ノ方苦林村ノ接地ナリ、此邊古墳多キヲモテ、土人塚原ト稱ス、○略下

苦林村（クガハヤシ）　苦林村ハ、河越城ヨリ乾ノ方三里ヲ隔テリ、江戶ヨリハ十三里ノ行程ナリ、抑苦林ノ地名ハ、太平記等ノ書ニモ見エテ、古キ唱ナルコトハ論ナシ、ソノカミハ苦林野ト號シテ、玉林寺村古戰場ノ條ニモ辨セシ如ク、イト廣キ原野ナリトハイヘト、ソノ界域ハ、後世變革モアルヘシ、トカク當村ハ、ソノ名殘ナラン、今村西ニ鎌倉古街道カヽリ、西戶村ヨリ入テ大類村ニ達ス、古ノ宿驛ハ、將軍澤、大類、女影ト續キテ、當村ハ其間ニアリシ原野ナリト云傳フ、サレハ昔苦林ノ村落ハイツレノ地ナリヤ、今ヨリ考フヘカラス、

小机城

○下略

〔新編武藏風土記稿〕六十八　神奈川領　橘樹郡十一　小机村　小机城蹟　村ノ中央ヨリフコシ西ノ方ニ當リテアリ、今ハ御林山トナレリ、東ノ方大手ノ跡ト云所ハ、今モ打セラケタル地ナリ、又搦手ノ跡ニハ、土人城坂ト呼フ坂アリ、其餘鐘ツキ櫓ノ跡ナリトテ、高キ臺アリ、此所ハ本丸ノ郭外ナリト云、本丸ノ內ト云所ニ、井戶ノ跡モアリ、今ハ埋ミタレトモ、猶其形ハ明ラカニ見ユ、此城一名ヲ飯田城トモイヒシ歟、隣村下菅田村ニ飯田道トヨフ往還アリ、此城蹟ヘ通フ故ナリト土人イヘリ、略○下

刑部少輔畠山政淸、根來寺寶持坊某ノ、過重ノ利ヲ其借錢ニ課シ、押取セルヲ幕府ニ訴フ、

〔親元日記別錄〕中

飯加州一畠山刑部代　少輔政淸事也、（文明）一九四十、

根來寺寶持坊ニ借錢五千疋（本利一倍万疋）事、泉州知行分以麻生庄年貢內可返辨之由申付候處、可利ニ倍々由相語、沙汰人田中大和守押取云々、

十二日、己酉、六角高賴、近江長壽寺領市原莊守護段錢課役等ヲ免ジ、坊領檢斷ヲ安堵セシム、

〔長壽寺文書〕○江近

文明九年四月十二日

市原□(庄カ)長□(善カ)寺事、爲祈禱所之間、段錢課役等之事、先年令免除候訖、幷寺□(角カ)檢斷於坊領者、任寄進之旨、爲寺家速可被申付、向後不可有相違之狀如件、

文明九年卯月十二日　（六角高頼）（花押）

當寺

衆徒御中

甘露寺元長參向

十三日、庚戌、法勝寺大乘會、

〔親長卿記〕八　四月十二日、晴、下坂本、明日依有大乘會、元長參向之故也、

十三日、晴、濱邊歷覽、申剋許告始行之由、鎰取來告、仍於彼岸所、元長著裝束參向、予、中御門中納言等令同道聽聞、異躰不可說了、

十四日、陰、自坂本歸洛、東向、予息女令同道上洛、

平塚近邊ニ放火ス

太田道灌、豐島泰明ヲ武藏平塚城ニ圍ム、兄豐嶋泰經、兵ヲ率幷テ之ヲ救フ、道灌、江古田原ニ邀擊シ、泰明等ヲ殺シ、尋デ、石神井、練馬、小澤ノ諸城ヲ陷ル、

〔太田道灌狀〕○肥前

○上略、十日ノ條ニ收ム、同十三日、自江戸打出、豐島平右衞門尉要害ニ致矢入、近邊令放火打歸候處、兄勘解由左衞門尉相供、石神井、練馬自兩城打出襲來候之間、返馬於江古田原令合戰、得勝利候、平右衞門尉以下數十人討捕、翌日石神井要害押寄、一往之儀候上者、可服先忠旨、相和候之處、十八日、罷出對面仕候、此上者可崩要害旨申候之處、結句相誘僞歷然候之間、廿八日、外城攻落候、然間其夜中令沒落候、○中略

泰經石神井練馬兩城ヨリ打出ヅ

道灌石神井城兵ニ降參ヲ勸ム

外城攻落ス

一相州小澤要害、同十八日攻落候、

〔宗碧〕文明十一　十一月廿八日　道灌判

謹上　高瀨民部少輔殿

〔宗碧〕山內家式部丞イ

〔鎌倉大草子〕○上略、十日ノ條ニ收ム、同（四）月十三日、道灌江戸ヨリ打て出て、豐島平右衞門尉ゟ平塚乃城を取卷、城外を放火して歸々る所に、豐島ゟ兄の勘解由左衞門を賴まる間、石神井、練馬兩城ヨリ出攻來りけるは、太田道灌上杉刑部少輔、千葉自胤已下、江古田原、沼袋と云所ゟ馳向ひ合戰して、敵を豐島平衞（右脫カ）門尉を初として、板橋、赤塚以下百五十人討死す、同十四日、石神井乃城へをし寄責けるを、降參して、同十八日對面して、要害破却をへきよし申おゝら、亦敵對乃樣子に見えゝるハ、同十八日に責おとを、金子掃部助ゟ籠々る小

平塚城外ニ火ヲ放ツ

江古田原沼袋ニ戰フ

澤の城も、同日に攻落せ、

〔鎌倉大日記〕文明八(九)丙申、(四月)同十三日、江高原合戰、

〔古文書〕一　石神井系圖

宣泰　豐島勘解由左衛門、
　法名明繁、
　泰經　同勘解由左衛門尉、
　　法名道翁、
　　泰明　同平左衛門尉、法名光盛、

〔豐島家系圖〕武藏秩父流

宣泰　勘解由左衛門尉、
　法名明繁、
　經祐　新次郎、七郎左衛門尉、
　　法名常見、
　泰經　豐島勘解由左衛門尉、
　　法名道翁、

石神井及練馬城主、

文明九年四月十四日、於江古田原、沼袋、爲太田道灌、上杉朝昌、三浦介義同、千葉次郎自胤戰、一族各戰死、同十八日、石神井城落城、

泰明　平右衛門、

豐島郡平塚城主、

文明九年、與兄同戰死、今其所有古塚、稱豐島塚、

康保泰　豐島勘ヶ由左衛門尉、

屬小田原北條家、采邑二百卅二貫八十二文、



〔宮城系圖〕

宣泰

泰經　豐島勘解由左衛門、

先祖以來代々居住武州豐島郡之內石神井、練馬兩鄕ニ取立城地云々、

屬長尾尾張守景春、度々有武功、從上杉龍若主賜書、是上州網尾河原合戰被疵、且家人多討死、依有粉骨之働也、法名道翁、

泰明　豐島平右衛門、兄泰經爲養子、

某　豐島七郎左衛門、在于長尾家而度々之戰場有武功、

泰明　豐島平右衛門、美作守、

後年上杉管領職沒後、暫在于武州忍、成田下總守長泰之所、其後屬小田原北條家、而度々有武功、

○景春ノ黨矢野兵庫助等、河越城ヲ攻メントシ、苦林ニ陣シ、道灌等、勝原ニ逆ヘ擊チテ、之ヲ破ルコト、十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔武藏州豐島郡龜頂山密乘院三寶寺緣起〕○武藏

道灌砦ヲ構ヘタル地城山

○上略又當三寶寺西南、有愛宕大權現之林岡、東西二百餘歩、南北三百餘歩也、此地者太田道灌、文明年中、對城主豐島泰經構砦、且勸請愛宕大權現而祈軍利所之舊趾也、故里人相呼曰城山、前懷關川、後負遲井(ヲソノ井)、北有小阜、士峰入吟眸、南過數百歩有直塘、名道灌塘、太田氏攻擊此城之時築以爲江戸城之直路、○中略

道灌塘

豐島氏累世ノ城跡

往昔三寶寺者開基下石神井邑、此地者元豐島氏累世所住城跡也考其家譜、桓武天皇第二皇子高望王後胤豐島武常之孫豐島三郎康家、其子三郎壹岐權守清光、自其以來領武藏國內、武威鷹揚相續、元弘年中、豐島左近大夫平景村住此城領五郡、豐島足立多摩兒玉新倉隨京都之下知、屬關東管領、文明年中、長尾景春叛管領上杉顯定、籠當國鉢形城擧旗、當城主豐嶋勘解由左衞門尉泰經、舍弟平右衞門尉泰明、與景春在當城幷練馬兩城、塞江戸川越之通路、同九年四月十三日、道灌自江戸城討出、襲豐島泰明之平塚城、放火外郭去、豐島泰經自石神井城討出、於中途相支、上杉朝昌、千葉介自胤、三浦介義同以下、於江古田原、沼袋邊短兵急交攻戰、故泰經泰明始一族、板橋赤塚以下百五十餘人、悉苦戰殞命、石神井殘兵力竭、同十八日落城、道灌破却城郭、以豐島累代相傳之五郡之地、頒與於諸將去、其后移寺於此古城跡者也、

三寶寺ヲ豐島氏城跡ニ移ス

平塚城

〔新編武藏風土記稿〕十七淵宿附七豐島郡之九岩淵領岩持添新田上中里村　平塚城跡今其所在定カナラス、城官寺ノ邊トモ、又西ケ原御殿山トモイヘト、皆正キ證ナシ、今按ニ、平塚明神ノ後背ハ、イト高キ地ニテ、其南ノ方ニ蟬坂ト云アリ、或ハ云、攻坂ノ轉誤ナリト、又小名角櫓ト唱ルト呼ヘハ、此邊推ナヘテ城蹟ニシテ、廣キ構トミヘタリ、○略下唱ル地、及小渠ニ架セル橋ヲ外輪橋ナ

十五日壬子安禪寺觀心尼ヲ以テ、再ビ景愛寺住持ト爲ス、

〔親長卿記〕八　四月十八日、晴、參安禪寺殿、去十五日、景愛御再住、珍重之由申入了

〔諸寺院上申皇親事蹟〕安禪寺中古皇女御領住次第、後花園帝皇女、奉稱觀心法尼、御母嘉樂門院、

十六日癸丑賀茂社神主彌久ニ命ジテ、賀茂貴布禰社領境內下地ヲ違亂スルモノアルヲ停メシム、

〔親長卿記〕三十二　貴布禰祝公久申、境內貳町餘下地事、號勝久縣主舊借請人、有違亂之輩云々、被定神事足之上者、無謂之次第也、借物請人事、有子細可申上之處、押妨彼下地之條、太以不可然者、堅加成敗、可被致神事無之儀之由、可申旨候、恐々謹言、

四月十六日　　親繼判

賀茂神主殿

十七日、甲寅、前内大臣菊亭、敎季、僧圓林ノ其所領近江新莊ノ地ヲ押領スルヲ幕府ニ訴フ、

〔親元日記別錄〕（文明）中

清泉州一菊亭家雜掌　一九四十七

江州高嶋郡領家職新庄内、卽方名田四段事、於借錢者、返辨候處、留置借書、號永代沽券錢主智熒僧、今號凰林、押領云々、

合一齋五兵八五

十八日、乙卯、權大納言大炊御門信量、參議飛鳥井雅康、窮困ニ依リ、相尋デ京都ヲ去リ、地方ニ之ク、

〔親長卿記〕八　四月十八日、晴、○中略　中（大炊御門）右大將信景（量）依窮困、下向北州之知行分、

大將亞相等共不辭云々、

十九日、（飛鳥井）右兵衞督雅康依窮困在國云々、不知在所、

〔實隆公記〕四　四月十八日、乙卯、陰、早旦退出、師富朝臣來、入夜向飛鳥井、明日在國云々、爲暇乞也、歸路於柳原雜談有一盞、歸路參竹園、被出御盃、滋野井同祗候、及天明退出、

三條西實隆雅康ヲ訪ヒ別ヲ告グ

〔公卿補任〕四十二

權大納言正二位藤信量、卅六、右近衞大將、

參議正三位藤雅康、四十二、右兵衞督、出雲權守、

十九日、丙辰、島津友久、伊作久逸、島津國久等、契狀ヲ島津忠昌ニ納レ、尋デ、武久モ亦契狀ヲ遺リ、共ニ一味同心センコトヲ約ス、

〔薩藩舊記〕前集二十八　案文在之

契狀

一天下雖如何樣轉變候、武久（島津忠昌）於一味同心可仰申事、

一一家中御內國方、可爲無爲無事事、

一如此申談候處、自然和讒凶害出來候ハ者、相互承可申披事、

若此條々僞申者、上者梵天帝尺、四大天王、殊者日本鎭守伊勢天照大神宮、熊野三所大權現、正八幡、三所大菩薩、諏訪上下大明神、稻荷五社大明神、各々御罰可罷蒙候、

友久等契狀

一家中無爲相互扶助

于時文明九年卯月十九日

（宗藩）相州家　相模守殿　友久有判
（同）伊作　式部大輔殿　久逸有判
（同）薩州家　薩摩守殿　國久有判
（同）豐州家　修理亮殿　忠廉有判
（同）知覽　佐多殿　忠山有判
（同）大島氏　次郎三郎殿　忠德有判
新納近江守殿　忠續有判
（同）加治木　三郎五郎殿　滿久有判
樺山殿　長久有判
北郷殿　義久有判

島津忠廉
大島忠德
新納忠續
樺山長久
北郷義久
武久ノ契狀

## 〔薩藩舊記〕

前集二十八　正文在之

契狀

一天下如何樣雖轉變候、此旁々一味同心可申談事、

一一家中國方、可爲無爲無事之事、

一如此申談候之處、自然和讒凶害出來候者、相互可申披事、

若此條々僞申候者、上梵天帝尺、四大天王、殊日本鎭守伊勢天照大神宮、熊野三所大權現、正八幡、三所大菩薩、諏訪上下大明神、稻荷五社大明神、各々御罰可罷蒙候、

文明九年卯月廿一日　武久（花押）

相模守殿
式部大輔殿
薩摩守殿
修理亮殿
佐多殿
次郎三郎殿
新納殿
加治木殿
樺山殿

〔島津國史〕十二圓室公　十九日（四月）、友久、國久、伊作久逸、島津修理亮忠廉、佐多忠山、島津次郎三郎忠德、新納忠續、加治木三郎五郎滿久、樺山長久、北郷敏久（敏久始名誼久、後改敏久、而此處原文云誼久、嫌於曾祖父誼久、故書敏久、敏久已見前年）、凡十人相與盟曰、凡我同盟、奉公不貳、有渝斯言、諸神殛之（據圓室公舊譜、觀此則友久亦已降矣、島津忠德見前年注）、忠廉、滿久、皆季久之子也（據島津內膳家譜、季久使第三子故二子皆與盟、然季久死於此年八月六日、是月尚在、而不與盟者、豈此時既老乎、抑亦疾病不能涖盟乎）二十一日、公與友久、國久、久逸、忠廉、忠山、忠德、忠續、滿久、長久、敏久盟曰、自今以後、君臣同體、修和好、遠讒間、有渝斯言、諸神殛之（據島津內膳家譜、）

〔嶋隱漁唱〕今春將有薩陽之行、一香獻詩神、以祝彼國之安平云、

肥陽城外薩陽城、聞說今年收甲兵、萬里雲飛駕言邁、風流太守愛僧清、

予將赴薩州、一日有客胥告曰、彼國干戈未收、路途艱難、雖舟行必有其勞乎、仍作是詩、

一錫西尋菩薩泉、干戈塞路不通船、青山綠水功勞外、何處茅菴食與眠、

文明十四（紀）戊戌、二月二十有一日、達薩陽龍雲精舍、忽脫艸鞋詣函丈、左右見相顧之厚、寔重主之命也、一夕坐話之次、求予近作、蓋詩者志之所之也、

玄樹薩摩ノ安平ヲ祝ス

前年在後筑之元旦、燒香面南、以祝是國之安平、其詩袖中之所携也、出以備尊覽、主盟禪師感和、於是次其韻作小詩、且記觀光之初筵也、

花柳風前春滿城、太平家國不言兵、白頭老矣紅塵客、纔入此門心跡清、

○季久、國久ト共ニ、忠昌ニ背キテ、宮內、敷根、清水等ヲ攻メ、又忠昌ノ部將伊集院三郎左衞門尉ヲ牛山城ニ攻メテ之ヲ陷ル、コト、八年四月八日ノ條ニ見ユ、

## 二十日、（己巳）皇女大慈光院宮二尊院ニテ御得度、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　四月十九日、わゝとの（大慈光院宮）の御くしをましよ御いてあり、御さゝ月ゐいる、

廿日、わゝとのゝ御ゑゆつけゐふよて、五ゐやうとのゝうちよ、二そん院いらせさまふ、それよてをるゝ〳〵ととけさせわしまに、御ふせに御ほん（心）よきんしむ寺へのてん（殿）ゑ（心）の物五百疋をゑ、この御所よりいさるゝ、このほゝ御ようくゐんもゐいらるゝ、新すけ殿ゑうとう見ゐいらるゝとて御ゐいり、をへゝ御れ井よなる、御ミやけ〻御さるとてをりゝミよてゐいる、御さんしゆよゝ御ちやハゝりゐいらせらゐゝ、御ゐいりある御人さち、御

戒師善空

第一皇女

ゐとへはゐれいれゐいらせられゐ、御さゐのゐいし〳〵れき〳〵の御さゐなり、れとこさちもしこう、大そもし御さゝいりなるより、御寺へハ御ゐいりれし、御心よりゐゐなるよしおほせられゑ、御やとへめす、されく〳〵と御ゐいありて、れもしろきよ、御物ゐさりなと御申ゐり、御さゐ月ゐいる、ゐしやう院もまいらせさまゐて、めゐされよし申さるゝ、れとこさちもこの御所へも御れゐとも申さるゝ、御所〻〻よりも御申、二そん院はるやかて御れゐよゐこう、御さゐめんゐゐ、

廿一日、れのとのゝ御ちやとん二ゐいらるゝ、御うれしゐりゐいらゐゝ、

〔實隆公記〕四　四月四日、辛丑、雨降、定意論師入來、二尊院來八日以前可被上洛之由、依勅定大慈光院宮御出家爲御戒師云々、飛脚馳遣之由被相談、及晩師富朝臣來、清談移刻、

廿日、丁巳、晴、今日大慈光院宮今上第一皇女、御得度也、於二尊院有此事、爲奉見訪參入、其儀終而各參彼御寺盃酌、及黃昏、歸路參內、珍重之由申入之了、

〔親長卿記〕八　四月廿一日、俄雷鳴甚雨下、河原洪水云々、及晩參內、下姿、岡殿喝食御落餞珍重之由申入之、

義政夫人御服一襲ヲ上ル

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月九日、れゐとのゝ御所ゐ、御さゐの御方よりゐ御ふく一ゐさゐゐいらせらるゝ、御いゐゐゐとく御さゐ月ゐいらゐゝ、

○得度前名殘ノ宴ヲ開カルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　四月六日、れゐとのゝ御名こりをしみよ、ふしゝとのくろき御所〻〻、ゐむゐしのとうゐんとの、女房さち、きう上らゐゐしめて、こと〳〵く御人そ、れとこよゐ源大納言、ゝん部卿、右宰相中將、御ゐゐらけの物よゝ、御さる御てうしなとよゐゐいる、平やう院も御人そ、きさこうち殿より三御ゐゐらけ一ゐゐいる、ゐむゐしむきよて御ゐし〳〵とゐいる、ふしの御ゐゐん、きよくとうゐんそ御まへえめに、ゐやうそとの□けんそんなとはつよのまゝてめに、ゐけの井、頭中將、左少辨めしゝ、うさゐせらるゝ、

七日、昨日のまゝよて、ふしゝ殿、ゐんせ寺殿（ウ脫カ）、とん花院殿、ゐしやう院なとよて御さゐ月ゐいる、大そもしゐ、頭辨ゐやうしんとけとゐさとへいつる、

〔實隆公記〕四　四月六日、癸卯、天晴、小浴、晝間有召之間、著束帶參內、安禪寺宮以下女中衆等申御沙汰也、源亞相、滋野井、民部卿、右宰相中將、元長、以量等

十度飲

祗候、大飲及深更、御一獻之後、若宮御方、伏見殿、權大納言典侍等乘船有興、天明之後退出、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　四月十七日、御ゝつしき御所へ、やふ左中將御なこりをしゝと事、御ゝ日ら(ヶ脫カ)の物御てうしともゐいらるゝ、御ゐし〳〵と十とゐいりなとありて、なゝハしめしまゐせらるゝ、ゑんさう寺とのならしまに、

三條西實隆御得度ヲ賀ス

〔實隆公記〕四　四月十七日、甲寅、晴、晚來雨時々灑、今日入風呂、及晚有召、則著束帶參內、御破子進上之、有十度飲、新大納言、源大納言、予等祗候、長直朝臣

狂言

狂言催逸興者也、

○大慈光院宮ノ上洛セラルヽコト、三月二十日ノ條ニ見ユ、又寶鏡寺喝食御得度ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔實隆公記〕四　四月十五日、壬子、晴、今日法慶(寶鏡)寺殿御掛頭云々、

五月二日、戊辰、陰、○略中參寶鏡寺殿、去廿八日御得度也、珍重之由申入了、方丈兩御所共御對面、歸路向頭蘭亭、少時雜談則歸宅、

右近衞中將久我豐通ヲ權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕三　四十　權中納言從三位源(久我)豐通、十九、四月廿日任、元右中將、

〔宮內省圖書寮所藏文書〕大議　中納言參議等宣旨

文明九年四月廿日

宣旨

右近衞權中將

宜任權中納言

權大納言藤原爲富奉

口宣

口宣一帋、右近衞權中將源朝臣宣任權中納言事、奉入之、早可被下知之狀如件、

四月廿日　權大納言(花押)

四位大外記局

追申(紙)

權中納言辭退替候也、

請文

跪請

宣旨

文明九年四月二十日

右近衛權中將源朝臣

宣任權中納言事

右宣旨、早可令下知之狀、跪所請如件、

四月廿日　　大外記中原師富 請文

從三位行右近衛權中將源朝臣豐通

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣、奉勅、件人宜令任權中納言者、

文明九年四月廿日　掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

〔親長卿記〕三十二

賀茂社ニ命ジテ、段錢ヲ悲田院領ニ課スルヲ停メシム、

先日被仰出候悲田院領事、仰遣社家之處、任寶德例相懸之由申之、件時免除候歟、可被召下支證之由、可有御披露候、謹言、

四月十七日

民部卿殿

寶德ノ例ニ依ル



賀茂段錢事、悲田院支證如此候、可免除之由、重可被下知給之由、被仰下候也、

謹言、

四月廿日

藏人辨殿

悲田院主某ニ備前藥師寺住持ヲ安堵セシム

就悲田院段錢事、重寺家申狀如此、可有御下知候也、謹言、

七月十七日

藏人辨殿

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月十三日、戊寅、晴、略○中事、同院主申備前藥師寺住持安堵之綸旨事、可書遣由勅答、反錢事堅可被仰賀茂傳奏由同勅答、小時退出、

二十四日、辛酉、賀茂祭ヲ停ム

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　四月廿三日、かもより神事よあそばすひと

もまいる、

廿四日、かもれまつり、御さゝ月まいる、ふしミとの、ちんをう寺との、をゝ殿

義政菊花梅ヲ進獻ス

御ゐしくゝゐるゐ、あふひのけさをらるゝ、御のゝもゐ、むろまちとのよりきくのさゝさる、梅なゝらるゐいる、あんをん寺殿ゐいらるゝ、

〔親長卿記〕八　四月廿四日、晴、御番、予祗候、今日賀茂祭也、葵桂自所々送之、

〔實隆公記〕四　四月廿四日、辛酉、晴、早朝退出、終日無事、今日賀茂祭日也、當時無其形之條可歎之、

一乘院教玄申沙汰ス

二十八日、乙丑、一條兼良、近衛房嗣等、大和根本成院、淨瑠璃寺等ニ遊ブ、

〔尋尊大僧正記〕七　四月廿八日、

一依一乘院殿申沙汰、(一條兼良)(近衛房嗣同政家)禪閤陽明御兩所、鷹司左府(政平)、中川寺、號根本成院、西小田原寺號淨瑠璃寺、御遊覽云々、一獻如形彼兩寺調進之畢、



五月大盡丁卯朔

一日、丁卯、御祝、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月一日、あさ御さゝつきのちんの御いゐ井も、いつものことし、くら人こんもをたはへとてゐいらに、きう上らぬ御ゐいり、

祗候ノ人々

〔實隆公記〕四　五月一日、丁卯、天晴、晩頭著束帶參內之次、參三時知恩院、今夜御祝祗候人々、新丞相、源丞相、戶部、下官、言國朝臣等也、退出之次參竹園、

三日、己巳、山城三鈷寺ニ命ジテ、其末徒ノ修學年限ニ依リ、香衣香袈裟著用ノコトヲ定メシム、

〔三鈷寺文書〕○山城

香袈裟ハ修學滿三年香衣ハ滿七年

末流香衣香袈裟之事、修學滿三年、香袈裟用之、又滿七年香衣著用之事、如寬元永宣(旨脫カ)彌鑑法器、從本寺可令許容之旨、添天氣之所候也、依執達如件、

左中辨(廣橋綱光)(花押)

文明九年五月三日

本山參鈷寺衆僧中

五日、辛未、賀茂競馬ヲ停ム、尋デ、之ヲ行フ、義政、夫人日野氏及ビ義尙往テ之

小河御所近邊光物アリ

義政夫人ト同車

桟敷ヲ觀音堂ニ構フ

西賀茂ニ於テ酒宴

正禰宜ノ座ニ正祝著ス

ヲ觀ル、

〔親長卿記〕八　五月五日、甚雨下、○中略今日競馬延引之由、有風聞、可尋子細、

〔長興宿禰記〕上　五月五日、雨下、賀茂競馬延引、室町殿渡御、□□□有御見物之由、兼日被仰出、回祿以後祐□等裝束紛失、近日於社頭堺内懸反錢□□野宮本反作官新調之處、未周備、旁無用意延引云々、今夜甚雨之時分、小河御所御近邊光物有之、暫時雷鳴、人々見之云々、賀茂競馬事

廿二日、雨下、午刻晴、今日賀茂競馬也、式日延引、室町殿御成御見物、御息宰相中將殿、御臺一品同御出有、御同車、准后御臺、將軍別車也、其外出車等有之、准后御供騎馬、將軍御供衆歩行云々、御桟敷被構觀音堂、於御桟敷有一獻、畠山左金吾(政長)被參桟敷、諸大名軍勢川原警固之、侍所赤松在御留守、事訖於西賀茂上轉寺御酒宴、畠山金吾雜掌申沙汰也、入夜還御、

〔親長卿記〕八　五月廿二日、晴、朝間細雨下、番也、召進元長、賀茂競馬、今日被執行之、室町殿御見物之故也、去五日依仰延引云々、陵遲之至也、

六月廿九日、晴、○中略繼平縣主來、賀茂神事之時、正禰宜不參之時、權禰宜必著正禰宜座之處、今度無謂競馬之時、正祝著了、雖可申所存、室町殿渡御間、存無爲之儀、不申是非、於向後不可叶云々、所詮可注申先例之由、可仰社務之由(申聚カ)遣、

○座次相論ノコト、十年九月六日ノ條ニ見ユ、

枝ニ貝ヲ附ク櫨

〔實隆公記〕四　五月廿二日、戊子、朝間雨降、自晝霽、今日准后大樹以下賀茂競馬御見物云々、今日依召參御所、終日祇候、

〔歷代殘闕日記〕七十八重胤記　五月廿二日、雨下、晝天氣晴、

一公方、御方御所、御臺各賀茂御出、五日競馬延引、今日在之由、御サツシヤウ畠山モト大夫沙汰例也、惣而此競馬五日ナキ事二度(四カ)、其ハ天下ワルキトキ也、延引之義モナシ、リンシノハコレナク、今度始也、今日雨下ナントモ只事ニナシ、今朝五時賀茂社鳴動、ツイニ御出候也、御車三兩也、各御太刀ハキスワウユハカマ、公方御太刀細川右馬頭、右手ニ持テ馬ニノラル、御方御所御太刀細川九郎殿、コレモ右手ニ持テ馬ニノラル、

節供御祝、義政夫人日野氏等物ヲ獻ズ、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月五日、御さいより枝々ゝいつきて、れもしろきふをいゆいる、をり五ゝう、御さる三ゝゆいる、そけ殿より御ゝいまいる、御さゝ月いつものことくゆいる、めてさし、々ふの御ひつし、こんすけと

のよりまいる、御さうしゝ足、源大納言よりまたまいる、

〔實隆公記〕四　五月五日、辛未、雨降、佳節珍重々々、早旦浴蘭湯、及晩著束帶參内、○中略今夜御祝祇候輩、新亞相、源丞相、戸部卿、右左相公羽林、阿古々丸（祈）、下官、言國朝臣、元長、以量等也、今夜爲公兼卿番代祇候了、

祇候ノ人々

七日、癸酉勅題ヲ廷臣等ニ賜ヒ、大神宮法樂和歌百首ヲ詠進セシメラル、

百首和歌題支配

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　四月廿九日、神宮のゐうらくよ百しゆの御さ井、あゐさこあさへまいらるゝ、御むろへもまいる、

五月七日、神宮のゐうらくの御百しゆ、々ふゝさ給らるゝ、よへより御神事よ事、けさをんしの御をいよなる、

〔親長卿記〕八　四月廿九日、晴、依召參内、仰云、内侍所幷賀茂社御法樂和歌可有御張行、可爲如何哉、予申云、御敬神之事、有何事哉、内侍所事ゟ先規如何、只可爲神宮法樂歟、有其謂之由有仰、被遊勅題、百首、予書支配幷上書等少々賦遣了、賀茂事者此御法樂出來之後、可有御張行云々、御人數男女三十五人也、

内侍所及ビ賀茂社法樂和歌張行ノコトヲ甘露寺親長ニ諮問セラル

勅題百首



五月五日、甚雨下、予依所勞不參内、召進元長了、神宮御法樂詠歌今日進上之、七日、雨下、參内、番也、今日神宮御法樂百首寄書、予書之、於正本御短尺者不被出之、

親長詠進ス

〔實隆公記〕四　五月一日、丁卯、天晴、早旦行水、自禁裏太神宮御法樂題（勅題）被下之、

五日、辛未、雨降、○中略今日御法樂和歌詠進之了、

三條西實隆詠進

八日、甲戌、邦高親王、二十首御續歌行ハセラル、

〔實隆公記〕四　五月八日、甲戌、雨降、今日斷鹽、及晩參竹園、宮々渡御、有廿首御續歌、

十一日、丁丑、相應院惠助、加賀芝山寺ニ寂ス、

〔大乘院日記目錄〕三　五月十一日、相應院門主惠助入滅、廿八、

〔尋尊大僧正記〕七　六月十六日、

一安井下向、相應院門主惠助（助）、去月十一日入滅云々、廿八歲歟、於加賀國芝山寺也、予舍弟也、故崇光院法皇御猶子也、

尋尊ノ弟崇光院御猶子

〔系圖纂要〕九　藤氏　一條系圖　三

世系

兼良

- 冬良
- 教賢 母、寶池院、權僧正、
- 尋尊 母、大乘院、大僧正、法務、別當、永正五年五ノ二入、號後大慈三昧院、
- 嚴寶 母、隨心院、大僧正、法務長者、別當、准后、
- 良鎭 母、曼殊院、大僧正、別當、
- 桓澄 母、乘院、權僧正、
- 惠助 母家女、相應院、
- 政尊 母、圓滿院、大僧都、
- 女 母、專稱院、關白政平公政所、從三經子、

日野苗子見舞

十三日己卯、義政疾アリ、尋デ癒ユ、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月十三日、むろまち殿けさふゝ〳〵しく御もうきと申、きさこうちとの御ゐいり、御心もとなきよし御ことつけよ申さるゝ、けさよりそらハれてめてさし、

十四日、むろまち殿御もうき、御さゝの御ゝさへ、すけとのゝ文よて申さるゝ、御ゑんのよし申さるゝ、

十六日、ゐうらくの御さゝ井、むろまちとの御もうきゆへ、御さゝ井えりへゐいらるゝに、えやよゐ御やう申さるゝ、よゐてむろまち殿へもゐいらるゝ、

○賀茂社法樂和歌ヲ行ハルヽコト、二十五日ノ條ニ見ユ、

景春上野ノ兵ヲ率ヰテ五十子梅澤ニ陣ス

十四日、庚辰、太田道灌、上杉顯定、同定正ヲ上野那波ニ迎ヘ、長尾景春ヲ武藏用土原ニ擊ツ、景春敗レテ鉢形城ニ入ル、

景春ノ兵敗走ス

用土原ノ戰

〔太田道灌狀〕○肥前

一○中略、四月十三日ノ條ニ收ム、如此勵武略、御迎參奉引越利根河、五十子可被成御陣所旨存候處、景春上州勢衆引率、五十子梅澤差寄張陣候、忠景如被申者、梅澤へ可懸之由、切所事候之間、不可然候、道灌如存知之者、自次郎丸打上鉢形陣イ與御敵城間、可入馬樣成威候者、慥御敵原中可打出候歟、於途中可有御合戰旨存、（五月）十四日曉者、忠景不及相談、打出候處、臨其期樣々被申候キ、清水河畔御陣場之事者、成彼大河、被成前岡ナシイ候之間、其日ゟ御滯留候者、可爲御難儀旨存申拂、次郎丸へ打上立イ候間、被進御旗候、如案凶徒落行候之間、至用土（武藏大里郡）原ニ返御馬、於御眼前各摧手討亡大軍、向殘黨等、富田ニ被陣張候之處、○中

顯定定正等甘糟原ニ陣ス

略

（宋書）「文明十一」十一月廿八日　（宋書）「山内家人式部丞イ」高瀨民部少輔殿　謹上　道灌判

〔鎌倉大草子〕長尾景春ハ、上州勢を引卒して、五十子梅澤といふ所に陣を取、太田道灌所々ゟ軍ゟ打勝て、上州那波乃庄へ、兩上杉の迎ひゟ來り、同五月十三日、利根川を越へて、五十子へ歸陣す、長尾景春是を見て引退ける戎、兩上杉、長尾忠景、太田道灌、板倉美濃守、大森信濃守已下、用土原へ押ゟけ合戰しゟ悉打勝て、景春ハ鉢形乃城へ引退き、殘すくゟく（宋書「に」）討ゟさゟきる間、鉢形を攻落へき由にて、兩上杉ハ富田、四方田、甘糟粕原（所）ゟ陣を取ける、

〔鎌倉大日記〕文明九年五月十三日、那波越利根河、同十三（四）日、於武州用土原互相戰、死亡不知數、景春打負鉢形要害へ入込、然則兩上杉甘糟原へ張陣、被責鉢形所、〇略下

〔梅花無盡藏〕六　靜勝軒銘詩幷序（武州江戸城太田春苑道灌號靜勝軒、其南掛洛詩板、其東掛此詩板、）

〇略上康正乙亥（元年）、騷屑以來二十有餘霜、高揚帝旗、陣武之五十子、禍自戲下起、公（道灌）之爺道眞倡將師、屯兵於上陽赤城之麓、河北矣、戲下兩岐相分、其一者退憑嶮於武之鉢壘、（有城、號鉢形、）公在江戸、緩頰慮和兩岐、厥學不能達焉、遂守忠孝之至道、一怒著鞭自南馳、引將師渡河而出、同於針原（有原、名針買、）酣戰、鋒鏑凝血、雷霆扶威、公凱歌未休、追而圍鉢壘、〻〻求救於東兵、不日其兵鳴鼓而相應矣、〇略下

針原ニ戰フ鉢形城ヲ圍ム

長野爲業景春ヲ援ク

顯定鉢形城ニ入ル

定正江戸城ニ入ル

〔松陰私語（一名五十子記）〕五　翌年（文明九年）正月十八日、五十子諸將退陣、越州陣者、白井ニ張陣、山内、河内ニ張陣、河越、細井口ニ張陣、當方者金山ニ在城、同五月八日、武州於針谷（榛澤郡）原合戰、山内河越同心ナリ、景春ニハ當國中一揆、旗本長野左衞門尉爲業同心、其日之合戰山内ニハ大石源左衞門尉討死、景春方ニハ長野左衞門尉討死、其外兩方之死亡不知其際限、山内者勝合戰之故鉢形、被入馬、景春敗軍畢、河越者江戸、被入馬畢、

〔鉢形之由來竝町田之年譜〕〇武藏（源）經基朝臣始テ城ヲ築テ、數釜岡ト號シ在城、後鎌倉右大將家御治世、賢臣畠山次郎太夫重忠住シ、其後年有テ、上杉管領乃臣長尾爲玄入道景春築之、文明五癸巳城ト成住ス、同九年、上杉顯定、景春ヲ攻ル、景春古河援（ニ脫カ）兵ヲ乞、

〇景春ノ黨矢野兵庫助等、河越城ヲ攻メントシ、若林ニ陣ス、道灌之ヲ勝原ニ擊破スルコト、四月十日ノ條ニ見ユ、

長野爲業景春ヲ援ク

顯定鉢形城ニ入ル

定正江戸城ニ入ル

數釜岡

〔參考〕

用土原

〔新編武藏風土記稿〕二百三十三　鉢形領之一　榛澤郡之四　用土村新附持番　用土村ハ、江戸ヨリ廿一里、民戸二百三十、東ハ大谷村、西ハ那賀郡猪俣村、南ハ本郡飯塚村、北ハ本郷村ナリ、東西一里餘、南北十七町程、村内ニ鎌倉古街道アリ、小前田村ノ方ヨリ入リ、兒玉郡八幡山町ヘ通ス、鄕名前村ニ同シ、庄ハ杉森ニ屬セリ、當所往古ハ用土原ト稱セシ廣野ニテ、元弘建武ノ頃ハ、專ラ戰爭ノ地ナリ、又文明九年長尾景春五十子ニ陣ス、太田道灌上杉ヲ迎入、長尾忠景、板倉美濃守、大森信濃守、用土原ヘ押掛云々トアリ、其後、藤田右衞門佐康邦、男衾郡鉢形城及當郡花園城ヲ養子氏邦ニ讓リ、己ガ身ハ此所ニ引籠リ、城ヲ構ヘテ在城ス、是ヨリ地名ニヨリテ、用土新左衞門ト改メ稱セリ、按ニ、用土ハ、往古用土鄕用土原ナトイヒテ、殊ニ廣キ地ナリシヲ、其後次第ニ墾闢シ、村落ヲナセシ頃、八鄕ニ分チシト見ユ、此唱ヲ負ヘルハ數村ナリシカ、イツシカ唱ヲ失ヒ、本鄕ノミ當村ニ殘レル者ナルヘシ、〇下略

鎌倉古街道

針ヶ谷

〔新編武藏風土記稿〕二百三十二　榛澤郡之三　附持番　深谷領之二　針ヶ谷村新田　針ヶ谷村ハ、鄕庄ノ唱、前村（大鳥鄕藤田莊）ニ異ナラス、江戸ノ行程二十里餘、家數六十一、東ハ樫合村、西ハ今泉村、南ハ本鄕村、北ハ山川村ナリ、東西七町半餘、南北十町許、村内一條ノ道アリ、兒玉郡本庄宿ヨリ比企郡小川村ヘ通ス、是ヲ鎌倉古街道ト云傳フ、〇下略

鎌倉古街道

甘糟

〔新編武藏風土記稿〕二百三十六　郡之二　那賀　甘粕村　甘粕村ハ、正保改ノ國圖等ニハ甘糟ニ作ル、中澤鄕八幡山領ニ屬シ、庄名前（松久莊）ニ同シ、江戸ヨリノ行程二十二里、民戸八十、東西十二町、南北十五町、南ハ中里村、西ハ水部村、北ハ古郡村ニテ、東ハ榛澤郡用土村ナリ、村内ニ僅ノ溜井ヲ設テ水田ニソヽケリ、按ニ當所ハ古ヘ甘粕野次廣忠等ノ居住セシ所ト見ユ、〇下略

十八日、申、前權大納言葉室敎忠ノ罪ヲ赦シ、官位ヲ復ス、

〔公卿補任〕四十三　前權大納言正二位藤敎忠（葉室）、五十五月日、自敵陣參入勅免、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月十八日、さにのえいろ（む）、この程てきよゐり、しゐかうさん申〻、ゑゆつし申、御さゝめんゐり、かしこまり申、

甘露寺親長幹旋ス

舊跡谷知行分山名被官人押領

〔親長卿記〕八　五月十九日、晴、葉室前大納言（敎忠）、今日公武出仕歸參事、先日予執申勅許、今日令同導（道）參內、有御對面、

八月三日、雨下、葉室前大納言（敎忠）自番退出來、舊跡谷知行分事、山名被官人違亂事被仰出武家之樣可申云々、調樣書狀可奏聞之由仰了、及晩書狀到來、

政郷ニ城ヲ攻略ス

奏聞可被仰武家云々、

五日、雨下、彼女房奉書、葉室前大納言許可參御禮之由仰了、今日祗候申入云々、其次第、（マヽ）

六日、雨下、仰云、葉室前大納言申問事、被遣女房奉書於勸修寺大納言、被申武家之處、勸修寺故障之由申之、可被如何哉之由有仰、追可申入返事之由申入了、及晩葉室前大納言來、仰之趣仰之、何樣申試勸大、追可申云々、

○教忠西軍ニ黨スルヲ以テ、官爵ヲ削ラルヽコト、應仁二年十二月五日ノ條ニ見ユ、

幕府、伊勢國司北畠政郷ニ命ジテ、北伊勢ヲ管セシメ、又改メテ一色義春ニ交付ス、是日、政郷、兵ヲ發シテ義春ヲ攻メ、之ヲ破ル、

〔尋尊大僧正記〕七　五月六日、大雨下、

一東門院禪師明日可下向勢州之由申之、國司（北畠政郷）近日北方ニ出陣云々、

廿六日、

一去十八日ヨリ廿一日マテ、於北方、伊勢國司及合戰畢、國司方打勝、城二ヶ所被責落了、兩方數十人手負打死、舍弟坂内手負引退、件之一事兩樣之御

政郷ニ強テ北伊勢ヲ攻略シ、戍敗ヲ命ジ、又義春ニ沙汰ス

政郷幕府ノ態度ヲ怒リ西軍ニ歸ス

成敗、故如此也、北方事被仰付國司、色々辭退申不可叶云々、仍無力至成敗之處、又不能是非、而被仰付一色（義春）之間入代官云々、仍及合戰、國司近來ハ東方分也、於于今者一向成西方歟、越智申請旨風聞、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　七月八日、

一□□□僧正來、□□□□伊勢國司出陣、□□□有之歟云々、且如何旨相尋雜說歟、不審之間、内々尋遣之由被申之、今度北方事被仰付之、又無左右□□付一色及合戰了、國方（司脫カ）打勝了、件之一事兩樣御成敗之間、國司令腹立成西方了、就中越智申請之、可引入當國之由支度云々、

○コノ後、政郷ノ北伊勢守護ヲ罷メ、義春ヲ以テ之ニ代フルコト、十一年八月二十日ノ條ニ見ユ、

二十日、丙戌、從三位土御門泰清、同舟橋宗賢ヲ正三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十三

從三位安泰清（土御門）、四十八、六月十五日、賜去月廿日敍正三位々記、

從三位清宗賢（舟橋）、四十七、五月廿日敍正三位、

〔親長卿記〕八　五月廿四日、晴、今日民部卿忠富申云、宗賢卿就正三位加級、

泰清宗賢ノ加級ヲ支フ

泰清三位申所存、仍兩方申狀如此、勸修寺大納言、予等可申所存之分云々、勸亞相同祗候、暫不申是非、就上首先可被申所存歟之由頻予和、猶同日、予申云、宗賢三位就正三位加級、泰清三位申同日之處、支申之條不得其意、已其身達望之上者、上首申同日、支申之條不可然、是一、已前宗賢爲上首從上四位之時、（正上五位之時）又泰清超越宗賢、其時何不申所存哉、是二、越上首下臈支同日之例、可勸進之由被仰付、重可及聖斷歟之由言上、勸修寺大納言如予申、但已前超宗賢之時不申子細、其時之儀、可被尋仰之由申了、

宗賢卿注進

宗賢（康正元年十月一日敍從四位下、元正五位上、）
泰清本名有長（康正元年十月十二日敍從四位下、元正五位下、）

宗賢泰清ト位次ノ比較注進

爲此分者、四品五位時、共以宗賢上首也、其後有長朝臣加級、雖令超越宗賢、古來依不相爭、不申上是非之處、今度若被下同日位記者、宗賢根本上首之上者、不失面目之樣得御意候哉、

宗賢

廿六日、晴、泰清三位來、就一級事、重被尋下之間、可申所存之由相語、其次條々言談、

紀位前後ノ相論

六月八日、雨下、○中略民部卿申云、宗賢、泰清相論事、重兩方申狀如此、可申所存云々、自勸修寺大納言許傳之云々、不得其意事也、御番已後、靜可申所存之由申之、

親長再ビ答申ス

十日、晴、宗賢、泰清等三位相論事、今日申勅答、付勸修寺大納言、
宗賢、泰清等三位就位階相論事、子細先蹤被尋下、粗令言上了、下臈加級上首申同日之時、支申例可勸進之由、就令言上、宗賢三位一紙注進披見仕候、件例自然令超越之例也、申所存非□□、所詮就多分之儀、可被下同日之位記之條通法事歟、宜在聖斷矣、
今日泰清三位來、御沙汰之樣尋之、有勅問之由仰之、
十三日、晴、泰清三位來、正三位事被下宗賢三位同日位記云々、吉田三位（兼俱）爲上首、被尋所存之處、不可（マヽ）申無所存云々、仍泰清、宗賢等越兼俱卿、

〔實隆公記〕四　三月廿二日、庚寅、晴、○中略抑宗賢卿加級勅許云々、
六月十三日、己酉、天晴、自今日當番、祗候禁中、泰清卿、宗賢卿仰事今日勅許、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月八日、甲辰、晴、大外記師富朝臣、菅少納言長直朝

臣等入來、入夜各歸、師富朝臣語云、清三位宗賢卿、先日敍正三位、仍上首安三位泰清卿、同日之事愁申處、宗賢卿支申云々、其故ハ兩局與醫陰古來不相(或アラン)條勿論也、宗賢根本爵之上首也、然淺位之時、度々泰清卿令超越、雖然至上階不申所存、仍今何同日事申請哉、及御沙汰者可爲不便至極之由申入云々、泰清卿重而愁申云、當家凡昇二位、宗賢卿正三位極位也、可有差別之間、尙堅訴申云々、此申狀不可說歟、或昇一位輩、或散二位散三位輩、悉以同位時自他相□段勿論也、何可有二位三位差別哉、仍人々被召申詞、可有御沙汰之由被仰出云々、

泰清宗賢同日ニ位記ヲ賜フ

十六日、壬子、晴、大外記師富朝臣入來、條々雜談、○中略師富朝臣語云、清三位宗賢卿與安三位泰清卿、同日相論事、任人々申詞被下同日位記於泰清卿云々、人々申詞等可尋記、

百首和歌題支配

二十五日、辛卯勅題ヲ義政夫妻及ビ廷臣等ニ賜ヒ、賀茂社法樂和歌百首ヲ詠進セシメラル、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月十五日、かものやしろの御ほうらくの百しゆの御さゝけ、あれさこれさへゐいる、

義政夫人詠草ヲ上ル

十六日、ゐうらくの御さゝけ、むろまちとの御もうきゆへ、御さゝけをゝりへゐいらるゝに、をやよ記御やう申さるゝ、よりてむろまち殿へもゐいらるゝ、

○コノ項、十三日ノ條ニモ收ム、

廿三日、御さゝの御方より御まれ二色ゐいる、をひさうともをさむ了入らるゝ、

廿四日、あをの御ゐうらくは御さむさくともゐいる、

廿五日、御ゐうらくの御さんゝやくけさゝさゝらるゝ、よへより御神事よてめてさし、

〔親長卿記〕八　四月廿九日、晴、依召參內、仰云、內侍所幷賀茂社御法樂和歌可有御張行、可爲如何哉、予申云、御敬神之事有何事哉、○中略賀茂事者、此御法樂出來之後、可有御張行云々、○下略、大神宮法樂和歌ノコトニカヽル、七日ノ條ニ收ム、

〔實隆公記〕四　五月十四日、庚辰、今日猶候番、賀茂社御法樂御短册方々令配分了、

廿四日、庚寅、天顏快晴、今日御法樂和歌令詠進了、

廿五日、辛卯、晴、早旦參內、御法樂百首寄書沙汰之、大略終日候御所、黃昏退出、

邦高親王御來臨

皇子勝仁、御誕辰、義政、物ヲ獻ズ、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　五月廿五日、むろまち殿よりさる御ひら二をけ、宮の御方へゐいる、々ふの御さんしやう日の御きやうとも、いつものやうにこれ〳〵あそたに、御さゝ月ゐいる、めてさし、ふしゝ殿ならしまに、

三十日、丙申、皇子勝仁、御笙始、義政、馬太刀ヲ獻ズ、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　五月卅日、丙申、若宮御方御笙始、自小河殿御馬御太刀御進上事、

義政夫人樽等ヲ獻ズ

六月小丁酉盡朔

一日、丁酉、御祝、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　六月一日、御さゝの月いつものやうにまいる、ふしゝ殿もゐいる、そてゝくゐん御なる、久いんの上らぬ御ゐいり、御さいの御ゝさよりさる、御ひら三をけゐいる、ゐけさみる一をりゐいらそる、

〔實隆公記〕四　六月一日、丁酉、晴、早旦退出、行水如例、及晩參內、御祝以後退出、參伏見殿、

三寶院、愛染明王像及ビ卷數ヲ、義政夫妻竝ニ義尙ニ贈ル、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月一日、丁酉、天晴、自三寶院恒例愛染供勤行云々、仍愛染明王幷御卷數等付給間、以春□(日)局則進上室町殿宰相中將殿、御臺御方等、同尊像一躰與予、祝著千万也、

十八日、甲寅、晴、春日、社室町殿御師刑部大輔師淳送卷數、則載(歟カ)之、祝著千万也、進上室町殿御卷數共同付送之、幷御祈用脚御神領等事、可申沙汰之由有書狀、委細重而可記、

春日社御師卷數ヲ義政ニ贈ル

祈禱費及ビ神領ノコトヲ申沙汰センコトヲ兼ネテ求ム

○十八日ノ條、便宜合敍ス、

淨土寺權僧正政辨寂ス、

〔大乘院日記目錄〕三　六月一日、淨土寺門主入滅、廿三、

〔尋尊大僧正記〕七　六月廿一日、

一六月朔日、淨土寺門主入滅、廿二、陽明入道殿下御息也、彼御息現存御衆ハ

右大臣、聖護院准后、實相院前大僧正、三寶院權僧正、

〔華頂要略〕百四十一　淨土寺　諸門跡傳六　政辨大僧正　近衛後知足院關白房嗣公六男、師主政玄僧正、

〔尊卑分脈〕藤氏　近衛　北家

房嗣○事蹟略ス、

政家○事蹟略ス、

道興寺　法三山務、大僧正、准三后、并新熊野檢校、聖護院、

增運寺　法實務、大僧正、准三后、相院、

政深醍醐　法遁世印、大僧都、三寶院、准后義賢弟子、

政辨　淨土寺、早世、

二日、戊戌、細川聰明丸ノ部下某、兵ヲ率并テ、攝津山路莊ニ入ル、大內政弘ノ部兵、之ト戰ヒ、敗レテ中島ニ走ル、

〔尋尊大僧正記〕七　六月六日、

一松林院僧正被相語、藥師寺與一之舍弟打入攝州山道（武庫郡）庄、大內方與合戰了、其勢三百計也云々、大內勢打負、引籠中島（西成郡）云々、自湯山（有馬郡）邊六七里之間ハ、悉以成細川方云々、去二日事歟、

〔參考〕

〔攝津志〕四　西成郡攝津國村里　北大道、南大道、屬邑五、西大道、舊名大隅、又名大內、又三寶寺、屬邑一、大道新家一名小松、以上四村乳牛牧莊、天王寺莊、屬邑四、江口、上新莊、下新莊、橋寺、舊名長柄、上三番、新家、乳牛牧莊以呼曰上中島、下增島、高畑、引江、東寺原、引江以下三邑、增島、高畑、二村出戶、以上淡路莊、柴島、屬邑一、藥師堂、濱、南方、屬邑一、南方新家、屬邑一、西山口、一名北方、屬邑一、南宮原、屬邑一、北宮原、宮原新田、一名新田、硯十八條、屬邑二、蒲田、舊名佛生院、屬邑三、木寺、川口、川口新田、小島野中、新在家、堀上、三津屋、屬邑一、加島、屬邑二、御幣島、堀、今里、野里、稗島、淡路莊以下、呼曰下中島、川崎村民雜居ス、天滿、國分寺、舊名北渡邊、南長柄、北長柄、屬邑一、本莊、北野、濱、光立寺、屬邑二、三番、舊名篠庭野、新家、光立寺三番、二村出戶、濱以下富島莊、成小路、塚本、海老江、屬邑一、浦江、大仁、塚本以下驚島莊、野田、屬邑一、福島、上下有二、曾根崎、川崎以下呼曰南中島、屬邑一、

〔攝津志〕十　有馬郡攝津國村里　湯ノ山、町名十七、

山路

〔攝津志〕十一　攝津國　莵原郡、村里、野寄、岡本、田中、片町、岡本、田中、二村ノ出戸、住吉、屬邑、横屋、魚崎、魚一作五百、西青木、以上呼曰山路ノ莊、

三日、己亥、幕府、伊勢貞宗ヲシテ、御料所丹波桐野牧河内村ノ寺社以下免除地竝ニ諸檢斷等ノ事ヲ成敗セシム、

〔古文書〕二十四

丹波國桐野牧河内村内寺社以下免除地、幷諸檢斷等事、近年所々猥及其沙汰云々、太不可然、早任舊例、爲御料所、一圓可被致成敗之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明九　六月三日　　英基判　貞康判

（伊勢貞宗）伊勢守殿

六日、壬寅、大乘院大僧都政覺ヲ權僧正ト爲ス、

〔大乘院日記目錄〕三　七月十五日、法印政覺任權僧正、去月六日宣下也、十七日、仰遣兩勸進代方等云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　七月十五日、

一自二條（政嗣）御方御書到來、僧正口宣被下之、御書八日御日付也、

上卿冷泉大納言（爲富）　宣旨

文明九年六月六日　宣旨

大僧都政覺

□（宜カ）任權僧正

藏人右中辨藤原政顯奉

十八日、

一新僧正事、昨日別會供目代兩勸進方ニ仰遣之、略現參故也、

○妙蓮寺某ヲ僧正ト爲スコト等、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　二月廿四日、めうれん寺そう正の御ゑいよゑ

妙蓮寺某僧正

こう、ずゑいら十帖、御ゝうえことゐいる、宮の御ゝさへ、御ゝハらけの物三色、御さる一ゝゐいる、御ゝさよて御ひし〳〵とゐいる、

安祥寺某僧正

七月廿七日、あん〳〵やう寺うう正の事申さるゝ、ゑさ井ゐ支よし御ゆせらるゝ、源大納言申つ支、

廿九日、あんしやう寺より、御れ井よをりゝミゐいる、いつそや申いさされ

文明九年六月六日

しとゝ、御ふくもさふ、

〔親長卿記〕八　七月廿七日、晴、安禪寺（脩力）□隆法印極官事、可宣下之由、可申付元長之由有仰、

〔實隆公記〕四　十二月廿一日、甲寅、晴、抑南都普門院秀雅僧都極官事申之、則勅許、

普門院秀雅

〔歷代殘闕日記〕八十四　見聞雜記

一師主法印權僧正ノ宣下、七月十七日有、但同廿六日、大□御門跡ヨリ到來、御使次郎、小同十二月廿四日、於惣寺披露畢、

寶輪院某權僧正

〔廿一口方評定引付〕四　○山城　同廿四日、（十二月）

一寶輪院權僧正口宣、原永僧都轉大、公遍律師、慶清律師轉任、重禪阿闍梨、宗承阿闍梨昇進等口宣、令披露了、仍以慶清律師永宣旨之闕、可被補賴俊阿闍梨由治定了、

〔親長卿記〕八　六月八日、雨下、○中略　妙法院准后申、一官事奏聞勅許、北野社僧一官事、凡僧大僧都事、有御沙汰之子細可尋仰云々、

北野社僧大僧都

〔實隆公記〕四　三月廿八日、丙申、晴、今日僧官三通口宣案、依或人所望書之、



權大僧都珍光　敍法印、權律師眞宥　任權大僧都、大法師珍覺　任權律師、

法印權大僧都

六月廿五日、辛酉、晴、終日無事、權大僧都公濟法印勅許口宣案等進內府了、大和國內山上乘院、故公熙卿連子、入道左府猶子也、

〔實隆公記〕四　閏正月十一日、庚辰、陰、早旦行水、遙拜等如例、今日僧官雜任等宣下之、一通眞光院守鑁僧正、權少僧都慶春任權律師、一通少僧都宥覺轉任權大僧都、一通木工允藤原宗次任左衛門少尉、此兩通權大外記康顯申、口宣案遣之了、

權少僧都

二月廿日、戊午、天晴、兵部卿申僧官事、權律師定春任權少僧都、口宣案今日遣之了、

三月九日、丁丑、陰、雨濺、冷泉亞相僧官四通所望、權律師宥舜申權少僧都、大法師賢海、定英、圓尊申權律師、雖未伺申入之、田舍之輩急ニ所望之由被命之間、口宣案先書寫之、

五月一日、丁卯、天晴、及晚長興宿禰來、雜任僧官等所望、橘元高申左兵衛少尉、權律師宥海申權少僧都、則今夕令奏聞、口宣案書之、

〔大乘院日記目錄〕三　八月廿八日、專嚴宗算各任權少僧都、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　八月廿八日、

一專嚴來、任權少僧都云々、宗算五師同口宣案到來云々、

〔實隆公記〕四　十二月九日、壬寅、晴、惠明院一官權少僧都、字禪耀、申之、可宣下之由被仰下了、口宣案翌朝進上之、

權律師

〔大乘院日記目錄〕三　正月十四日、實心擬講任權律師、拜賀鈍色紫用、大晦日口宣案到來云々、去應仁元年十月爲□用拜賀、第二度之拜賀也、

〔實隆公記〕四　正月十八日、丁未、天晴、今朝依淳助法印所望、雜任僧官等二通書之、大法師宗惠任權律師、大江重實任右馬少亮、

〔大乘院日記目錄〕三　六月十一日、專秀任權律師、參賀、五、十

〔尋尊大僧正記〕七　六月十一日、

一專秀任權律師、參賀違例云云、則退出了、六十五歲也、

田樂頭

〔實隆公記〕四　六月廿六日、壬戌、晴、雜任口宣案、大法師豪同豪隆、□、敍權律師

〔大乘院日記目錄〕三　十一月廿四日、慶英任權律師、爲田樂頭也云々、親父豐田賴英中蔵也、五十餘也、定而喜悅歟、

〔親長卿記〕八　十一月廿七日、晴、慶助律師事申之、奏聞勅許、

〔實隆公記〕四　九月十四日、戊寅、晴、今日僧官兩三通口宣案書之、與重治朝臣了、

卅日甲午、晴、今日猶候番、僧官兩通申之、則勅許、

十月廿八日、壬戌、晴、請琦首座、今日當番、晝間都護卿被祗候、僧官口宣案五通書之了、入夜著束帶參內、

十二月十七日、庚戌、晴、師富朝臣來、僧官一帋書之、

御製

賴忠、姓闕、飛驒富安鄉ノ下地ヲ、坪內三郎後家ニ與フ

〔飛州志〕十一　舊記　大野郡夏厩村蓮德寺所藏

宛行富安鄉下地之事

合貳段者、坪者垣內田名也、

右年貢諸役等、無懈怠可致其沙汰者也、仍宛狀如件、

文明九年六月六日　　賴忠（花押）

坪內三郎後家

七日、癸卯、一條兼良ノ獨吟連歌ヲ叡覽セラレ、御製ヲ附シテ、廣橋兼顯ニ返還シ給フ、義政及ビ夫人日野氏、拜觀ヲ需ム、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月七日、癸卯、晴、入夜雨降、○中略　將又自禁裏一條（後良）前閤獨吟連歌被返下也、裏紙內ニ被遊下御製、面目之至忝畏入者也、件御製注裏、室町殿幷御臺御方可被御覽之由被仰下之間、以新兵衞督局同進上者也、

（宸書）御製如此、ことのはをつらぬる玉のゝすゝ〳〵多と我〳〵意　又袖ぬらすなゝさと　勅筆正文追而可加續之

者也、

八日、甲辰、晴、早旦參內、若宮御方御雜熱、爲奉相尋也、卽退出、入夜向飛鳥井大納言入道許、歸路向大昌院、

〔實隆公記〕四　六月八日甲辰、晴、早旦參內、若宮御方御雜熱、爲奉相尋也、卽退出、入夜向飛鳥井大納言入道許、歸路向大昌院、

九日、乙巳、僧眞慧ヲシテ、下野專修寺門流ヲ安堵セシメ、尋デ、幕府之ヲ住持職ト爲ス、

〔專修寺文書〕一　○伊勢（ウハ包）「專修寺住持、右中辨政顯」

下野國專修寺門流事、任先規不可有相違之由、天氣所候也、仍執達如件、

文明九年六月九日　　右中辨（花押）

當（眞慧）寺住持

下野國專修寺住持職事、任綸旨、不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十年三月廿八日　　和泉前司（清貞秀）（花押）

對馬守（松田數秀）（花押）

重テ上人號ヲ請フ

當寺住持

〔親長卿記〕九　文明十年三月十二日、晴、○中略眞慧去年被下住持勅裁、不被載其上人之由候、重申請云々、

〔華頂要略〕三十三門下傳　外樣院門跡、後土御門院　文明九年六月九日、勅專修寺主務更爲御祈所、○御祈願所トナスコト、九年三月十二日ノ條ニ見ユ、

專修寺號高田山、寺領三百五十石、　直惠（慧）大僧都定顯上人男、

〔參考〕

〔正統傳後集〕二　高田山專修傳燈實錄下　第十祖眞惠（慧）上人　同（文明）九年、後土御門院アラタニ勅命ヲ下シテ、高田專修寺住持職ニ補セシム、綸旨曰、○中略、前掲ノモノニ同ジ、コレヨリ以來代々傳燈、辱ナク勅宣ニ因テ住持職ニ任ズ、夫鸞師ノ法流多シトイヘトモ、他流イマタ是例ヲ不聞、誠ニ一天無二ノ住職、抑亦諸宗卓拔ノ賞譽タルモノナリ、

〔大谷本願寺通紀〕六　旁門略事　專修寺

第十世眞慧　定顯子、○中略　九年（文明）六月、後土御門院賜綸旨、使主專修寺、十年三月、公方義政亦授公書副之、爾來成永式、歷世必賜國書云、

延曆寺僧徒兼澄代官職永田彈正忠ノ、其所領近江音羽莊ノ算用ヲ濫ニ

スルヲ幕府ニ訴フ、

〔親元日記別錄〕中　（六月九日）同日

一圓明兼澄代（仮如州）

知行分高島郡音羽庄代官職事、佐々木永田彈正忠ニ契約處、算用之旨無謂之間、先度就被成召文、乍令承諾、當年又及違儀云々、

十日、丙午、一條家諸大夫前宮內卿從三位源康俊卒ス、

〔尋尊大僧正記〕七　六月十日、

一家門諸大夫三位入道常俊（俗名宮內卿康俊、六十四、）今日圓寂、

〔大乘院日記目錄〕三　六月九日、從三位入道常俊入滅、（六十四、）

〔歷名土代〕

從四位下源康俊　（寶德）同三正五、

從四位上源康俊　（康正）同二十二十八、

正四位下源康俊　（寬正）同三四十三、文明元七十八從三位、

〔尊卑分脈〕醍醐源氏

世系

季賢　丹後守、

康俊　本則ノ、宮內卿、從三、丹波守、（後イ）修理大夫、

久任　大膳大夫、丹後（波イ）守、正四下、

○康俊、從三位ニ敍スルコト、元年七月十八日ノ條ニ、得度スルコト、二年四月八日ノ條ニ見ユ、

十一日、丁未、近江朽木貞綱、義尙供御ノ費ヲ進納ス、

〔朽木古文書〕請取狀乙十六號

請取申料足之事

合壹貫文者

右爲御方御所樣供御御用脚、壬正月分五貫文內、請取申所如件、

文明九年六月十一日　　小林小四郎數家（花押）

根木彌五郎（朽カ下同ジ）殿

○七月以後ノ請取狀、便宜左ニ合敍ス、

〔朽木古文書〕請取狀乙十六號

請取申料足之事

文明九年六月十一日

美尙供御ノ用脚閏正月分

文明九年六月十一日

七月分

合拾貫文者

右爲御方御所樣供御御用脚、七月分兩名御年貢內、所請取申如件、

文明九年七月二日　　小林小四郎　數家（花押）

根木殿

八月分

請取申料足之事

合五貫文者

右爲御方御所樣供御御用脚、八月分內且所請取申如件、

文明九年七月卅日　　小林小四郎　數家（花押）

根木殿

同上

請取申料足之事

合五貫文者

右爲御方御所樣供御御要脚、八月分所請取申如件、

文明九年八月廿六日　　小林小四郎　數家（花押）

根木殿

九月分

請取申料足之事

合五貫文者、

右爲御方御所樣供御御要脚、九月分中且所請取申如件、

文明九年九月五日　　小林小四郎　數家（花押）

根木殿

請取申料足之事

合五貫文者、

右爲御方御所樣供御御要脚、九月分內所請取申如件、

文明九年九月廿日　　小林小四郎　數家（花押）

根木殿

請取申料足之事

文明九年六月十一日

合拾貫文者、
右爲御方御所樣供御御要脚、正月分所請取申如件、
文明九年十二月廿日　　小林小四郎數家（花押）
根木殿

十三日己酉、山名豐遠、日光院ヲシテ、但馬小佐郷內反錢ヲ安堵セシム、

〔日光院文書舊稱成就院文書〕○上但馬

但馬國小佐郷國衙三分一田數之內五町壹段半反錢事、如被申請、每年被納所、去永享年中、任大明寺殿（山名時熙）御寄附之旨、妙見大菩薩挑定燈、被致御祈禱精誠、永領知不可有相違之狀如件、
文明九年六月十三日　　越前守豐遠（花押）
日光坊

但馬國小佐郷國衙三分壹田數之內、五町壹段半反錢事、被納所妙見大菩薩、捧定燈、公私可被致御祈禱之精誠之由、去六月十三日越州任御判之旨、永御知行不可有相違之狀如件、

文明九年八月七日　　河越遠治（花押）
日光坊

十四日庚戌、山城守護山名政豐、等覺院ニ、前廣隆寺執行慶秀跡竝ニ財物竹木等ヲ交付ス、

〔廣隆寺文書〕○乾山城

廣隆寺先執行慶秀跡坊幷財物竹木等事、無相違被渡付之由、被仰出候也、仍執達如件、
文明九　六月十四日　　豐職（田公）（花押）
等學院

義尙、小川ノ第ニ至ル、尋デ還ル、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月十四日、丙辰、晴、宰相中將殿自小河殿還御、
○コノ後、七月二十五日、義尙小川ノ第ニ至リ又還ルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月廿六日、辛卯、晴、○略中自昨日宰相中將殿御座小

河殿、午天參小河御所、祗候御臺御方、昨日ヨリ准后御座程也、於御前被下數盃、終日祗候、聯輝軒等參會、

廿八日、癸巳、晴、○略中宰相中將殿申刻許、還御伊勢守宿所、及晩涼退出、

九月廿五日、己丑、陰、宰相中將殿還御伊勢守宿所、○小川第ニ赴キシ日詳ナラズ、

十五日、壬子、山名政豐、山城西院郷ノ民、守護ノ命ニ應ゼザルヲ以テ、其家屋ヲ燒ク、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月十五日、辛亥、晴、足輕共發向西院邊、民屋等多以放火、諸雜物又亂妨云々、不便々々、

十六日、壬子、晴、足輕共如昨日又發向西院邊、苅田畠、切竹木雜物等悉亂妨之、民屋過半放火、敵一向不馳向歟、今分者、彼在所雖一宇難殘云々、

〔長興宿禰記〕上　六月十六日、今日西院郷燒亡、當國守護山名、以大勢燒拂、不應守護故云々、

普廣院雜掌、一宮賢長ノ、祠堂錢ヲ返濟セズシテ、濫リニ質地丹波春日部莊ヲ改易セルヲ、幕府ニ訴フ、

〔親元日記別錄〕中

足輕田畠ヲ苅リ竹木ヲ切ル

一普廣院雜掌（文明一九六十五）

當院祠堂錢一宮備後守賢長、文正二、應仁元之間、卅餘貫文令備用（借カ）、知行分丹波春日部庄ヲ入置質券不能究返、令改易云々、

十九日、乙卯、正四位下四辻季經ヲ從三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十三　參議正四位下藤（四辻）季經　左中將、六月十九日敍從三位、

〔實隆公記〕四　六月十九日、乙卯、晴、○略中季經朝臣今日上階云々、

七月廿四日、乙丑、陰、四辻宰相中將上階宣□□、今日遣藤大納言了、

二十三日、己未、幕府ニ命ジテ、室町第造營段錢ヲ、禁裏料所備前鳥取莊ニ課スルヲ停メシム、幕府肯ゼザルヲ以テ、同莊代官浦上則宗、其資ヲ獻ズ、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月廿三日、己未、晴、晝時分勸修寺大納言來臨、禁裏御料所鳥取就反錢事、參室町殿云々、今度室町殿御所造營反錢也、自公家免除事被申之處、先年も雖御料所、五千疋致沙汰之間、今度同其分可被仰付之由、室町殿被申御返事間、天氣珍事由被談、但先年も御代官赤松以內儀沙汰之間、今度同浦上美作（則宗）守五千疋分可致沙汰由申入之間、可爲無爲歟由被相語、武家御返事之趣如何、莫言々々、

先例ニ依リ五千疋ヲ課ス

○幕府、造營段錢ヲ石見ニ課スルコト、閏正月二十二日ノ條ニ見ユ、

三條西實隆ニ、其所領ヲ安堵セシム、

〔實隆公記〕四　六月廿三日、己未、晴、沐浴及晩參內、家領安堵之勅裁被成下之、爲御禮也、

○安堵勅裁ノ日詳ナラズ、姑ク本文ニ據リテ掲書ス、

二十四日、庚申、信濃善光寺火アリ、

〔實隆公記〕三十八　永正五年五月十一日、戊申、晴、略○中又善光寺新佛叡覽事、頻望申之、可爲如何哉之由、被仰之旨趣、先目安依寫留之、

信州沙門戒順謹言上

右根本善光寺前立新佛者、弘聖菩薩依如來靈告被造立之、其故者過一千年之後本尊可被移化緣於夷島、其後爲衆生濟度、可留形像云々、自爾已來威光不異本佛、利益宛同生身、然而去文明九年六月廿四日、本堂炎上之時、斯佛燒失訖、然而七日之後自灰中立瑞雲、放光明之間、諸人成善(分力)特思、尋求之處、此佛黃金御首灰中留給、○下略、全文ハ永正五年五月二十日、信濃善光寺僧戒順ノ新鑄佛像ヲ天覽ニ供センコトヲ請フ條ニ收ム、

戒順前立新佛造立

灰中ニ佛首ヲ獲

義政、普廣院ニ詣ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月廿四日、庚申、木建、晴、○中略、室町殿晩頭渡御普光(廣)院、

二十五日、辛酉、幕府、權大納言冷泉爲富ヲシテ、舊跡敷地ヲ領知セシム、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月廿五日、辛酉、木、除、晴、冷泉大納言爲富卿來臨、舊跡敷地事、可領知之旨被仰下之間、只今參賀室町殿仍賀來云々、

二十六日、壬戌、梶井宮堯胤法親王ヲシテ、北野宮寺別當職ヲ管領セシメラル、曼殊院之ヲ排シ、舊ニ依リ、之ヲ領センコトヲ幕府ニ請フ、

〔實隆公記〕四　六月廿六日、壬戌、晴、及晩女房奉書到來、北野別當職事、梶井宮可令管領給之由、勅裁可調進之由也、則調進上了、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月三日、戊辰、晴、自梶井宮有御使、○中略、兼顯出仕ノ條ニ收ム、次北野宮寺別當職事被望申處、勅許、武命無相違間、御禮之儀昨日被申入公武了、尙便宜之時者可得其意由示奉者也、對御使、○中略、次北野別當御存知之事、尤珍重々々、便宜之時者、於武家得其意可申入由申入者也、

〔曼殊院文書〕二○山城(埼玉書)　「別當職梶井殿御競望之時一紙

曼殊院雑掌申狀

竹内門跡雑掌謹言上

右子細者、北野別當職之事、天慶五年當社垂迹初、被任是算法橋ヵ別當以來、致當門跡廿六代五百餘年相傳無相違者也、綸旨院宣官符幷公方樣代々御書明鏡也、爰梶井門跡建武三年、天下動亂之刻、就被申掠、一旦雖被任彼職、爲當門跡披子細申間、同五年、〔足利尊氏〕等持院殿樣依御執奏、被成下還補院宣、〔○暦應元年十二月十一日ノ條參看、〕其後貞治二年寶篋〔足利義詮〕院殿樣御書仁〔○永和四年六月十九日ノ條參看、〕雖有望申輩、被載不可及向後沙汰之旨畢、然院殿樣御書、〔○貞治二年十二月二十五日ノ條參看、〕永和四年鹿薗〔足利義滿〕而去文安年中、梶井門跡御競望之時、雖被不預御尋、成付當御所樣被披代々之支證ヵ聞食、則以御內書被返付之處、〔○寶德元年十二月是月ノ條參看、〕今度又被申入禁裏樣ヵ之風聞在之、爲事實者不便之次第也、所詮任代々支證旨、嚴重爲預御成敗、粗言上如件、

文明九年八月日

## 誓願寺立柱、義政之ニ臨ミ、錢萬匹ヲ寄附ス、

〔長興宿禰記〕上　六月廿六日、庚戌、今日誓願寺御堂造營立柱也、勸進坊主十號

十穀勸進帳ハ一條兼良ノ作

立柱

穀門沙、興行也、勸進帳一條禪閤御作也、予□南都申上所望方遣之、今日室町殿御□□□參詣、万疋御寄附云々、彼寺兵亂中燒失、本尊者無相違者也、

上棟

七月五日、今日誓願寺立柱也、諸人群詣歟、

〔兼顯卿記〕〔○岩崎文庫所藏〕六月十四日、庚戌、晴、午天參詣誓願寺、造營最中也、仍本尊安置假御堂、本堂在所儲足代等、緇素貴賤連袖群參、頗殊勝々々、來月上旬可爲立柱云々、心閑祈念後歸宅、〔○中略〕或云、誓願寺立柱、今月乎之由有其沙汰云々、不日營功、可貴々々、

七月五日、庚午、晴、誓願寺御堂上棟也、日野侍從美物兩種柳二荷送給之、對使者謝遣之、

〔親長卿記〕八　六月廿七日、晴、〔○中略〕傳聞、誓願寺主(立)柱云々、自去年勸十方檀那助緣、可令造營云々、件勸主斷十穀云々、

赤山大明神ノ森木ヲ用フ

六月廿九日、晴、〔○中略〕今日赤山大明神森木爲誓願寺引之云々、諸人申(甲)乙人引之、

七月五日、晴、〔○中略〕今日傳聞、誓願寺上棟云々、

〔歷代殘闕日記〕七十八重胤記　七月五日、晴、誓願寺上棟也、

周興ノ畫菩薩化緣疏

觀音勢至二十五大士歌舞來迎ノ像

〔半陶藁〕一　誓願寺畫菩薩化緣疏　幷序

京師誓願寺者、西方教主無量壽大願王道場也、天智天皇勅創其基、殿裏底乃春日慈悲滿行菩薩之所親刻也、爾來八百餘載感應無比、一華一香結其緣者、一拜一聲致其敬者、三世之願無不成禮、故雖廢而必興、如夕之有朝矣、一炬於應仁之初、再造文明之末、蓋使樂施者數起福因、亦善巧之一端也、殿之壁陰舊繪觀音勢至二十五大士歌舞來迎之像、緇素爲之增瞻仰矣、今也所宜有者略具焉、而於斯一舉猶爲缺典也、顧陸丹青世雖不乏、而鉅万之費非隻手單力之所辨也、因持短疏、遍叩朱門白屋、旦募十方四衆焉、昔京城修白蓮堂、雷公國英作疏曰、一錢不少万貫非多、聚毛成裘、佛從心生、今之所希、亦在茲爾、其詞曰、周王揷莖草於震旦、金布祇桓(海)、天匠刻香木於優塡、斧響忉利、考春日神造像之始、當天智帝覆簣之時、百代雄基、四民麕至、衆生誓願度、煩惱誓願斷、六八願王儼臨道場、淨土教觀易、娑婆教觀難、百千觀門豁開戶牖、東土日東東漸佛法、西山鎭西西方來迎、蓮漏聲閑、香火盟固、顏淵孟軻在極樂國、刹刹不隔自他、夏后伊尹現觀音身、念念有待引攝、筆下欲開菩薩衆之生面、囊中猶欠孔方兄之點頭、上品上生下品下生、預設華座、大民大貨小民小貨、遍扣檀門、掃空嗇雨慳風、

別納知行内二千疋ハ貴布禰社分

湧現壽山福海、

二十八日、甲子、賀茂社領丹波由良莊ヲ神主彌久ニ與ヘ、祈禱料ニ充テシム、

〔親長卿記〕八　三月十二日晴陰、及晩雨下、〇中略次由良庄勅裁事、不可有相違之由仰了、此事去年已奏、今日治定、

〔親長卿記〕三十二

賀茂社領、丹波國由良庄事、爲別納可令知行、此内、於貳千疋之土貢者、所被付貴布禰兩宜、無懈怠可致其沙汰、若有不法之事者、可被召放之由、可致御祈禱之由、可被下知神主彌久縣主給之由、被仰下候也、謹言、

（文明九年）六月廿八日

藏人辨殿

追申去三月十二日奏聞、去年十一月奏聞、令無沙汰候、以其時日次、

件庄之内、貳千疋所被付貴布禰兩方也、無懈怠可致其沙汰、若有不法之儀者、可被召放惣庄之由、

〇由良莊ノ租ヲ貴布禰社ニ寄附スルコト、八年十二月五日ノ條ニ見ユ、

日野苗子、酒饌ヲ皇子（勝仁）、ニ獻シ、皇子、之ヲ廷臣ニ賜フ、

文明九年六月二十八日

廣橋兼顯參觀

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　六月廿八日、御さゝつきいつものことゝ、北こうちとのより、宮の御ゝさへ、ゝそらけ物五いろ、大おり一ゝう、御さる二ゝ色々ゐいる、やゝ〳〵御さゝりゐて、おとこさちをう〳〵めゝゑ、御ねゝゝゝとゐいる、

〔實隆公記〕四　六月廿八日、甲子、晴、○中略今日當番令相博言國朝臣了、小詰及晩有召之間、則參內、於若宮御方有九獻、入夜退出、

○六月十五日ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔實隆公記〕四　六月十五日、辛亥、晴、猶候番、及曉天、於若宮御方有盃酌、

義尙、犬追物ヲ興行ス、

〔長興宿禰記〕上　六月廿八日、今日於將軍御所馬場有犬追物、內外檢見云云、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月廿八日、甲子、晴、早旦自宰相中將殿被仰下云、今夕可有犬追物、必令參祗、可見物之由懇仰也、一昨日出仕之時、直有御約束、雖然諸大名可參之由、有其沙汰之間、巨細□□不可參由相存處、重而又被仰下候間、必々可參祗申入者也、仍及未刻參仕之處、已百疋事終、又百疋之寂中也、



遲參之由有仰、宰相中將殿不被遊、一色父子、赤松、細河淡路守、同民部少輔、伊勢、小笠原以下奉公輩少々也、藤宰相永繼卿手組也、直垂上結袴等如例、犬追物事終有一獻、一色申沙汰云々、頃之退出了、時亥刻許也、

廿九日、乙丑、晴、○中略伊勢彈正忠貞固賀來之次語云、昨日一獻及曉天、人々亂舞頗大飲也、仍予早出之後、宰相中將殿度々御尋之由相談之間、祝著之至畏存之由返答、

七月七日、壬申、晴、時々降雨、八時分自宰相中將有召、仍參祗、犬追物可見物由有仰、百疋之後有御續歌、

筒井順尊、地口錢ヲ奈良ニ課ス、

〔尋尊大僧正記〕七　六月廿八日、

一筒井奈良中地口打之、近日在々所々打之、去春比可打之由支度之處、成身院申止之間、每月之鄕錢ニ成了、是又珍事之由思給處、剩又地口在之、兩樣儀奈良中至末代迷惑也、不思儀ニ筒井奈良中事ハ雖令見所、又奈良事可存知物ハ、以此儀可沙汰之間、所詮惡事を初而興行躰可神慮也、□錢も還而可爲成身院之過者也、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　七月二日、

一奈良中地口間別四十文、自筒井打懸□(カ)筒井中間一兩人幷仕丁九一兩人相共ニ打廻□兩門跡(殺下同ジ)披官人ハ上下悉以除之、每度事也、近來□南都ニ御座之間攝家御披官人等如兩門也、故筒井律師雜務中、○順永寂スルコト、八年四月五日ノ條ニ見ユ、色々懸錢等各致之者也、其餘者近年故實方(ヤウ)之皆以不聞之、嚴□□無是非□□、題目自筒井申付事者、面者衆中儀(議)也、仍□□□□□□□□□爲使者者□也、以中間分打廻事幷納所若黨也、希有新儀也、無益題目ハ六方指出申歟、如此儀者不及是非之沙汰、未練族也、凡筒井德分五个關代官事、二三千德分也、爲六方先年破之、然間筒井德分無之故、如此儀共奈良中ニ申懸之、併六方以下集儀無延量故也、可歎々々、

表面衆中ノ議

順尊關所代官德分ヲ失ヒ課錢ス

六方蜂起奉行ノ住屋ヲ破ル

〔尋尊大僧正記〕八　十月十三日、

一○中略次六方蜂起、慶忍專當坊進發了、是ハ此間筒井爲代官、奈良中地口以下種々無盡之懸錢等奉行故也、此次仕丁九武元、武長、在所幷轉害之源次以下兩所、合四个所進發之畢、

二十九日、乙丑、六月祓、



〔御湯とのゝ上乃日記〕一　六月廿九日、こよひの御ゆふしむきよくゐゐり、御所々々ゝ御ゆとのゝうへよて御こしゐゐ、ゆめ宮の御ゆさゝ、御ふくいてゝ御さいくゆんなり、御さゝ月としく〳〵のことし、ゆんのちやう御うりゆいらゆる、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月廿九日、乙丑晴、○中略今夜御輪役勤修寺大納言(教秀)參懃、仍大口借用之間遣之、及秉燭參室町殿、小河殿、御輪之儀蜜(密)令見物者也、於御末謁春日局、新兵衛督以下、頃之退出、

勤修寺教秀輪役ヲ勤ム

小川第祓

○小川第六月祓ノコト、便宜合敍ス、

〔參考〕

〔增補語林〕和訓栞　中　すかぬき　菅貫と書り、茅輪をいふ、輪二丈六尺、圍八寸、藁をもて造り、茅を心とし、紙をもて纏たる者也、內侍所の調進ハ、茅のみを用といへり、法性寺入道殿下六月祓詩に、求知何物號菅拔、結草如輪令首蒙と見え、寶治百首に、あはれまた我いくとせのけふにあひてあさちすかぬきみそきゆつらん、

茅輪

ちのわ　茅輪也、六月祓の具也、公事根源にも、けふハ家々に輪をこゆる事

輪ニ入ル様

ありとみえ、御湯殿記に、みな月の輪といへり、内々行事に、院の廳より大輪麻の葉に、七五三をつけ上る、麻の葉を御持、輪を御くゞり遊し候とあり、備後風土記に、後世有疫氣、則汝云蘇民將來之子孫、而以茅輪著腰上とみえさり、新千載集に、年なみの半を今夜こゆる輪にすがぬきかけて七十ハへぬ、ちのわ　院中年中行事、輪に入やうのこと、右の手に麻の葉を長一尺許に二三本紙につゝみ持て、左の足より入、右の足より出る、以上三度也、此時歌あり、れもふ事みなつきねとてあさのはをきりにきりてそはらへつるかな、夫木荒和祓、爲家、としことにすつるちのわのみそき川なかれて早くめくりあふかな

永享三年造宮ノ時別宮ハ之ヲ行ハズ

是月、伊勢大神宮神主等、僧乘賢ヲシテ、別宮風宮造營ニ當ラシメンコトヲ幕府ニ請フ、之ヲ聽ス、

〔内宮引付〕

一皇太神宮神主

注進可早蒙御成敗沙門乘賢奉造進當宮別宮風宮由事

右當宮造替遷宮事、去永享三年雖有御沙汰、至殿舍別宮等事者、不及御沙汰、其後寛正三年雖被遂行造替遷宮、諸殿舍別宮之御事者、曾不及御沙汰、仍年中遂行諸神事、致御祈禱、要須殿等悉退轉、爲神爲公不可然、諸別宮悉令顚倒、神體埋土泥、奉侵雨露之條、神宮愁訴無極、爰風宮御顚倒體拜見依有恐、稲苅十穀乘賢可奉造進之由望申、抑彼乘賢事、御裳濯河御橋自流失、去寛正六年以來洪水時者、禰宜祠官大少內人諸役人等之神事參勤不叶、御祈禱令懈怠、亦自遠國進鄕參詣之輩、不拜宮中、含愁傷空令下向、因茲勸進聖度々雖及數輩、且大營、且無志實歟、終一人不成其功處、件乘賢嚴密奉掛渡之條、令然神慮、令悅諸人者也、然間風宮御事、定嚴密可致其沙汰者歟、雖然自公方樣被成造替遷宮先例也、爲私沙汰不可叶之間、所經言上也、就其檢近例、去嘉吉三年大宮司氏長造進當宮別宮月讀宮假殿、奉成遷御、迄至于今、坐彼假殿者也、任例無相違被仰下、奉成風宮造替遷宮者、可爲神慮快然者哉、仍爲仰御成敗注進如件、以解、

寛正三年以來行ハズ

諸別宮顚倒神體泥土ニ埋ム

乘賢御裳濯河神橋ヲ架ス

幕府造進ノ例ナリ

文明九年六月日　　大內人正六位上荒木田神主榮平

禰宜從三位荒木田神主氏經

――四位下――――經興　十人署

幕府乘賢ニ命ズルコト能ハズ

祭主ト神宮ト申合スベシ

風宮造進事、今月廿日被伺申處、上意趣御意得由候、但爲公方御沙汰、可被仰付乘賢事、可爲如何哉、乍去可被打置歟、且神慮難測候間、爲此方神宮(官カ)仁申合造進候者可然由、頭人被申候、委細豐前可令申候也、恐々謹言、

七月廿一日　祭主殿御書造宮使職兼職也、乘賢ニ遣、　秀忠

内宮一禰宜殿

就風宮造進之儀、重而御注進之旨、具頭人開闔申候間、今月廿日被伺申候上意趣、御領掌先以目出度候、乍去被仰出子細、爲公方御造進宮、彼乘賢聖可致沙汰歟、聊爾儀候、但可被弃置之條、神慮難測候、所詮祭主神宮(官カ)以心得可造替歟之由被仰出候、早々被仰付拾穀、可有造進候、公私大慶候、其樣御取持事候之間、涯分經公儀致奉公候、此分於其方可被仰談候、委細者自本所被申候、忩御造進可目出候、恐々謹言、

九月廿一日(七カ)　乘賢遣　氏宣在判

内長官樣　藤波豐前守

家司大夫殿御中

神宮廳、堅上氏朝ヲシテ、能登櫛比御廚ノ上分米ヲ徵納セシム、

〔内宮引付〕

一廳宣

可早任先例本員數致催促沙汰能登國櫛比御厨本宮上分當年分事

右件御厨毎年本宮御上分米之事、任先例本數遂究濟徵納、令勤仕式日神役之處、近年混合口入(本上分於)致無沙汰之間、件御饌令退轉之條、神慮難測者哉、任先例本數徵納、可令勤仕式日神役之狀、所宣如件、以宣、

文明九年六月日

禰宜荒木田神主判

十八　堅上氏朝可取沙汰由所望、仍成之、

## 七月大 丙寅朔盡

一日、丙寅日食、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月一日、けさうさのこくより日あよくて、御所つゝミゐいらせる、きよくらハゐ所ゑあゐよより、とゝあゐしこう、いさく出よくの記みえてのち程よ雨ふる、

御所ヲ裏ム

〔長興宿禰記〕上　七月一日、甲寅、晴、今日日蝕、卯剋也、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月一日、丙寅晴、孟秋告朔、一段嘉慶、尤中心多樂也、○中略今日日蝕、依陰氣卯辰刻不出現、自巳半刻降雨、終日不休、仍追以無出現之儀、可謂聖德、珍重也、御所裏事、亂後一向無沙汰之處、加賀國自萬福寺裏料運上之間、當年始裏御所、件裏料藏人方領也、仍小舍人國弘令奉行、令下行掃部寮者也、亂以前ハ出納ら御倉兩人知行之、雖然亂中國弘奉公于他異也、就出納無奉公、亂中先被仰付御藏一人者也、但亂前者初度蝕裏料自藏人方下行、第二度三度自公方被付之云々、雖然亂中者三ヶ度共以、自藏人方可下行由、被仰付者也、

加賀萬福寺ヨリ裏料運上ス

〔本朝統曆〕十一　戊申、七大朔、丙寅、卯八、日蝕四分弱、卯四、辰□、

御祝、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月一日、けさの御いゐ井いつものことし、北こうちとのより、ゐもし一ゐいる、御しやうくゐんあり、こよひの御さゝ月いつものことし、

諸公卿、幕府ニ參賀ス、義尚、小川ノ第ニ至リ、諸公卿ト共ニ義政ニ候ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月一日、丙寅、晴、孟秋告朔一段嘉慶、尤中心多樂也、幸甚々々、早旦參賀宰相中將殿、勸修寺大納言(敎秀)、藤宰相(高倉永繼)、日野拾遺(政資)等參會、公武各構見參、其儀如恆、次於女中、拾遺政資、予兩人拜領御盃、尤珍重々々、次宰相中將殿渡御小川殿、御乘馬也、公武面々同參賀、則准后御出座、公武各構見參儀如每朔、次予、藤宰相參賀御臺御方、謁權大納言局、民部卿局以下、頃之退出、次向春日局、有來樂、頃之歸家、日野侍從以下公武面々多以賀來、

一條兼良、近衛房嗣等、奈良一乘院ニ茶會ヲ行フ、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　七月朔日、雨下、

一一乘院茶事、頭東北院僧正、今日致其沙汰、一條兼良禪閤、幷隨心院殿(厳實)入御云々、御會所上壇ニハ禪閤(近衛兼嗣)陽明入道殿(鹿司政平)、左大臣殿(近衛政家)、右大臣殿、門主、隨心院殿(厳實)、禪師御房、

以上七所、御配膳竹屋殿、修南院得業等、下壇權中納言、東北院大僧正、修南院僧正、東門院僧正、光明院大僧都以上五人、三綱以下侍共懃配膳役畢、

二日、丁卯、法印權大僧都證清ヲ石清水八幡宮護國寺撿挍ト爲シ、尋デ、法印權大僧都奏清ヲ同寺別當ト爲ス、

〔石清水八幡宮記錄〕二 當宮緣事抄　○山城　石清水八幡宮護國寺撿挍補任次第 至七十四代宋清、反古抄記之、

第九十四　證清 竹、　文明九年七月二日宣下、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月四日、己巳、晴、八幡社務職事、一昨日令奏聞處、可宣下由勅答之間、今日令宣下者也、服解中可宣下事不審之間、相尋勸修寺大納言、町中納言等處、爲宮寺間不可告由（苦カ）、各返答之間、書遣口宣案於社務雜掌了、及晩町黃門來臨、勸夕飯、依當番、秉燭以後被歸參、

文明九年七月　宣旨

法印權大僧都證清

宜爲石清水八幡宮護國寺撿挍、

藏人頭左中辨藤原兼顯奉





如此書遣者也、上卿勸修寺大納言、

〔諸家系圖纂〕八十之上 石清水八幡宮祠官系圖　證清　號西竹、第九十三別當、權別當、法眼、權少僧都、法印、文明三年十月十三日補別當、文明七年（ヒ）二月（ヒ）補撿挍、○下略、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月廿四日、八ちさゝ乃ゑやむ御れいゝ御さちもちてゐいる、御さるあすゐいるへきよし申、

廿五日、昨日の御さる、ゑしやう院とりつたゑて、折二ゝう二ゝゐいる、御ゐしゝと御しやうくゐんあり、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月廿四日、己丑、晴、○中略八幡社務證清上洛、爲職之御禮也、仍入來二百疋持來、勸賀酒後歸、

〔石清水八幡宮記錄〕二 當宮緣事抄　○山城　石清水八幡宮護國寺別當補任次第 至八十三代貞清、反古抄、

第九十四　奏清　文明九年七月十日宣下、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月十日、乙亥、晴、八幡前社務田中法印生清息奏清別當事所望奏聞之處、勅許之間、令宣下所也、案文註裏、

文明九年七月十日　宣下

法印權大僧都奏清

宜爲石清水八幡宮護國寺別當

藏人頭左中辨藤原兼顯奉

十三日、戊寅、晴、○中略以次條々奏事、八幡田中申、息奏清別當勅許畏存事、

〈諸家系圖纂〉三十之上石清水八幡宮祠官系圖　奏清　童名宮若丸、○中略下　文明九年七月十日、補護國寺別當、○下略

小笠原光康、信濃島田村八幡宮ヲ修理ス、

義尚瓜ヲ獻ズ

〈島田記〉雜四○信濃　當村八幡宮來歷（棟札）　文明九丁酉年

奉上葺八幡宮御寶殿　大檀那小笠原遠江守光康公

七月二日

三日、戊辰、義尚ニ生花ヲ賜フ、

〈御湯とのゝ上乃日記〉一　七月三日、ことある事ゆし、宰相中將殿ゑ御さてれゐいらるゝ、まさあなさよりさんを一ゐまいる、



五日、庚午、西陣火アリ、

〈親長卿記〉八　七月五日、晴、今曉東敵有火事、

七日、壬申、御祝、

邦高親王御參內

〈御湯とのゝ上乃日記〉一　七月七日、御いゐゐいつもけことゝ、ふゝゝ殿御ゐいり、

祇候ノ人々

〈實隆公記〉四　七月七日、壬申、雨時々灑、○中略及晚參內、御祝祇候輩、新大納言、源大納言、按察、兵部卿、民部卿、大藏卿、下官、言國朝臣、元長、菅原在數等也、

義政及ビ夫人生花ヲ獻ズ

禁裏七夕御歌合、

〈御湯とのゝ上乃日記〉一　六月廿九日、七夕の御さゐ、むろまちとの、ああさこあさへゐいらるゝ、

和歌題及ビ人數ヲ定メラル

七月七日、むろまち殿よりそゆいつもけことくゐいる、くゐさんのゐん、源大納言、御さいの御ゐさよりもそゆゐいる、々ふの御うさともああさこあさよりゐいりてゐさをらるゝ、

〈親長卿記〉八　六月廿八日、晴、○中略次七夕御會事、同被仰合、於御前御人數御題等、內々先書之了、

歌合番ヲ定メラル

廿九日、晴、七夕御歌合御會題到來、頭中將奉之、申領狀了、

歌合判詞

七月五日、晴、〇中略及晩有召參內、七夕御製有被仰合之間（曾）有御用捨事、愚詠有御尋、少々言上、

出家セル公卿ノ女ノ名字書方

八日、晴、御歌合番之樣、今日於御前被定、今日猶不一決、

九日、晴、同前、今日周備、中書予書之、

十一月廿六日、晴、參內、依召也、御歌合判詞今日到來、作者等事條々被仰合、此間雖被申合禪閤、猶有御不審事、上薦局（故正親町一品入道息女、洞院前左大將入道公數猶子）、可爲何樣哉之由有仰、前左大將公數女と有へき歟、依已爲出家之者、還俗名字不可然、沙彌之女と可有歟、被召勸修寺大納言同被仰合、無覺悟之由申之、予申云、公宴御歌合不覺悟、二條故攝政家公事五十番歌合、入道大納言と云名字有之、大閤於大臣者入道左大臣女如此被申、於大中納言、其分無御所存、以准據入道前左大將藤原公數女、如此可有歟、亞相此儀可然之由同心、仍其予細申入了、其外權大納言藤原某大略如此、暫退出、

## 〔實隆公記〕四

六月廿九日、乙丑、晴、元慶携一樽來、午刻著束帶參內、宮川歌合校合了、七夕七首題方々書遣之、可有御歌合之由相觸了、

三條西實隆詠草ヲ飛鳥井雅親ニ送ル

七月五日、庚午、晴、七夕詠草遣（飛鳥井雅親）大津武衞許了、

六日、辛未、陰、及晩雨降、向內府亭參內、明日詠草入見參了、入夜退出、

七日、壬申、雨時々濺、早旦行水、短冊（七首）令詠進之、今度可爲御歌合也、御人數廿八人也、〇中略

人數二十人

今日御短冊分左右七十首宛、被取重之、一反於御前讀申了、

十八日、癸未、霽、〇中略七夕御歌合一卷（清書、國卿、教）宗祇法師南都下向之便宜、可下之由可命之由、被仰下之間、則召仰宗祇了、

宗祇ニ托シテ一條兼良ノ判詞ヲ求ム

九月十五日、己卯、晴、候番、七夕御歌合禪閤判詞中書依仰寫之了、（今度正本於路次紛失了、）

正本途中ニ紛失ス

## 〔大乘院寺社雜事記〕六十四

七月廿九日、

一宗祇下向、室町殿、同御臺、禁裏御歌合御點判詞被申之間、爲御使參上成就院云々、大亂中希有事也、

## 〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏

七月十八日、癸未、晴陰、入夜月明々、午天參御臺御方處、御座准后御方程也、終日女房數輩祗候之間、雜談秉燭程御臺御方、自准后御方還御之間、參御前、供御御中酒之御盃被下之、數剋有御雜談、〇中略、高辻長直、松梅院ト加賀富慕莊ヲ爭フコトニカヽル、九月二十七日ノ條ニ收ム、其外和歌以下種々御雜談、及數剋之間、深更

義政勅題ヲ評ス

退出、連々可祗候由有仰、祝著千萬也、歌道事御物語之次、去七日禁裏御歌合、勅題不直、於歌合之題者、いろふも廣ク直ある題古來用來之、今度勅題不可然之由、准后之仰之由、有御物語、尤可然事也、

正本西軍足輕ニ奪ハル

九月十二日、丙子、晴、自南都有便宜、禁裏七十番御歌合一卷、自禪閤加判詞、去月中旬比被進之處、於路次敵陣足輕奪取云々、仍禪閤自筆中書到來、〇中略 秉燭程參內、當番故也、不私遲參也、仍不及退出直宿侍、御歌合中書以民部卿進上之、

十一月四日、戊辰、晴、自室町殿有御使、永阿彌、〇中略、住吉社法樂和歌御張行ノコトニカヽル、十月六日ノ條ニ收ム、次去七日公宴御歌合判、未參著候哉由被尋下間、〇中略 御歌合事者、未京著由申入者也、

題

〔文明九年七月七日七首歌合〕題

作者

海邊七夕　折草花　晴夜月　歎無名戀　不憑戀　山家雨　砌下有松

作者

左

後土御門院女房

仁和寺入道親王道永

洞院入道前左近衛大將藤原公數女

甘露寺按察使藤原親長

四辻參議左近衛中將藤原季經

伏見式部卿邦高親王

妙善院藤富子、裏松贈內大臣重政前左大臣室

四辻權大納言藤原季春

長橋勾當內侍

西三條藏人頭右近衛權中將藤原實隆朝臣

右

慈照院源義政前左大臣

梶井堯胤法親王

轉法輪三條公敦內大臣

後花園院皇女、後土御門姉安禪寺宮

轉法輪三條實量公女入道前左大臣女

文明九年七月七日　勸修寺權大納言藤原敎秀　海住山從二位藤原高清　下冷泉左近衛權中將藤原爲廣朝臣　柳原參議右大辨藤原量光　正親町三條右近衛權中將藤原實興朝臣

判者　一條禪閤兼良

海邊七夕　義政

一番　海邊七夕

左持　女房

心なきあまも今夜は藻鹽草かきて手向よ星合のはま

右　前左大臣（義政）

鵲の翅にかけよ七夕の今よひ行あひの天のはしたて

左、ふ月七日は、よの中の事として、星合の空を詠め、水かげ草のことの葉に、おもひの露をしたてつゝ、手向にかふる日なりけり、心なき浦のあま人も、世にしたかふ習ひなれば、とはたる船のかぢのはに思ひを



よせて、藻鹽草かきあつむる程のしわざは、などかなからんとなるべし、右、あまの橋だては、神代のむかし、女神おがみのあまくだり給ひし、あまのうきはしといへる一説有、しからば二の星の行あひのかよひぢ、たよりありといふべし、鵲のはしは、二の鳥の翅をならべて橋とせるにや、又橋は別に有て、翅に是をかくるにや、いづれとさだめがたければ、詞のたよりにしたがひて、ともかくもよからむは、有がたかるべしとも覺えず、またかさゝぎは、まづは烏を申侍れど、さむきすさきの鷺をも、源氏物語に鵲と名付侍にや、是によりて、家隆卿歌にも、鵲のわたすやいづこ夕霜の雲井にしろき峯のかけはしとよみ侍にこそ、

邦高親王　安禪寺宮

二番

左勝　式部卿邦高親王（伏見宮）

浪こさむ恨はあらし七夕の絶ぬちきりのすゑの松山　邦高親王御集同ジ

右　安禪寺宮

星あひの手向に須磨のあま衣かすてふ事もまとをなるらん

涙こさむうらみはあらしと侍る後、あだし心もなき星のちきりを、松山のなみにかけてよまれ侍り、又かすてふまどをなるは、須磨のあまの鹽燒衣おさをあらみといへる歌をとられ侍れど、手向とありて、又かすと侍れば、同じ事のやうに聞え侍り、かすてふ事ゝまどをなる心に取なされ侍しは、君がきまさぬといへる和歌の心にかゝりて、歌の餘情も侍らんかし、愚なる心には思ひよる一ふしを申侍るなり、左こ

三番

左持　入道親王道永

けふといへと手向はよその星島やあらぬかちとる秋の舟人

右　堯胤法親王

人なみに袖をかすてふけふのみやあまの衣もほしあひの空

手向はよそのほし島や、作者の心には、手むけは爰のほし島にはなき心によまれ侍れど、詞のうつり、いかにそや聞え侍り、又手向には袖をきるなどゝ、古人も讀れ侍れど、此歌に取ては、袖はかりをかすやうにきこゆ、如何、持たるべし、

四番

左勝　義政夫人日野氏　前左大臣室

心なきあまもや今夜人なみに鹽たれ衣ほしにかすらん

右　轉法輪三條實量ノ女　入道前左大臣女

七夕はいかに契て松山にこすてふ波のなきよなるらん

人なみにあまの心をかす衣は、うへにもみえ侍れど、心なきあま人と侍れば、人なみにかす心は同じ事ながら、いひおほせて聞え侍り、又鹽たれ衣星にかすらむも宜侍り、松川のなみもすぎつる番に打出侍れば、此歌にとりては、かならす波のこゆべきやうにきこゆ、本歌の心に相違し侍り、左まされるとや申侍らむ、

五番

左勝　洞院公數ノ女　入道前左近衛大將藤原公數女（贈太政）

七夕に今夜かしてやしほたるゝあまの衣も片時ほすらん

右　轉法輪三條公敦　内大臣（轉法輪三條公敦）

四辻季春　勸修寺敎秀

星あひのやすの川原に伊勢の海の神代の昔思ひ出らん

左、有のまゝに云くだされて、思ひ入たる所侍らぬにや、右、神代のむかしは、天照大神のそさのおの尊、あまの八十川原をへだてゝ、いせの海にもよりきたらぬとに侍れば、よもさまでは侍らじ、かの國に星あひの濱といふ所のあるにつきて、もし子細ある事にや、もとよりつりをもて、あまつくみをはかる事にて侍れば、それまでの事もいまだ及侍らず、左たしかなるにつきて、しばらく可爲勝哉、

六番

左持　權大納言藤原季春（四辻）

星あひの空にはたれか鵲のよりはにまたる天の橋たて

右　權大納言藤原敎秀（勸修寺）

暮ぬとて釣する海士はかへる也今やいつらむ天の川船

天の橋立、かさゝぎのよりはに似たる事は、空にばかりかたかるべし、にたるの辨じにてはなくともありなんかし、又天川は、かた野にちかき名所にて、業平朝臣も、七夕つめに宿からむとは、おなじ名につきてよみ侍り、七夕のこゝろなくは、ひさかたのなとゝいはずば、なを名所のあまの川にや成侍らん、しばらく持とすべし、

七番

左持　按察使藤原親長（甘露寺）

けふといへば名にもあひあふ星島（崎イ）や鹽なれ衣海士もかすらん

右　從二位藤原高清（海住山）

四方の海の波（もイ）にや今夜七夕のとわたる船のかけを漕らむ

左、一二句よろしからず侍り、右、かげを漕らむも、誰にてもこぎてをいはずば、猶大やうにや侍らん、勝負わきまへがたし、

八番

左持　勾當內侍

伊勢のあまも苅て手向よ七夕の年に稀なる中のみるめを

右　參議右大辨藤原量光（物原）

名にしおふ空にかよひて星合の濱へ涼しき秋のはつかせ

左、としにまれなる中のみるめを、右、濱邊涼しき秋の初風、いづれも優

に聞え侍れど、一二句なを思ひたき心地す、にしきのはかまをきたるとは、かやうのををや申侍らん、

九番　左勝　四辻季經　參議左近衛中將藤原季經

浦風や涙のをすけてからことを手向にすらん星あひの空

右　冷泉爲廣　左近衛權中將藤原爲廣朝臣

袖の上やこよひほさまし七夕の逢瀬の浦の秋のはつ風

涙のをすけて、からごとをなどは、和歌の詞といひ、一首の躰もあしからず聞え侍り、七夕の逢瀬のうらみ、みとをき名所にては侍れど、よりきたれるやうには侍り、たゝし七夕のあふせのうらによる涙のよるとはすれどたちかへりつゝ、中務卿宗尊親王の歌とある草子に見及び侍り、作者はしらすして讀合侍れど、歌合などには引出さるゝか、不幸とも申、又高名になることの侍るなり、すでに同類あるうへに、始の五七もいかにぞや聞え侍り、左無難につきて勝べきにや、

十番　左持　三條西實隆　藏人頭左近衛權中將藤原實隆朝臣

枯はてぬ江にこそありけれ難波かた芦のひとよの星の契りは

右　正親町三條實興　右近衛權中將藤原實興朝臣

手向とや空に聞えし星合の折からことの涙のしらへは

芦はかるゝ草なれば、枯はてぬ江には、いかでかはり侍るべき、からことの調も、さきにはや耳にふれ侍れど、是は調子もひきく□□聞ゆ、亦二句のてにはも聞えんにてあるべきにや、しばらくなずらへて持とすべし、

十一番　折草花　左勝　邦高親王　入道前左大臣女

秋風のさそはぬさきと折袖に露はみだすな花の萩原

集ニハ、露はヲ露もトアリ、　○邦高親王御

右　おらは落とらはけぬとも萩か枝のつゆ外にみん花の色かは

折は落ぬべき萩の露、源氏物語の詞には侍れど、詞のつゝきいかにぞ、

や聞え侍る、つゆほかにみむもよろしからざるにや、左ことなる難なかるべし、○以下七十番マデ、歌合及ビ一條兼良ノ長歌共ニ略ス、

○皇子勝仁、七夕和歌御會竝ニ義尚續歌ヲ詠メルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親長卿記〕八　七月七日、參内、自今日當番也、自宮御方被召和歌、御歌合之人數之外、少々近臣等也、懷紙元長詠進之、

七夕同詠七夕枕

和歌

藏人左少辨藤原元長

三行三字懷紙書樣如此、不及披講、

〔實隆公記〕四　七月七日、壬申、雨時々灑、○中略於若宮御方有御樂、御樂未終退出、已及深更、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月七日、壬申、晴、時々降雨、○中略、義尚、犬追物ヲ行フコトニカヽル、六月二十八日ノ條ニ收ム、有御續歌、可詠由有仰、但二星手向、服解中、○父綱光薨ズルコト、二月十四日ノ條ニ見ユ、二斟酌由申入、不詠進之、御詠有御談合、有大飲御酒、及曉天退出、

十日、乙亥、賀茂社供僧等、別當隆算ノ闕怠ヲ訴フ、是日、隆算ヲ罷メ、律師興祐ヲ以テ之ニ補ス、

義尚續歌ヲ行フ

樂アリ

懷紙ノ書樣

甘露寺元長詠進



〔親長卿記〕八　六月廿一日、晴、賀茂供僧與別當隆算法相論、正月三ヶ日修正人用不下行事、御神祭神供闕怠事、三問三答狀奏聞、兩條理形之上者、可被改別當職云々、理運之輩可注申之由可仰云々、

廿四日、晴、○中略別當理運之輩、可注申之由仰了、

廿五日、晴、供僧等來、可被改別當職之條畏存、但供僧職同可被改動之由申之、予云、就別當役兩條闕怠之問、不可及供僧之儀、書改申狀可給之由仰了、

廿六日、晴、申狀到來、奏聞、可被仰付社務之由申候、其趣奏聞了、被仰付社務者、定可有引汲事、宿老供僧幷理運之仁躰可申云々、

廿七日、晴、仰之趣、仰執行幷供僧等了、猶難治之子細條々申之、

廿八日、晴、早旦有召參内、○中略別當事子細奏聞祗候、可仰社務之由有仰、供僧等來、別當事申之、無可注進之仁躰云々、先舊蔕供僧注進云々、妻帶之仁幷地住不可然之由仰了、其上今日委細奏聞、可仰社務之由有仰、遣奉書於奉行職事了、

七月廿八日、晴、賀茂執行來、別當事治定、畏入之由申之、

修正ノ費ヲ下行セズ

三問三答狀奏聞

別當職ヲ改メ供僧ニ及バズ

別當新補理運ノ輩ヲ供僧ニ注進セシム

〔親長卿記〕三十二

賀茂神宮寺別當新補理運之輩、可被注進之由、可被下知供僧等給之由、被仰下候也、謹言、

六月廿三日

藏人辨殿

神宮寺別當隆算法印、去正月修正三个日人用御神祭神供等闕怠事、供僧等訴申之間、可被改補候、理運之輩急度可注申之由、可被下知彌久縣主給之由、被仰下候也、謹言、

六月廿八日

藏人辨殿

賀茂神宮寺別當事、隆算法印就正月三个日修正人用幷御神祭神供等闕怠、所被改補與祐律師也、可被下知給之由、被仰下候也、謹言、

七月十日

藏人辨殿

十一日、丙子、皇子竝ニ邦高親王、酒饌ヲ獻ゼラル、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月十一日、宮の御ゝさ、二のみやの御ゝさふしみとのよりめてさ記御さゝ月ゐいりて、御ゐし〳〵と千秋せんをゐめてさし、おとこさちもしこう、庭田入さうゑもをのさよて、つゐ手ゐていゐ井ゐいらて、ゑうちやく申、

〔親長卿記〕八　七月十一日、晴、依召參內、宮々御祝也、

〔實隆公記〕四　七月十一日、丙子、晴、○中略申刻有召之間、著束帶參內、今日若宮、二宮御方等被進御盃、仍各參候、有微聲等、及深更退出、

○尼宮等、酒饌ヲ獻ゼラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月八日、くろき御所〳〵おらしまして、めてさよ御さゝ月まいる、ひめ宮の御ゝさよりもえしめてゐいる、大しやう寺殿もおらします、御ゐし〳〵とゐいりてめてさし、

〔親長卿記〕八　七月八日、晴、今日有一獻、御比丘尼衆有御祝、

幕府生身魂祝、義政夫妻、義尚ヲ訪フ、

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）　七月十一日、丙子、晴、爲生見魂御祝、室町殿渡御宰相中將殿、御臺御方同御成、予如每年可祗候由、以御使□（彌阿）被仰下間則參祗、藤宰相永繼卿、日野侍從政資等參會、三獻御酌、有召出、宰相中將殿御酌也、拾遺、予、藤宰相、伊勢守等之外自餘人不參、此後拾遺早出、少年之間予加扶持者也、予參御前時、御臺御方、准后各御芳言共有之、祝著多端也、五獻御酌、御臺御方七獻御酌、室町殿各參祗之儀同前、其外北小路三位尼、伊勢守、女中衆等御酌及數个度間、沈醉之外無他、漸及曉、天還御後退出、

（日野苗子モ列席ス）

十二日、丁丑、晴、爲生見魂祝、一荷百疋、春日局、新兵衞督局等ニ送遣、每年儀也、十三日、戊寅、晴、入夜向春日局、有來樂、昨日生見魂祝遣之間、其祝也、

（廣橋第生身魂）

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）　七月六日、辛未、晴、自午天雨降、今日爲生見魂祝言、進御盃於北堂御方、寔千秋萬歲始也、珍重々々、幸甚々々、局御料人惠聖院附弟等各有此儀、（○廣橋家生身魂ノコト、便宜合敍ス、）

十三日、戊寅、禁裏御料所播磨鳥取莊、年貢ヲ上ラザルニ依リ、勸修寺敎秀、廣橋兼顯ニ命シテ、之ヲ督促セシム、

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）　七月十三日、戊寅、晴、（○中略）未明自禁裏民部卿奉書到來、四時分鳥取御料所未進等事可被仰付子細有之、可參祗云々、赤松代浦上美作守（則宗）可被召仰故云々、仍自讚岐（細川成之）守宿所直參內、頃之勸修寺大納言參入、赤松代官未參、鳥丸靑侍以玉村度々譴責之處、頃之浦上若黨參上之間、以玉村仰含、於御返事者浦上美作守參歟、不然者同名五郎左衞門尉可申入由、堅仰含了之間、頃之祗候、相待御返事處、世上事談合之子細有之、仍浦上不得隙、及晩可參由申入間、晝時分先退出、（○中略）八半時許浦上參上、急可參祗由有召、仍又參內、勸修寺大納言兩人問答委注別記、（○別記見ナシ、所秉燭程退出、）八月二日、丁酉、晴、四時分參內、當番故也、（○中略）勸修寺大納言敎秀卿同祗候、今日予當番、祗候之次、鳥取庄御年貢未進事、可被催促由、昨日被申合故也、雖然鳥丸雜掌玉村四時分可參入由、自勸修寺方度々雖仰含、追以不參上之間、彼卿及晩被退出、性異緩怠無是非者歟、彼玉村每度如此任雅意由、彼卿被相語如何之、

（播磨守護赤松政則ノ代官浦上則宗ヲ召ス）

十月六日、庚子、晴、夜前可祗候由被仰下間、午天參內、播州鳥取庄御年貢無沙汰事、玉村參者勸修寺相共堅可加問答由仰也、雖然玉村例式遲參之間、先參宰相中將殿、（○中略）及晩玉村參上之間、堅可催促由申付之處、明日浦上（宗勝）近江守

浦上宗助ニ嚴命セラレントス

可參上分可申付間、於御前堅被仰付者可然由、令言上之間、內々伺申處、然者其分可申付由勅答之間、先退出、

宗助參入セズ寄子ヲ出サントス

八日、壬寅、晴、浦上昨日今日不參、可進寄子由申云々、緩怠之至、爲之如何、末世也、雖爲明日浦上可參上之由、可被申付由返答、

權大納言四辻季春越前ニ下ル、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月八日、癸卯、晴、宰相中將有御使、夏ミ、阿四辻大納言越州下向事、御尋之間、去月十三日下向由申入者也、御尋之時者、得其意可申入、申置由、同申入了、

義政燈籠獻上皇子ニモ獻ズ

十四日、己卯、盂蘭盆會、義政及ビ廷臣等、燈籠ヲ獻ズ、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月十四日、御とうろともをうく〳〵よりゐいる、むろまち殿よりもいつものことし、御つゝひくゐんゐゆ寺大納言、宮の御方、二の宮へもゐいる、めてたし、

十五日、御とうろゝゝふもゐいる、御いゐ井とし〳〵のことし、ふしミ殿ある、御とうろもゐいらせらるゝ、御いゐ井の時、御まれゐいる、ゐしやう院ゐさんゐの御うり一ゝゐいる、

三條西實隆蜷川親元伊勢貞宗ヨリ贈レル燈籠ヲ進獻ス

十六日、御とうろともくしふて御くゐりあり、御所〳〵ありゐいらせらるゝ、御さゝ月ゐいる、

〔實隆公記〕四　七月十四日、己卯、晴、早旦退出、小番今日令相博元長者也、今日定意房設齋令招請了、入夜燈呂二ケ、一親元、一伊勢守貞宗、到來、進上禁裏并若宮御方了、水向等儀如例年、秉燭時分夕立、雨雷鳴等甚、

深更御宴アリ

十五日、庚辰、陰、早旦盆供御、供養請定意論師、入夜著束帶參內、御燈呂濟々拜見之、御祝如例、今夜候番、及深更密々有盃酌事、

〔親長卿記〕八　七月十四日、晴、及晚雷鳴甚雨下、今日燈爐三進上、十五日、晴、夕立降、入夜參內、有御祝、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月十三日、戊寅、晴、○中略午刻許自八幡田中法印生清許、燈呂到來、爲可進上宰相中將殿、每事自南都修南院召上所也、通路難治之間、每事八幡越召上者也、繪樣□□之童子以下アヤツリ物也、秉燭程自禁省直ニ參宰相中將殿、持參燈呂、近比面白見物之由被仰、頃之祗候、及半更退出、燈呂每年今日進上者也、

石清水八幡宮田中生清燈籠ヲ義尙ニ贈ルル燈籠ノ繪樣アヤツリ物

十四日、己卯、晴、○中略秉燭以後進上燈呂於禁裏并若宮御方、御臺御方等、每年廣橋兼顯燈籠ヲ禁裏ニ獻ジ

義尚及ビ義政夫人ニ贈ル

之儀也、各以青侍進上之、御臺御方へハ以權大納言局進上者也、宰相中將殿へハ毎年昨日令進上間、是夕持參者也、

十五日、庚辰、早朝夕立雷鳴、無程屬晴、○中略秉燭程參宰相中將殿、爲御燈呂一見也、誠成燈市、盡善盡美、尤有其興、犬馬場被置之、終夜祗候、被下御盃、數盃之後退出、于時寅刻許歟、御燈呂又如佳例被拜領之、祝著之由則申入、御禮退出者也、

兼顯燈籠拜領

十六日、辛巳、晴、自禁裏同宮御方等御燈呂拜領、祝著之由、以書狀內々申入者也、

掃部寮御所ヲ裏ム

○廣橋兼顯、義尚等ニ燈籠ヲ贈ルコト、便宜合敍ス、

十六日、辛巳、月食、

〈御湯とのゝ上乃日記〉一　七月十六日、月あよくとりいぬのこく、かもんをうゐいりてつゝ見ゐいらせる、おし（い脫）ところ御ちやうちゝ〳〵のおりふしふゝつゝをさるゝ、しうちやく申けるゝ、

〈實隆公記〉四　七月十六日、辛巳、霽、○中略今夜月蝕也、御所裏事、掃部寮奉仕之、源富仲參勤了、入夜退出、



宮女某院領支證ヲ二尊院ニ贈ル

〈本朝統曆〉十一　戊申、七大朔丙寅、卯八、十六望、酉八、月蝕三分弱、酉六、戌一、

十七日、壬午、後花園院宮女某、聖衆來迎院領出雲淀新莊ヲ二尊院ニ寄ス、禪林寺聖衆來迎院、出雲國淀新庄、

〈實隆公記〉四　七月十七日、壬午、霽、今日自舊院上臈局永觀堂文書被遣二尊院善空上人、可有管領之由也、予爲相傳罷向彼亭、

〈二尊院文書〉二　〔附箋〕「舊院上臈局　文明九七十七」　○山城

申候つゐやうくゐん殿うの寺ゐやうのゐをうまいらせ候、ゐの殿へきやうゐ御をうけんも候ゝ、めてゐをゐ寺殿も御とりさて候やうゐさゐ比ミゐいらせ候、こゐさゐてもをうけんし候しかとゑ、ちゝころを中々うちおき候間、ゐゆこ方ゐと殘も御をうけん候ゝ、を行候ハゝ、いつそやも申候やうに、人さいをもかさ紛ゝ、御さんゝうう申候へく候、この寺北事參、へちしゝ代々ゐる所の事ゐて候を、さい所ゝやうゐあり行候、これさゑ〻ふ日よく候へハ、やゝてあゐさへつゝはされ候へく候、又ゐさての心さしゐ御つとめのゐいてこそと、ふしゆあけさく候、おゐしく御つさへ候て給へく候、ゆるゆるしゐ御心ゐし候、ばるゐこそ候へ、をりさち候あきゐて候ハす候事、心よ

りゐらよ、めてさくもとのやうよて申うけ給へく候、ふのよしをよを〳〵
二うん院へ申され候て給候へく候、猶御□□そ申候へく候、あゐらしこ、

頭中將とのへゐいらせ候、

十九日、甲申、義政、義視ノ女ヲ猶子ト爲シ、曇華院元揉芳成尼ノ弟子ト爲ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月十九日、雨ふる、夕ゐらさいるゝ、ことれるこ
とれし、とん花院とのゝ御てうし（衍カ）に、いまて川とのゝひめ君を、むろまちと
の御ゆいしりて、御さゝの御ゐさつれゐいらをられて、入ゐいらをらるゝ、
すけとのも御ゐいり、

廿日、とん花院とのより、みな〳〵の御中へとて、おり御さるゐいる、

〔親長卿記〕八　七月十八日、晴、參曇花院殿、明日御取亂事申入了、次參安禪
寺殿、久不參之故也、
十九日、俄雨下、未剋許、參曇花院殿、源大納言雅行同道、今日御附弟御入室、御
臺、今出河前大納言義視女、室町殿御猶子云々、被同道申入御、予息女眞益祇候之間、依便内々令參
也、五獻之後早出、

〔實隆公記〕四　七月廿三日、戊子、陰及晩雨降、今日參曇花院殿、御弟子今出川殿

義政夫人日野氏伴ヒ至ル

甘露寺親長庭田雅行參會ス



御息女、御臺御猶子、御入室、去十九日也云々、爲御禮令祇候、御盃被下之了、歸路向舊院
上藏局、

日野氏ノ猶子

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月十九日、甲申、朝程降雨、自午天屬晴、未刻許御臺
御方渡通賢寺宮（玄下同ジ）、奉號頓花院（曇下同ジ）、舊院實御連枝也、是御附弟御入室故也、今出河大納言殿御息
女也、自元御喝食也、日比御座通賢寺云々、去比自敵陣被入申御臺御方所也、予祇候事、昨日自
頓花院宮再三被仰下之間、可祇候由申入、雖然聊有故障之子細間不參、後聞、
源大納言雅行卿、按察使親長卿父子等祇候云々、曉更還御云々、典侍殿、惠聖
院等祇候也、
廿日、乙酉晴、參頓花院宮、昨日御入室之儀、珍重之由賀申入之、被下御盃、昨日
不參□□御無念之由有仰、
廿八日、癸巳、晴、○略中頓花院宮、同御喝食御所、御入室之後爲御禮、今夕可有渡
御云々、仍准后渡御御臺御方、予等構見參、頃之可祇候有仰、雖然沈醉之間、早
出者也、惠聖院祇候、

西陣ヨリ日野氏ノ許ニ來ル

〔尋尊大僧正記〕七　六月二日、土用
一去月末、今出川殿姫君公方爲御猶子、奉成通玄寺殿、或又依申沙汰、大内爲

大内政弘義視ノ女ヲ義尙ニ

嫁セシメントストノ説

御臺所奉成新御所御方云々、色々及其沙汰、所詮天下無爲基也、必定云々、
珍重々々、

鎮守前ニテ行ハセラル

諸大名、幕府ニ出仕シ、光聚院某ノ示寂ヲ弔ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　七月十九日、甲申、朝程降雨、自午天屬晴、○中略諸大名今日光聚院事、爲御弔悉出仕云々、今日復日也、如何之、

廿日、乙酉晴、○中略次向光聚院、故東堂事弔之、於門外謁椿首座、次向慈慶院同弔之、於門對面、

廿五日、庚寅、晴、今日光聚院事御弔、勸修寺大納言、民部卿、予等參小河殿、以右衞門督局申入准后御臺兩所者也、

二十二日、丁亥、辯才天法樂、邦高親王御樂ヲ張行セラル、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月廿二日、けさへさいてんのゐうらくゐ、御ちふのさうふて、ふ〜〜とのゐ〜〜のわとこたゐりて、御樂あり、

〔親長卿記〕八　七月廿二日、晴、今日當番、召進元長、於辨才天（辯才天向ヲ）鎮守前有御樂、伏見殿御張行、可爲御月次云々、伏見殿御巴、兵部卿筆、言國朝臣同、元長筆、俊景朝臣雖被相催故障云々、

御持佛堂ニテ行ハセラル

月次法樂

法樂犬死ノ穢ニテ延引

邦高親王御參內

鎮守前依昨日雨、地濕之間、於御持佛堂有此事云々、且叡願云々、
○コノ後辯才天法樂御樂張行ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　八月十六日、へんさいてんの御樂々ふなり、宮の御ゐさもあそハす、ふしゝ殿より御さるゐいりて、御ゐし〜〜と御しやうくゐんあり、

九月卅日、ゐんさいてんの御樂あるへきにてありしよ、々んしのゐにてなし、御ゐいよも々さよりならしまさす、

十月十七日、へんさいてんの御樂あり、宮乃御方ふるまいよて、御さゐ月□□□□ゐいる、めてさし〜〜、ゐんきう寺殿、とん花院殿なる、御庭のもみちおもしろうて御らんきらるゝ、ゐむゐしの御ゐさより御てうしゐいりて、こうさいなとなりて御あそひなり、

〔實隆公記〕四　十月十七日、辛亥、晴、今日有御樂云々、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　十月廿九日、へんさいてんの御樂なり、樂人さちの御てうしともゐいらきらるゝ、ふしゝ殿くもしれる、

〔實隆公記〕四　十月廿九日、癸亥、晴、今日猶候番、於勾當局有盃酌、今日有御

樂、伏見殿御參、兵部卿、四辻宰相中將、言國朝臣、元長等祗候、各進上御兆子、有盃酌、

〔歷代殘闕日記〕七十八重亂記　十月廿九日、

一禁裏御樂ニ本所御參內、辨才天法樂、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　十一月十一日、へんさいてんに御かくあり、女うさち御てうしゐいらをらるゝ、ゐんをん寺殿、とん花院殿なともなる、御ねし〳〵とめてさし〳〵、

〔歷代殘闕日記〕七十八重亂記　十一月十一日、

一辨才天ノ御樂、禁裏御座候也、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　十二月十八日、へさいてんの御ゝくゐり、よりあきよさいこうさせらるゝ、

三寶院雜掌、院領越中院林郷前代官山田盛之ノ、院領ヲ押妨スルヲ、又富小路俊通、所領越中東條代官三井盛宗ヲ改易センコトヲ、幕府ニ訴フ、

〔親元日記別錄〕中

一三寶院御門跡雜掌（清泉州）（文明）一九七廿二

安禪寺宮　曇花院宮　御參內

越中國院林郷先御代官山田勘解由左衞門尉盛之、不致勘定、剩號有借物、相語守護人押妨云々、

合一布霜臺八五

一前彈正少弼俊通同日、

越中國射水郡東條之內三ヶ村代官職事、一旦三井彌次郎盛宗ニ令補任、無不法者不可改易之旨、就所望加文言畢、雖然立百姓於借錢請人、錢主譴責候間逃散畢、然上者可改易云々、

守護人ト結托ス

百姓ヲ借錢請人ニ立ツルヲ以テ錢主ノ譴責ニ遇ヒ逃亡ス

二十五日、庚寅、阿蘇惟家、肥後滿願寺寺領ヲ改易スルコト勿ラシム、

〔滿願寺文書〕○肥後

肥後國阿蘇郡滿願寺々領目錄□

一所、阿蘇大神護寺免

一所、志津里　一所、江古尾

一所、秋原　一所、尻江田

一所、立岩　一所、中原石田

一所、上田石田　一所、宮原石田

阿蘇惟時寺領改動ヲ遺誡ス

一所、如法經免

右彼領地之事、任惟時御遺誡、此内雖爲一所、不可有自他之妨之旨、或他寺之人、或當寺之方、若者俗、縱雖爲小所寺領之内、申放有成妨之輩者、披彼證狀、出家者令擯出寺中、俗者可加刑罰、然而彼精舍當住宥辨之時代窺先軌所申定也、爰而雖爲宥辨付弟之僧侶、勸行寺役、至懈怠者、可被改職也、雖爲若者奉行、若者代官、駈當時之權威、於寺務申懸非道者、其科勿論也、遠守惟時御答言、進(近)仰惟歲御證狀者也、仍後代狀如件、

文明九年丁酉七月廿五日庚寅

宇治朝臣惟家(花押)

三十日乙未、興福寺、同寺佛地院領河内山田莊ヲ、同守護畠山義就ノ知行シ、尋尊ノ院主職タラントスルヲ排シ、之ヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、東北院俊圓ヲ院主職トシ、院務ヲ知行セシム、

〔大乘院日記目錄〕三　八月十八日、佛地院々務事、可爲東北院僧正(後嗣)云々、七月卅日奉書也、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　七月十五日、

學侶山田莊ヲ直務セントス

守護代遊佐長直之ニ反對ス

佛地院惡行ノ振舞ハ先代未聞

佛地院ヲ追ヒ院家ノ事ヲ俊圓ニ諮ル

守護畠山義就山田莊ヲ知行ス

一、山田(河内)庄事、自學侶可直務之由、以公人申遣間、守護方以外腹立、彼使者追立之畢、所詮佛地院得業附弟之間ニハ不可渡之由、守護申切之、先日太子之法師之事故也、珍事、東北院も學侶も、近日間事不可有了簡候、廣壽院殊更去十一日入滅之間、佛地院進退尙々不可有正躰者也、珍事々々、

十六日、

一、定寛來相語、就山田庄事、自遊佐方巨細□□□□□間成集會、供目代披露之、先佛地院今度惡行先代未聞時宜也、遊佐(長直)親祖父以來、於河内國、自他方如此沙汰事不承及候、失面目條、不能左右候、次就此題目、爲寺門、佛地院罪科被拂寺僧之由云々、隨而院家事、爲寺門被申合東北院云々、此事自元御支度之題目也、交衆之御所望一向無之、舊冬小性一人申下、爲名代分可有隱居、落髮御所存無其隱上者、只今被拂寺僧之由事、更以不可有御迷惑事也、次彼小性爲□被申合廣壽院、東北院知行之由事、於京都無其□□□□□□□御支度以外之間、於山田庄者、爲守護方可致知行候、不可閣申候、彼太子西坊事、于今被召置京都候、剩有德者間以料足可請之旨、被仰付之間、爲守護申子細之處、廣壽院御違例之間、本復以後可有一途云々、條々御惡

佛地院山田庄西坊ヲ掠取ル

布施英基ノ沙汰ニ基ク義就英基ヲ責ム

行不申及候、就中山田庄事ハ、彼西坊雜物被返下、幷上使上野公以下、被召下者、於庄家者可返申入候、不然者、中々不可承是非之由、披露之云々、定寛申、遊佐所存此分也、如何樣子細候共、不可事行旨、東北院事ハ、廣壽院、佛地院、一躰同心之由、取置之間、不可去進之條、所存躰以存知候、せめてハ面を被替候て、爲門跡御計略候ハヽ、無爲之儀も可有歟、當毛事守護落取候ハヽ、尙々難□□□□□□云々、如何樣東北院幷學侶ニ可申合之由仰悅入由畢、

十七日、

一就佛地院事、召守弘仰遣光守律師方了、

廿一日、

一□□□□□□庄成下樣、巨細相語者也、佛地院掠申子細者、山田之西坊、緩怠之由申給奉書、而亂入於別所者召取之、自國他國惡黨共亂入之間、佛地雜物共取散之畢、彼奉書布施（英基）書之、隨而畠山左衞門佐（義就）召布施、彼召人者、太子之西坊也、非山田庄內、奉書成樣難得其意、於守護失面目之間、早々以伊勢守可伺申云々、布施申分更以不及覺悟候、上意之由被召廣壽院殿、被

英基過誤ヲ謝ス

學侶山田庄直務ヲ義就ニ求ム

守護山田庄ニ放火シ百姓逐電ス

定寛百姓ノ還住ヲ計フ

定寛平群島ト共ニ代官競望

仰下間、成奉書計也、承趣可申伊勢守云々、則伊勢申分守護腹立候子細、幷在所相違事等以外次第也、廣壽院殿ニ此子細可申入云々、隨而布施廣壽院ニ申處、佛地院申分ヲ誠ト思テ、奉書事申成候處、さ樣ニ事相違、兼日念比ニ、伊勢守申條悅入、率爾ニ公方ニ不可申、無爲之可致了簡云々、佛地院ニ被尋之處、ムサ〳〵ニ返答云々、廣壽院腹立、守護申分者、彼西坊可返給之、雜物共□□□□□□根本也、其後連々催促之處、廣壽院以外違例之由返事、取直者、早可有一途云々、然而既以入滅也、又學侶より山田庄事可直務之由、被申於守護者不可承引、何も悉以可返給候、其時於庄家者可放申云々、寺門奉書申入于京都、幷守護方直務使等事、一圓宗算五師所行也、彼庄家今度自守護方放火、百姓共逐電了、然而定寛色々申合遊佐、於百姓者還住之耕作了、學侶先以喜悅旨定寛ニ申之、其後ハ色々申合定寛畢、今度可直務之由一段者、定寛ニハ隱密□□□□指下之、如案ニ追返之畢、當庄代官事定寛□□□如此致其沙汰云々、宗筭表裏猶以興成之由相語者也、一興胤內々付才學、山田庄代官事、定寛競望之條も勿論也、以河內公令申東北院之處、不及領狀云々、又平群嶋以長敎內々競望、色々契約共在之、而代

雜掌柚留木重藝京都ニ至リ幕府ニ訴フ

文明九年七月三十日

官事者治定勿論也、於成身院事子細能々令存知云々、嶋も、定寛も、遊佐方半吉物也、可成如何哉、此條ハ隱密子細也、不可口外云々、

一以光秀巨細仰合長敎、無等閑儀可計略云々、東北院儀、能々以淨法(任鶴)院可申居云々、東北院執心ハ勿論也、今度雜掌柚留(重藝)木上洛ハ、此題目ニ自學侶上之畢、其子細ハ山田庄以御下知可問答遊佐事、院主職事者、可被仰付于東北院之由、可被成奉書事、此兩條ニ、柚留木上洛□□□□ハ定不知分ヨて、寺門ニ打任也、每度之事書以下、宗筭五師之沙汰也、可自專之由被存定之事、東北院心中勿論云々、然而自門跡被入御手者、云寺門、云六方、不可然旨可申入之、さ候ハヽ、又門跡御方申可有之間、爲相論之地、其間ニ院家事ハ、無正躰可成下條勿論也、珍事々々、仍淨法院可申合之由、內々長敎申入意見、

自元門跡心中ハ、只今如所存成行者勿論也、失面目子細有之者、如何樣可成相論之地、東北院一期も、五年三年ニハ不可過之間、修(卯脫カ)ハ門跡所存ヲ□□□□□左右事也、其間ハ山田庄事ハ、守護得分ニ可成者也、

廿二日、大下雨



一以書狀仰遣長敎方、夜ヲ日ニ繼テ、以淨法院可申東北院也、門跡心中ハ、院務事、御自專御計分ニ治定有之者、東林院當職中可成寺務坊也、此條第一大切也、其餘事ハ修理興行以下、悉皆東北院御計、此方ニハ一切不存知シテ、可爲御指南分也、更以得分ヲ目ニ懸事無之之由、巨細仰了、就中此院務競望志ハ五年十年事よてハ無之之故、任後得業隱居之節、仰合神部子細在之、隨而舊借以下返辨子細共以注文申合子細在之き、其後東北院知行之間不能是非者也、又後尊得業事、□□□□如仰無爲儀不可有之間、故筒井(順永)律師ニ仰合子細在之、然而廣壽院儀六借之間、于今斟酌了、於于今者彼入滅之間、得時節指出之由仰遣之了、

一興弘五師矢田ニ在之、可參落(洛)之由、仰遣佛地院間事可仰合用也、

廿五日、

一佛地院事、東北院返事不可叶云々、隨而又召定寛仰合之、

廿六日、

一以□□佛地院間事、仰合興胤得其意、六方向事者、可談合順宣(成身院)云々、後夜時分罷歸云々、

文明九年七月三十日

繼舜書狀
佛地院ハ孝俊建立以來大乘院ノ家

尋尊院務タラントシ俊圓ノ競望ヲ排ス

廿七日、

一佛地院間事、東北院返事趣、訓英以書狀申入之、大綱無爲也、學侶儀取合可申旨、訓英申者也、且御安堵珍重旨仰返事、

廿八日、

一佛地院事、仰合成身院、仍今日京都ニ申上之者也、力陣京上了、

佛地院家之事、孝俊僧正建立已來、當門跡方之院家、而河州山田庄幷越前其外當國所々院領、悉以爲當門跡被付置候、仍代々奉公異他之處、近來之儀、一向無正躰、背先規子細共之間、連々雖被失御本意候、當時御無力之刻事、新敷可被仰出候事、一段御儀候間、被相待時節候處ニ、今度不思儀次第出來候、是併冥慮候哉、此刻ハ御由緒之儀、可有御存知候處、任此間流類、內々自寺門、東北院ヱ奉行之事、被申入候哉、東北院者孝俊僧正御師弟由緒候間、一段被得當門跡御許可、連々執御沙汰候處、任俊、俊尊得業皆以無正躰成下候上者、重而可有御存知事、無其謂候、中半其御覺悟候哉、於于今無一途御領狀候、所詮此子細、內々東北院ヱ被仰試候、寺門披露之事、御坊中以下被仰談、近日可有御披露候、御奉書等事、無拳

順宣書狀
佛地院ハ大乘院門家ナレバ院領ハ門跡ヨリ付置ク

爾之儀候樣ニ、被申沙汰候者、可爲御悅喜候、此題目事、假一旦雖猶豫之儀候、始終不可被撿置候上者、御門跡御公事不可過之候、公儀無爲之樣、被申沙汰候者、可爲御奉公之專一之由、被仰出候也、恐々謹言、

七月廿八日　繼舜

柚留木大進法眼（重藝）御房

自成身院方書狀

——兼又佛地院御領山田庄之事、以前々成下、定而巨細御存知候哉、遊佐方事外腹立よて、彼領地事、可令知行之由被申候間、無勿躰之由、以寺門之儀、自此方內々申候、別爲六方當院主之事、永代罪科被申候、如此候上者、於庄家者、可返渡分、遊佐方よも內々覺悟候處、彼院家東北院御計分ニ候へハ、先院主之事者、師弟之間同篇之儀候上者、庄家者可返渡色無之候、所詮上野以下不被處嚴科者、庄家事可有違亂之由、被申間珍事候、然處彼院家之事大乘院御門家候、仍院領以下、悉以自御門跡被付置候、此間東北院御補作（佐）之間、每篇門跡儀御無沙汰候、所詮彼院家之事、如本式爲大乘院可有御計之由仰候、然者山田庄事

俊圓ハ毎篇義政ニ執入ルト説ク

者可爲無爲候、彼庄家事違亂候てハ神慮如何之間、庄家無爲樣ニ、大乘院御知行候へかしと存候、則自大乘院貴方へも被仰出候之由仰候間、以好便一筆申候、東北院之事付每篇、御屋形へ御偏執事候間、自他之儀愚ニハ候ましく候、如何樣まも御了簡候て、山田庄無爲樣ニ、大乘院御知行候者可目出候、率爾ま東北院方へ御奉書あんと成候へハ、彌可有偏執候間珍事東北院事、今度爲學侶雖被申候、一途無御領狀候、乍去內々儀、若可有御存知之儀候者、定而色々可有御注進候哉、爲御心得申候、自此方申入候事、不可有御口外候、隨而寺門之事、自大乘院近日御坊中被仰談可有御披露候、東北院へ御免內々被仰候哉、目出度期後信候也、恐々謹言、

七月廿八日　順宣判

柚留木殿　進之候

八月二日、

一與胤來、佛地院事巨細仰付之、去月廿八日柚留木返事、今日力陣參申、巨細ハ注進狀ニ有之、

佛地院修理以下ノ事ハ俊圓沙汰

長直ノ使ト順宣トノ談合

無爲ノ沙汰アレバ重疊ニ千疋與フルヲ約スル

五日、雨下、

一去二日柚留木返事趣ハ、佛地院事、自寺門以事書付布施彈上(正)大夫披露申處、可相尋廣壽院之由被仰下、違例之間無一途、然而入滅之間、其趣及御沙汰、修理以下事、東北院就由緒可有其沙汰之由、可成奉書旨、被仰出之一決畢、然而前佛地院御臺樣ニ申入若君有之事也、且如例旨申之間、奉書事被押之云々、如此成下之間無了簡旨彈正大夫申云々、但重而寺門事書を脇坊妙勝院等ニ被仰合候上者、可申沙汰之由云々、東北院ニ被仰付も、前佛地院一途之間事也云々、

一就此題目、遊佐方ニ被仰合事在之間、河州より蓮花院今日罷上、成身院と談合之、光秀遣之、明日柚留木方ニ遣書狀、万一彼奉書雖出之、率爾ニ不可下由、堅可申上云々、又龜千代召寄、此方ニ雖到來、先以成身院へ可沙汰之由、堅可申付之云々、此等子細、念比ニ成身院申者也、

六日、雨下、

一柚留木方ニ孫六代官上之、成身院書狀幷蓮花院書狀上之了、此事無爲ニ申沙汰在之ハ、千疋分柚留木ニ可給之由、念比ニ仰上之畢、其可申沙汰樣

八、佛地院事、俊尊得業無爲之歸寺之間、爲大乘院被申合、寺門幷東北院可有御沙汰之由、奉書大切也、不然者佛地院事、大乘院ニ被仰付之、山田庄年貢事、大乘院御使ニ可渡由、遊佐方ヘ御奉書歟、兩樣可申沙汰由仰了、是も前佛地院歸寺之間事也、無爲ニ有之者、可爲如本之由也、孫六糧物四十疋下行、先日力陣四十五疋下行、

八日、彼岸、

一吉田來、遣宗觀房方了、圓實得業、學賢五師、覺恩五師、貞覺房四人方、就佛地院事、得其意可進上之由仰之、各宗觀知音故也、

九日、

一吉田昨日宗觀返事申之、

十一日、朝大雨下電、

一柚留木返事、昨日到來畢、今日遣舜行方者也、

十八日、

一今日午貝定、學侶集會在之、披露狀遣之、

佛地院家之事、當門跡御門家而院領等、大略被付置候、御由緒異于他之惡キ振舜

俊圓ヲ院務トナサントス

實胤ノ書狀幕府俊圓ニ奉書ヲ出ス

處、此間之儀、万無正躰歟下候、門跡有限奉公所役等、一向被失其跡之式候間、一段可被仰出之上意候處、先院務振舜、依先代未聞之子細、爲寺門被停廢申畢、只今時節彼院家事、爲門跡有御存知度候、然處任此間流類學侶、而院務治定之間事、東北院可預申旨、被申入之由、聞召及候間、內々被仰出候處、爲寺門雖被申入候、無領狀候、何篇不可有御等閑之由被申入候、東北院事、惣別無御等閑候、衆侶(學力)被仰合事候間、可然樣可被仰談候、殊今度山田庄事、國方違亂之由、被聞召及之間、太本(ヤ、)院領之間、驚思召、內々被仰試候處、無御等閑申子細共候間、先以御祝著候、寺門之儀無相違候者、可爲御悅喜之由、可有御披露之由所也(候歟力)、恐々謹言、

八月十八日　繼舜

(實胤)

供目代御房

就佛地院家之事、御披露之趣、雖尤之上意候、先院務停廢之刻、院家之事無正躰候間、東北院ヒ申入候、則京都注進之處、御奉書數通被成下候間、異反之注進如何候、所詮於寺門之儀者、公儀無相違樣、東北院被仰談、可

然樣被經御沙汰、院家無爲之儀、曾以不可棄捐申候、就中京都御奉書到來候間、則付進上候由、可有御披露之由、學侶評定候也、恐々謹言、

八月十八日　供目代實胤

伊與上座(國淨)御房

幕府ノ奉書

興福寺佛地院家事、及寺訴之間被仰付東北院畢、可被存知之由被仰出候也、仍執達如件、

七月卅日　英基判　爲信判

奉書ヲ出シ、所々

大乘院雜掌

尋尊俊圓ヲ詰問ス

此外奉書一通學侶、一通六方、一通東北院、一通遊佐、一通山田名主百姓、

十八日、

一井山報恩院(有俊)法印召寄、遣淨法院(任圓)僧正方、佛地院事重々巨細之趣、東北院大(俊)僧正(四)ニ問答之、東北院ゟ門跡之間者、四ヶ度彼法印行通了、不便々々、予所望之子細不被承引之間中違了、無力次第也、此事不可捨置上者、雖失門跡之名字、可申所存事也、

一宗筭五師、内々興胤ニ相語、柳原息若君(俊清)、只今佛地院ニ有之、此躰事爲寺門被送京都者、可目出之由、東北院被申云々、興胤意見不可然事也、神慮且如何旨申畢云々、

柳原俊清佛地院ニアリ

一彼遊佐方ヘ奉書、自學侶可遣之由宗筭申、先度自學侶雖下使者、遊佐無承引上者大事也、自東北院被下之者、可然旨興胤以下申之、返渡宗筭了云々、

俊圓長直ヘ書狀ヲ送ル

十九日、

一昨日學侶時宜巨細仰遣遊佐方、山田庄奉書定而可被付之由、可得其意旨仰了、

學侶ヨリ奉書ヲ六方集會所ニ送ル

一守弘來、佛地院事ヒ、京都奉書自學侶集會砌、使節以宗筭五師、敎弘得業、送給六方集會所了、彼御奉書ニ及寺訴之間、被仰付于東北院云々、此事六方更ニ不覺悟事之間不一決、重而可返事申由、六方返事、使節之内宗筭變色云々、就其、此事如何旨尋申間、學侶儀惣集會ニハ、如何樣無存知候事歟、先日、訓英申入分ハ、宗筭事書清書由申入候き、則光守律師も不存知事歟、七月十六日歟、以守弘仰遣之時、東北院ハ一兩度まて、自學侶雖申入御辭退之ト説

俊圓學侶ヨリノ申入ヲ辭スト説

六方ハ佛地院家ヲ尋尊ニ付セントシ事書ヲ出ス

學侶六方集會

也、仍院主事未定旨分明ニ申入候き、以事書申入子細在之者、其時光守も其子細可申事也、然而さも無事あらハ、必定宗筭以下一兩輩所行、東北院へ語衆も致其沙汰歟覺者也、又守弘申其儀候、此題目ハ前院主罪科以下事、一向六方所行也、隨而其後宗筭及兩三度まて、對守弘申分ハ、あよとて此事自六方以事書京都へ不申入候哉之由申間、心へ申如何樣可申合由返事仕時、如此自學侶向致其沙汰之間、其後ハ宗筭不申是非候、言語道斷之次第也、此事ハ如何樣自六方可申所存之由申之神妙也、然者自六方以事書申入京都、彼院家事、任由緒可返付大乘院之由申入者、則時々可成奉書也、其計略憑入之由仰了、先日柚留木方ニ仰遣之處、只今自學侶申沙汰之間、御成敗成下了、重而門跡御理運之子細、以事書被申者、又可致披露之由、奉行申入之由、柚留木申了、然者六方事書可然旨仰了、昨日自是東北院ニ問答子細以下入魂了、則退出可申合順宣之由仰付也、昨日參申、無等閑儀、能々可申合之由仰了、

廿二日、

一就佛地院事、今日學侶六方集會在之、重而學侶ニ披露了、返事到來無殊儀、

尋尊古市胤榮ヲ賴ム

義就戰ニ勝タバ尋尊ノ冀望ヲ達セン

義就負クレバ俊圓ニ決スベシ

廿三日、雨下、

一山田庄、大市庄、高田庄、新木庄等押狀遣之了、

廿四日、

一、山田庄事、遊佐返事先以畏入云々、大市庄事、普賢堂心へ申云々、新木庄事、北切代官得其意云々、

廿五日、

一昨日吉田堯善遣古市西方、佛地院間事可沙汰子細、成下趣等巨細仰遣、得其意畏入、奉公事無餘儀者也、就其ハ近日御破御沙汰條、不可然事也、此間ニ畠山右衞門佐（義就）出陣事、至今日必定々々也、其儀成立候者、越智、古市各可得其力條勿論也、於其時者、云今出河殿御儀、云畠山方、如所存ニ可成之間佛地院家事何共如御意ニ可沙汰條勿論候、今十五ヶ日計ニ、是非ハ可見也、且可有御待之由意見申之、千万又右衞門佐方合戰ニ打負事在之者、當方面々ハ不可有安穩之間、其時者上意ハ上意分ニテ可有上者、東北院儀不可相替候、其時ハ無力躰ゐて可有御座、門跡御儀又每事以上意可有御沙汰事候間、不及是非者也、若又如此間よて、世上事自他無爲儀候ハヽ、畠

世間靜謐トナラバ胤榮ヲ賴ムベシ

山下向事も不可有、世間靜謐候者、就其又古市以下ニ可被仰合之、於古市も不可有緩怠儀條勿論云々、此申狀尤也、今日則召筑前守（長田家則）、又巨細仰付西方了、

廿五日、

成就院清賢書狀

一廿四日遊佐方仰遣奉書案

佛地院家之事、當門跡御門家而院領等、大略被付置之、仍每代院主替目補任料以下、其外門跡奉公所役等、此間之儀一向無沙汰候、二代共以東北院弟子之事之間、於于今者、爲門跡院務事、可定置之處、東北院ニ被仰出候處、御奉書成下候間、難義之由可被歎申候、併此奉書事、東北院計略候上者、已以前不義一向許容候哉、言語道斷之次第候、此趣寺門御披露之處、公儀無相違樣、令申沙汰、御知行不可有子細之由被申入候、仍早々爲門跡可被歎申入京都候、其間事、院領諸庄薗自國他國皆以被押置候上者、山田庄事、被押置候者、可爲御悅喜候、爲京都雖御尋候、此分可被申上候、其間事、一向被憑思食候由被仰下也、恐々謹言、

八月廿三日　清賢判

尋尊長直ヲシテ山田莊ヲ押領セシム

遊佐河內守（長直）殿

長直請狀

同御請狀遊佐河內守

長直山田莊ヲ押領ス

就佛地院同院領之儀、委細蒙仰候、仍山田庄事、先佛地院無故及御成敗候間、押申候由、寺門ニ令申候、雖然于今庄家之儀不成綺候時、且蓮花院具御存知候、自寺門被仰儀候者、可致注進候、於私不可有疎略候、此等之趣御披露所仰候、恐々謹言、

八月廿三日　長直判

成就院（清賢）貴報

長直書狀

長直俊清ヲ斥ケ莊務押領ノ次第ヲ說ク

自遊佐方、東北院ヘ返事如此申由申之、

就山田庄之儀、子細蒙仰候、同御奉書給候、仍彼庄之事、先佛地院守護領於太子寺無故被召捕西坊幷雜物之事、國人已下預置候物迄被押召候條、此儀達上聞、又寺門ニ令申候處、先佛地院罪科被申候由、爲寺門預返事之間、先以畏入候、但柳原殿御子息候哉、先佛地院之御弟子御座候、彼

仁落居可有御相續之樣其聞候、然時者御隱居同前候歟、一段罪科被申筋目相違候、さ樣之儀具示給致注進彼庄之事可申合之由、以遣花院寺門仁申入之處、于今無其返事候、此儀委細蒙仰令注進、御返事可申入候、山田之事、押申之由雖申入候、御年貢等万此方不成綺候、然上者万寺社聊非緩怠候、此趣以御取合預御披露候者所仰候、恐々謹言、

長直判

八月廿三日

長直山田莊名主百姓ヲシテ

廿六日、

一昨日訓英返事今日進之、温泉寺下向、無爲畏入云々、佛地院間事、光秀昨日巨細申之、以參上可得御意云々、則來、巨細由緒旨、念比ニ仰付之、學侶以下成下樣仰之、以後事ハ學侶方事得其意、興弘五師幸自矢田歸寺也、可申合云々、

廿七日、

一就佛地院家事、以古市幷西方巨細成下樣ヲ越智方ニ仰遣之、使者筑前守楂三荷、唐布三合同遣之者也、人夫事二人仰付古市了、

一去廿三日御奉書、自東北院山田名主百姓中ニ付之間、自庄家遊佐方ニ相尋之、遊佐返事國方無副使者、不可承引之由、加下知了云々、仍自門跡名主百姓中ニ、年貢事可孕持之由仰下了、

俊圓ノ命ヲ拒マシム

九月朔日、

一筑前守來、越智返事到來、東北院事ハ、御領預申有子細樣ニ候ヘ共、近日儀一向不申承候、所詮雖有如何樣子細、自古市承事之間、於越智者此事不可有等閑儀候、始終可申見事也云々、近比珍重事也、

越智家榮尋尊ヲ扶クベキヲ約ス

就佛地院家之御儀、以古市方被仰出候、於私不可存如在之儀候、仍御樽濟々拜領仕候、過分至忝存候、委細之段古市方可被申上候、以此旨可預御披露候、恐惶謹言、

家榮判

八月廿七日

竹内殿

一河内遊佐方より申給候、去月廿三日東北院へ申入、其返事又到來、自學侶如此申入云々、又以遣花院披露事、面々御尋候處、惣而不存知云々、

興福寺佛地院家事、寺訴之旨、去月晦日雖達上聞候、有御談合之子細、奉書之儀、今日調進之候、仍柳原殿御息事、上意旨具可被申達東北院殿候

英基書狀

也、恐々謹言、

八月十一日　英基判

柚留木殿

布施彈正書狀也云々、是ハ去月十八日所々到來時狀也、

就佛地院家之事、柳原御息先院主被取下申候間、始終如此御座候者、不可然候哉、先院主之御事者、六方被停廢申事候間、御弟子同篇御事候上者、先以御歸洛事被勸申、別之御相續之躰、被經御計略候者、可目出候哉之由、學侶集會評定旨、可令披露給候、恐々謹言、

八月廿八日　供目代實胤

河内公御房

後清ヲ斥ケ別人ノ任命ヲ請フ

五日、

一佛地院事、門跡理運事也、以目安可申入京都、爲御坊中、同以事書可申入條、可悅入之由仰之、宗藝五師一人及異儀、理非可有糺明之由申之、惣評定可差沙汰人云々、仍二十人差定之畢、重而披露、於理非者無是非事也、云本願云領知、悉以門跡由緒未(脫カ)他者也、差置沙汰人事、自元御披露隨一之間、神妙之由仰之了、申次清賢、奘舜、泰弘、使節興弘、懷秀、引付等在之、

佛地院沙汰人

佛地院家沙汰人

乘緣房僧都　延淨房律師　學延房擬講　長勝房得業

延明房、、　學賢房五師　香舜房　實淨房

長源房　宗觀房　長敎房　舜行房

榮賢房　陽禪房　專順房　舜善房

春定房　香專房　專堯房　淨觀房

六日、

一了憲法師來、佛地院事仰巨細了、

一自一乘院殿巨細承事在之、

十一日、

一夜前夢、佛地院本願僧正來而於障子上一獻等給之、其後予見參、事外目出之由申之、悅入ゼる風情也、則於障子上テ、何人とハ不覺、これの內者三人ニ料足を百疋ッヽ給之て、快然ニ見へき、雜人共參申見物之、南向を見廻候雜人濟々有之而見了、珍重事也、

尋尊ノ夢

一自古市西方、以筑前守申、佛地院事御知行之時、山田庄御使事、吉田ニ被仰付者、可畏入云々、如脇田仕候云々、返事一通之時、必西方ニ可仰合之由仰了、

十三日、夜雨下、

一定寛來見參、山田庄事、自地下東北院へ返事、自大乘院殿仰子細候間、依守護左右可申云々、九日以前ニ公事物有之故云々、去八日返事歟、

廿二日、地振、至土用今日、

一佛地院間事、訓英、興弘可取合旨、內々申之云々、於于今者、不可有御承引事也、中々不可被申旨、光秀申遣之由申之、

廿七日、

一自學侶とて、供目代此御書持來、返事これより可申入旨仰了、傳奏廣橋（兼綱）奉行之、藤堂書狀よて寺門へ付之云々、

佛地院々務事、依由緒如以前申付東北院僧正（俊圓）□□□自然之儀扶持候者、可爲本意之狀如件、

九月廿二日　判

義政內書ヲ下シ俊圓ノ院務タルベキヲ尋尊ニ通ズ

大乘院僧正御房

〔尋尊大僧正記〕八　十月二日、雨下、

一報恩院法印樧一双兩種送給之、佛地院事無爲條珍重由候、雜訒歟、不寄思之由仰返事了、何事を如此申哉、不審々々、

廿六日、

一堯善申、先日越智御返事趣條々、

一佛地院御知行事幷山田庄事、御理運子細ハ不及是非候、早々以吉日、佛地院ニ院主事可被入申候、山田庄事、是又不及是非候、但近日就和泉國守護職事、畠山與越智不和子細在之、定而可有一途也、已後涯分可奉公歟、肝要得其意云々、其餘院領事者、早々可有御知行也、

十一月十七日、雨下、

一神人申、今日自東北院神人一人仕丁一人、河州山田庄ニ被指下云々、

十二月七日、入土用、

一訓英來、就佛地院事申旨有之、不得其意事也、今度寺官上洛ニ絹付衣事可著用由所望云々、是新儀也、於先例者、布衣練大口白五帖ケサ也、絹付衣事

俊圓神人仕丁ヲ山田庄ニ下ス

ハ不可然、鈍色可然歟由相語了、於北京衆京都者良家さへ極官以前ハ布衣也、

八日、

一筑前守參申、山田事以下、巨細仰付之了、

十三日、

一二條大閤（持通）御返事到來、佛地院事得御意云々、畏入了、

〔尋尊大僧正記〕九　文明十年正月十九日、

一十七日、京上人夫、今日下向、○略中町殿書狀、十八日日付也、門跡事不可有等閑儀由傳奏申云々、條々事書以町殿、自禪閤被遣傳奏故歟、所詮近日ハ公私大酒以外云々、十六日進京都傳奏と禪閤と御兩所、合二卷同篇申狀也、

條々○略中

一佛地院之事、云本願由緒云院領、於當門跡異他子細候處、今度東北院前大僧正相語寺門之衆、號寺訴御奉書申給之間驚入、事之子細令披露寺門寂中、又申成御書候、先以畏入存候、則可申入御返事處、其時節云寺門云國中、物忿寂中之間、可申合門徒坊人等令逐電、于今不歸寺之間、御返事自然ニ延引仕候、更以非緩怠候、所詮佛地院之事已前及毎度東北院



僧正令取沙汰、大納言得業任俊、大納言擬得業俊尊、雖定院主職、其身非器之上、門跡方一向無奉公之子細、條々內、第一御祈禱以下法會始行仕之間、連々雖相催之、兩得業及廿餘年而爲一度不參懃行候、一向斷出世之道畢、是併東北院僧正越度候、則躰又不遂先途、無正躰罷成了、蒙神罰條勿論也、當門跡門徒無人數處、如此及數十年失門跡之披官歟之間、堅以可歎申入候、爲門跡令自專、一院再興之事可申付候、此條御許可善政之御成敗可畏入存事、

興福寺諸院家

東北院　東門院　東院　西南院　竹林院　修南院

慈恩院　光明院　喜多院　勝願院　北戒壇院

以上一乘院門徒、而出世之奉公致其沙汰者也、

松林院　佛地院

以上大乘院門徒、此內於佛地院者、此廿餘年斷出世奉公畢、御祈禱以下法會致不參畢、無人數出世猶以如此、一門跡之零落歎入外無他候、

三月廿二日、雨下、

一松殿來、昨日下向、色々物語、

一日野町殿事、傳予身上事於御臺、及御沙汰、時宜珍重也、東北院申事、每事首尾不合、尤緣故歟云々、

義政夫人日野氏尋尊ノ事ヲ聽ク

## 〔大乘院寺社雜事記〕六十五　文明十年四月廿六日、

一禪閤御書到來、先日佛地院間事申入了、東北院與光照院殿御相論事有之、東北院沙汰次第以外事之由、及御沙汰云々、山城國相樂庄事歟、

五月七日、

一去春、予公方幷御臺御方ニ樫進上申處、廣橋不可有披露由申之、不請取之、此條不得其意旨、以一卷則申遣了、其返事又無之、中間之沙汰不得其意、就佛地院事、東北院ヲ、最負之心中也、且又慈恩院得業所行也、進上御樫等返給事、且以外所行也、內々以春方院令申御臺之間、不可然由被仰て、廣橋ニ御尋、返事ニハ、上意いかゝ被存ん、不披露由申入云々、春方院ハ冷泉宰相(政爲)妹比丘尼也、御臺御年老也、

兼顯尋尊ノ義政等ニ贈レル樫ヲ執次ガズ

尋尊老女ニ頼リ日野氏ニ告グ

六月三日、

一宗訓上洛之間、巨細佛地院事申上蓮花院房、成身院房同仰遣之了、

一○中略佛地院事及相論寂中也、此坊主詞ハ、佛地院事、さのミ所々事可持事、不可然由可申用ニ、これハうりのひ手ニ申事也、

## 〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月十一日、丙午、晴、時正中日也、○中略早旦南都雜掌柚留木大進法眼重藝來、○中略、南都傳奏ノコトニカヽル、次以相語云、佛(地)持院住持職事東北院、

九月六日、庚午、晴、早旦南都返狀共調之、遣柚留木大進許、南都雜掌大進法眼入來、御內書事催促、

八日、壬申、晴、南都雜掌柚留木大進法眼入來、東北院申請御內書事催促之、無等閑由返答、

九日、癸酉、天晴、○中略、公武、幕府ニ參賀ノコト及ビ義政、鹿苑寺遊覽ノコトニカヽル、九月九日ノ條ニ見ユ、入夜又參御臺御方、東北院申御內書事、今朝談合伊勢守之處、可被進御書事、尤可然由返答候間、彼所存之趣爲申入也、於常御所直ニ伺申處、內々被申准后處、不可有子細由仰也、然者則可被仰出由、雖被思召、東北院事不事問可執申事、御斟酌之間、御尋伊勢守以下所存處、各可然由申上者、急可有申御沙汰、遣案文於伊勢守許、例式御內書可調進由可申遣由仰也、○中略小時歸宅、於殿中參會布施彈

重藝兼顯ニ內書ヲ催促ス

義政伊勢貞宗ヲシテ內書ヲ下サシム

正大夫、○略中次東北院申請御内書事、不可有子細由仰之旨相語之、珍重之由返答、

十一日、乙亥、晴、終日餘醉之外無他、南都雜掌入來、東北院書狀等持來、御内書等事條々談之、

十三日、丁丑、自晩頭雨降、入夜雷鳴、南都雜掌入來、東北院申、御内書事催促、對面條々有談旨、御内書事、則以使者催促伊勢守許、早々可申沙汰由返答、

十五日、己卯、晴、所作看經如毎月、南都雜掌入來、御内書事催促之間、則遣使者於伊勢守許、令催促之處、祗候殿中云々、

佛地院々務ノ内書

廿四日、戊子、晴、時々時雨、酒、地藏菩薩緣日也、就佛地院々務事、東北院僧申請御内書、自伊勢守許到來之間、則召寄南都雜掌、柚留木大進法眼渡與之、仍東北院返答以下書狀數通、同調遣之、

卅日、甲午、晴、自東北院被上人、先度御内書畏存由可披露由也、及晩參御臺御方申入者也、當季御祈御卷數同到來、則進上之、及晩參御臺御方、東北院申御内書御禮、御祈御卷數等申入之、入夜歸宅、

文明十年三月十六日、戊寅、晴、早旦參御臺御方、○略中東北院俊圓僧正申條々事等、於御湯殿上直披露、

五月廿九日、庚寅、晴、自御臺有御用子細、頃之可參由被仰下之間、午天又參候、先於御前拜領御盃、准后同御座、此席、東北院僧正申佛地院々務事等條々披露、又被仰下旨等有之、

是月、義政夫人日野氏、公卿將士ノ窮乏ニ乘シ、錢穀ヲ貸シ利息ヲ收ム、

〔大乘院寺社雜事記〕六十四　七月廿九日、

一○略中総而京都儀ハ毎事無其道、御運如今者歎入之由云々、公武上下晝夜大酒、明日出仕之一衣も酒手下行、奉公方者共ハ、當年中無爲儀無之者、各可逐電支度、杉原賢成（盛）ハ隨分物也、一衣無之之間、不能奉公出仕云々、御臺一天御計之間、料足共不知其數、御所持、陣ノ中大名小名、以利平借用之、只一天下之料足ハ、此御方ニ有之樣ニ見畢、近日又米倉事被仰付之、可有御商由、御支度、大儀之米共也云々、畠山左衞門佐（義統）先日千貫借用申、

公武上下晝夜大酒

杉原賢盛著衣ナク出仕セズ

米倉ヲ設ク

畠山義統千貫文ヲ借ル

足利成氏、自ヲ兵ヲ率并テ上野瀧ニ出デ、長尾景春ヲ援ク、依リテ上杉顯定、同定正、白井ニ退キ陣ス、

〔鎌倉大草子〕○略上（文明九年）同七月の初、古河の成氏公、數千騎を引卒して、景春ゥ後

詰として、結城兩那須、佐々木、横瀬御供にて、瀧と云所へ御出張の間、兩上杉
をゝ引はにして、上州の白井へ引退て陣を取、〇略下

〔鎌倉大日記〕　文明九丁酉、〇略中七月、爲景春合力、成氏御發向、

〔太田道灌狀〕　〇前肥

一〇略中古河樣御發向、自後以數千騎被襲來候之間、御陣爲難被拘、可被引退
趣御内談候處、或者乍御兩所河越江戸兩城へ可被入旨申仁モ候、或屋形
樣者上州御移、當方者河越可打歸旨申族も候、道灌者御一所ニ上州可有
御移旨申候、上田上野介一人同心仕候、〇略中

（朱書）文明十一
十一月廿八日　　道灌判

謹上　（朱書）山内家人式部丞
高瀨民部少輔殿

〔松陰私語〕　一〇略上其後無幾程上州御進發、瀧嶋名打廻而御張陣、供奉之
御勢八千餘騎、當方以前如申定、依上意不廻時日馳參陣、公方御陣下右之手
崎其間三里計ニ押寄而張陣、五百餘騎、步卒三千餘人、當手出陣之當日、源慶院
殿有御見物而、今度者各可晴成、其故者、年來上椙與同陣、引分而公方陣ヘ參
陣、定上椙方之面々モ自當方引分ダル衆モ、定可見物也、旁以可晴成處ニ、武具乘馬以

岩松家純ノ共ニ退ク野ヲ勸ム
太田道灌兩上杉氏ヲ去リ上杉氏ノ陣ニ加ハル

下之吉良各嗜以花麗也、遼當方之不見打立處ニ是程者不リキ思、驚耳目、老後之
滿足此迄也、今度雅樂助爲代官、（校讀成歟）始而公方陣ヘ參上、東國之諸家可爲同陣也、無
越度樣可被走廻被仰出、任其旨日夜無油斷走廻條、對諸家無越度、兵議之上
諸陣ニ令超過了、〇略下

〇治家等、武藏鞠兒郷山王ノ賽錢ヲ、淺草寺輪藏堂ニ寄セ、成氏出陣ノ
祈禱ヲナサシムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔佛日庵文書〕　〇模相

就屋形出陣、可有精誠御祈禱、仍武州稻毛庄鞠兒郷山王之參錢事、淺草寺輪
藏堂ヘ我等致申沙汰、永代御奇（寄）進候也、然者於以後傍輩中、時之代官以下、狼
藉或不可有邪儀、若無沙汰之時、我等於子々孫々堅加意見、可致其成敗、出又（カ）
者彼輪藏堂停止諸役、年始歲末御出陣之御祈禱簡要候、加樣申定候事、全不
有爲他、爲子孫繁昌也、□（南）無大悲觀世音、現世安穩後世善處、仍爲後日證狀如
件、

□（文）明九年丁酉五月十四日　　式部尉治家（花押）
隼人佐常秀（花押）

如意藏主禪師

○景春等、兵ヲ上野荒卷ニ出スコト、十月二日ノ條ニ、成氏、觀音寺原ニ陣シ、定正等ト戰フコト、十二月二十三日ノ條ニ見ユ、

八月　大丙申盡朔

祇候ノ人々

勸修寺教秀等幕府ニ參賀

一日、丙申、御祝、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　八月一日、御さゝ月いつものことし、ねんゝしのとうゐんとのよりくもゐ(こ)いる、

〔實隆公記〕四　八月一日、丙申、霽、入夜參內、○中略今夜御祝祇候人々、源大納言、按察、民部卿、四辻宰相中將、下官、言國朝臣等也、小時退出、參竹園、則歸宅、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月一日、丙申、朝程雨降、自午天晴、南呂告朔、殊中心多樂也、尤珍重々々、幸甚々々、早旦先參賀宰相中將殿、公武面々構見參之儀如每朔、勸修寺大納言、藤宰相、永繼卿、拾遺政資等參會、予日野兩人、御對面以後、於女中被下御盃、每月之儀也、殊添祝著氣味、直參賀小河御所、侍從同道、則准后御出座、各構見參之儀同前、次參御臺御方、拜領御盃、祝著多端也、次向春日局、北小路三位、日野侍從等許、各對面、自他吐祝詞、珍重々々、次參內、以局內々申入祝言、於局有來樂、頃之歸家、每事萬幸々々、日野侍從政資賀來、祇候禁裏殿中間也、公武面々多以賀來、葉室前大納言(教忠)、勘解由小路前中納言(嵩淸)、冷泉中將爲廣朝臣、菅少納言長直朝臣、前官務長興宿禰、大外記師富朝臣、藥院重長朝臣、院

廳種直朝臣以下武家輩數輩賀來、拾遺家撲(僕)松波三河入道、本庄左衞門大夫以下同賀來、各以使者謝之、每月之儀也、

前東福寺住持見進(惟精)寂ス、

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺住持位次　百六十八、惟精、諱見進、文明九八月一、日寂、永安院、

〔五山傳〕彗日山東福寺歷代住持籍位次

第百六十八世、惟精名見進、文明九年丁酉八月朔日滅、塔永安院、

〔彗日山宗派圖〕乾無德派下

東福　永安祖　無德至孝——普門　永安可廬祖然——圓覺　永安大素方中

特賜無德禪師

東福　永安　惟清見進——東福　一枝祖　香仲見橘

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺諸塔　永安院惟精和尚、名見進、

〔碧山日錄〕一長卯　正月八日(長祿三年)、壬辰、永安之惟精來、因出金以見講年頭之禮、乃報之以微貨矣、

二月二十九日、丙寅、淳仲來共問永安、立之(周輻)、明旦有熊野之詣也、季弘傳言於龍子也、

愚菴錄ヲ見ル

正易ヲ訪フ

正易トノ贈答

四月二日、甲寅、惟精、立之來問、相延揖茶、覽愚菴錄、

六月八日、戊巳(干)、永安惟精見問、予在鄰房而不接也、

七月二十五日、乙巳、淨居紹藏主喪其母、與惟精往而弔之、

十一月三十日、戊申、作帖投惟精、有復章、

〔碧山日錄〕二長辰　正月五日(長祿四年)、癸未、永安之惟精來問、以余之外出、留意於小簡、

十七日、乙未、○中略又問惟精於瑞淵劇談快笑、日夕而退、

二月一日、己酉、自木幡歸于靈雲、小徒曰、○中略又永安惟精有信、皆以不在答之云、

賦詩ノ會

十九日、丁卯、永安惟精以專僧告曰、二十二日侍客於其房、作賦詩之會、可來赴云、余辭以今年未出也、又以帖見盡其意、余復之以前言也、

詩題

二十二日、庚午、群哲賀侍客而開詩筵、以督花(觀力下同ジ)爲題也、余以事不應其招也、且自取其題作此云、漢使王嬙遠向邊、淚霑紅袖恨嬋娟、尋常出塞將軍事、月照胡琴馬不前、

二十三日、辛未、永安惟精見招、乃赴焉、月谷(正好)、月建(令諦)來會、以督花之詩爲話柄也、皆昨日見責余之不赴其會也、

三月三日、庚辰、終日微陰、設齋、招永安惟精及淳藏主、皆來會畢、共赴於東溪賞梅花ヲ賞ス梅也、

五日、壬午、○略中與永安惟精入洛浴藥湯、藥湯

〔碧山日錄〕三寛巳　正月十四日、丙辰、永安惟精來、對爐清話、

十月十八日、乙酉、永安之惟精欲使其子見瑛童焉、寓止余之房、余以小童之群弟子見瑛聚、不得行家訓爲辭也、

〔碧山日錄〕四寛午　正月二日、戊戌、永安之惟精來、出金爲禮、余報之以濃關剃美濃關ノ剃刀刀一柄、璽紙一束、共爲祝語、

二十六日、壬戌、永安之惟精、調香膳、以招淨居紹藏主及余、前庭梅花盛開、揭簾香膳ヲ調ヘ正易等ヲ招ク賞之、飯醬麵之外、海山之所產異味悉具之、紹公喜其所待之厚、

三月二十八日、癸亥、永安惟精來、只爲茶話、

六月三日、丁卯、宿雨不晴、將事出門、以泥滑止其行也、永安惟精將其子淳藏主及見德而來、開軒談笑、是日居童行棱嚴之首唱者、於其居大慈、招年少之輩開詩會、以雨後遠山爲題、出惟精其代八賦之詩、共作品評也、淳藏主見德

二十八日、壬辰、紹藏主以帖求永安惟精、寶勝之立明日赴其居、余以价報紹之意、皆諾之、

二十九日、癸巳、與永安寶勝昧早赴紹公之居、有齋、々畢設浴、遂過西洞坊明榮寺、々有寒泉、甚清烈、坐石洗足且嗽口、有老宿提一鉼出、見之香漿也、乃勸諸客相樂、又歸淨居、紹公設白麵珍羹之具、且行漿之間、召田樂之徒、奏其曲、又少納言宗賢來、賢乃常忠公之子也、賢有美容貌善歌舞、以衆望起舞、懽笑不知樂之極、抵暮而歸、田樂ヲ招ク　舟橋宗賢歌舞

七月十八日、辛亥、永安之惟精以丹瓜十簽見寄之、長幼胥聚賞之、

〔碧山日錄〕寛未　正月四日、甲午、午而雪、惟精有惠貺、乃以關刀杉帋爲報矣、

諸客來、以冗不悉紀之、

二月十二日、辛未、永安惟精來、對榻茶話、

〔碧山日錄〕寛酉　二月九日、丁亥、營齋、請華岳、天覺、月谷、斯立、惟精、季弘、朴仲等、皆來賞、道話移時、

十九日、丁酉、與永安惟精問九淵和尙於東山知足、出茶果爲談柄之資、又赴雲持而訪魯菴、遂以惟精之往而遊靈山、々趾有菴、號如意、其主乃惟精之弟安公也、其境頗有佳致、從容忘歸、不覺至昏里也、

諸僧ヲ招ク

二十四日、壬寅、永安庭前有梅數十株、紅白交加、是日設齋、而見招起龍(永泰)、天覺、月谷、斯立、玉浦(瑛珍)、胤芳相會、東山祥雲之西堂名信者來會、信爲人放縱跌宕、雖老宿鉅公之前、勿所敬畏、以恣言笑、且多儲錢貨珍器名畫等以傲人也、見者薄之、然而有意舉廢、東山之堂宇爲之起者多矣、

〔碧山日錄〕五　應仁戊子　正月二十九日、己丑、午而雨下、惟精有書、說別來事、

○見進、東福寺住持ノ公帖ヲ受クルコト、文正元年八月三日ノ條ニ、宸翰ヲ賜ハリ、見進ノ之ニ對ヘ奉ルコト、應仁二年十二月八日ノ條ニ見ユ、

九條政基ノ沙汰、濟尊奉行ス

三日、戊戌、前內大臣九條政忠ノ息某、義尙ノ猶子トナリ、東大寺東南院ニ入室ス、

〔尋尊大僧正記〕七　四月廿六日、

一九條前內府若君、(政忠)十二歟、爲新將軍(義尙)御猶子上洛、爲東南院入室也云々、當關白(九條政基)殿申御沙汰、南坊濟尊僧都致奉行歟、至宇治可參御迎云々、珍重事也、但此間播磨美作御領、號前東南院借下、南坊兄弟押領之、東大寺之鬱憤無是非、其外五師子如意、甲乙樌等、前內府御押留之間、色々雖御計略、寺門不申承引者也、若君一人稱門主令在京、彼領知可存知用之名代歟、出家受戒等儀不審々々、幷門跡破損、一向無跡形、旁以行末不役不運之若君也、當座ハ先前府(內脫カ)御悅喜也、

二條政嗣尋尊ヲシテ東南院ヲ援ケシム

義政夫人ノ沙汰ト傳フ

五月十四日、

一關白(二條政嗣)殿御書到來、東南院事公方御猶子分也、雖他寺事候、自然題目ハ可申合力云々、去四日御書也、自前內府御方給之、傳聞、公方御臺之取沙汰也、備前、播州兩國ニ東南院領在之、彼庄共可有御自專御支度故云々、隨而東大寺ヘ入室事ハ、中々不可得事也、

濟尊東大寺領押領手段

六月七日、夜雨下、

一東南院若君先度上洛、則無殊儀、古市ニ下向云々、折紙四十貫計在之、播磨以下御領內ニテ可有立用之由、南坊申云々、色々進物等ハ南坊押留之了、凡今度沙汰嚴重儀也、但一向無跡形、作法以外次第也云々、於東大寺門徒以下者、一切不存知事也云々、只南坊之所行、彼御領共爲知行也云々、可用門主之由、寺門未及領內云々、

七月二日、

一自九條前內府御使在之、東南院若君事、當月中可有入室之旨、自惣寺以使節申入之、但院家破損之間可御東室云々、彼室門跡相承之在所故也、當年十二歳也、

東南院破損セルヲ以テ東室ニ入ル

八月三日、

一東南院若君入室于東室、彼寺之寺務坊也、表入室之儀、歸古市給畢、祗候人以下令參向中御門邊、御輿之後ニ御共申云々、自九條前內府蒙仰之間、予帳(張)輿以下唐笠袋召進之、無爲珍重々々、行粧無拜儀云々、門跡破損之間、奉入東室云々、前門主權少僧都覺尋ハ西國邊ニ于今存命云々、其弟子權少僧都覺尋ハ近江邊ニ御座云々、又細々古市ニ入御歟、前內府御兄弟也、只今若君之伯父也、

前門主珍覺及ビ弟子覺尋

○東大寺僧徒、別當覺尋ヲ黜ケンコトヲ幕府ニ訴ヘ、覺尋京都ニ召致セラルヽコト、六年閏五月四日ノ條ニ見ユ、

四日、己亥、宗愈泰叟ヲ大德寺住持ト爲ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月五日、庚子、雨降、勘解由小路前中納言高清卿來臨、勸夕飯、小時被歸、大德寺住持入院事、一昨日自妙心寺雪江(宗深)和尚任例可申沙汰由被申間、今日以書狀、內々付民部卿奏聞之處、任例可成勅裁由勅許也、衆評之請狀幷前住連署等、如例到來之間備叡覽了、新命泰叟座元云々、綸旨案文注裏、

宗深幹旋ス

（裏書）大德寺住院公文勅裁如此、來廿七日入院云々、龍安寺長老雪江執申者也、今日大赤之間、如例昨日分書上所也、

宣旨

大德寺住持職事所有勅請也、彌令專佛法之紹隆、奉祈寶算之長久者、天氣如此、仍執達如件、

八月四日　左中辨兼顯

泰叟上人禪室

入院勅使參向

〔實隆公記〕四　八月廿七日、壬戌晴、小浴、黃昏參安禪寺殿、向入江殿、今日大德寺入院勅使左少辨元長參向、

〔歷代殘闕日記〕七十八重胤記　八月廿七日、晴、

一大德寺入院之勅使ニ、甘露寺殿辨御出、

〔紫巖譜略〕五十、泰叟諱宗愈、嗣春浦、○中略、宗愈示寂ノコトニカヽル、文明十一年九月十日ノ條ニ收ム、大德方丈上棟、文明十戊戌二月廿一日住持泰叟愈和尚之札有之、

六日、辛丑、若狹守護武田國信、禁裏御料所小濱ノ年貢ヲ猶豫センコトヲ請フ、聽サズ、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月六日、辛丑、晴、武田大膳大夫（國信）入道有使者、若州小濱御月宮事、國之儀有名無實之間、每々以他足進納之由、國之代官令申候、依如然之儀聊令遲々候、雖然堅申付、兩三日中可進納候、其間供御無爲之樣可被仰付由也、則可申入由返答、以狀達長橋局處、供御所尙不承引由、重而勾當狀到來之間、又申遣武田許候處、堅申付、自是可申返事由、令返答者也、十月六日、庚子、晴、夜前可祗候由被仰下間、午天參內、○中略將亦若州小濱御年貢、去月分未進之間、供御及違亂間、勸修寺予兩人、遣使者可催促由被仰下間、相副靑侍於勸修寺使申遣者也、他行之由申云々、

豐後守島津季久卒ス、

〔薩藩舊記〕前集二十八　豐州家系圖　元祖季久　修理亮、豐後守、越後守、應永廿年癸巳誕生、母上原某女也、九代之太守陸奧守久豐主三男也、居住于帖佐瓜生野也、文明九年丁酉八月六日卒、年六十五、法號桂道題橋、



〔嶋津正統系圖〕一　久豐　稱南殿、次郎三郎、修理亮、陸奧守、○事蹟略ス、

「季久　十二代之孫、島津藤九郎、

修理亮、豐後守、越後守、豐州家之元祖也、母上原氏女、

文明九年丁酉八月六日卒、年六十五、法號桂道題橋、

一季久之二男、號越後守忠康、云平山九代之孫平山次郎右衞門、

一此庶流踊有之、

一此庶流平山助次郎、

一同庶流踊國分有之、

一同庶流平山七郎右衞門、

一六代豐前守久賀二男帶刀、久元二代之孫島津帶刀、

○季久、國久ト共ニ、島津忠昌ニ背キ、大隅宮內、敷根淸水等ヲ攻メ、又援ヲ相良爲續ニ求ムルコト、八年四月八日ノ條ニ、忠昌ト爭ヒ、終ニ降ルコト、本年正月二十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕シノ部　島津季久

○相良文書一
八月二十二日書狀



建昌城

〔地理纂考〕十五　大隅國姶羅郡帖佐郷餅田村　建昌城　平山城の未申の方より當る、一名瓜生野城、亦胡麻ヶ城とも云ふ、周廻二十町許、北ハ崖壁よて、高さ六十間許、東南ハ皆水田ゐして、西ハ山より接し、堀切ゐて、又水泉山此半腹より出つ、島津豐後季久居城ゐり、享德年中、島津忠國平山氏を平け、其領地を季久より與ふ、季久當城を築き、嫡子修理忠廉と是より住る、（季久文明九年八月卒ル、）

嫡子忠廉嗣グ

七日、壬寅、幕府、攝津守護代藥師寺元長ニ命ジテ、山城龍安寺雲鶴軒ノ舊領攝津牟禮莊ノ地ヲ妙心寺ニ交付セシム、

〔妙心寺文書〕五　○山城

攝津國嶋上下郡牟禮庄內散在田地事、雖爲龍安寺雲鶴軒領、彼寮退轉之上者、爲龍安寺御寄附妙心寺云々、然者早任去七日御奉書（○奉書今所傳ヲ詳ニセズ、）之旨、可被沙汰付寺家庄主者也、仍狀如件、

文明九
八月廿五日　四宮信濃守殿

元長（藥師寺）在判

元長龍安寺ニ遵行ノコトヲ報ズ

御書之旨委細令拜見候、御懇蒙仰候、忝存候、仍而就雲鶴軒領於妙心寺江御寄附之儀、被差下御奉書候、則遵行仕、御使節御僧仁渡付申候、千秋萬歲御目出候、將亦御扇拜領誠以畏入候、委細者此御僧可有御申候由、可預御披露候、恐惶敬白、

八月廿九日　元長（花押）

進上　龍安寺衣鉢侍者禪師御寮

八日、癸卯、義政、勝智院ニ詣リ、生母日野重子ノ冥福ヲ祈ル、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月八日、癸卯晴、申斜室町殿渡御勝智院、（日野重子）々々々々殿依御年忌也、則還御、（○重子死歿ノコト、寛正四年八月八日ノ條ニ見ユ、）

安東某、幕府ノ攝津西小屋闕所分ヲ、興福寺ニ渡付スルヲ肯ゼズ、是日、幕府、廣橋兼顯ニ寺訴ノ事由ヲ諮フ、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月八日癸卯、晴、○略中松田主計允、〻入來、攝津西小屋關所分事、去年被成奉書於南都間、敵方安東〻、難申間、相尋飯尾加賀守爲信、申御沙汰間可尋申由令返答之間、伊勢守參申可尋申由、申由申之間、返答云、誠去年依寺社大訴、被成奉書候、寺門之申樣、可見事書哉、其事書加賀守所持之間、尋取可令一見哉由返答了、

九日、甲辰、最長壽寺、賀茂社人重則ノ寺領ヲ違亂スルヲ訴フ、是日、之ヲ停メテ安堵セシム、

〔親長卿記〕三十二　重則申寺領違亂事、伺申入之處、支趣（途）之趣分明、殊舊院御代被盡淵底之上者、不及是非之御沙汰候由、被仰下候也謹言、

八月九日　最長壽寺方丈

〔親長卿記〕八　八月十日、晴、最長壽寺申、重則境內下地寺領違亂事、非御沙汰之限、寺家理運由有仰、

十二日、丁未、伊勢貞宗ノ子貞陸元服ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月十三日、戊申、晴、○略中勸修寺令同道、賀伊勢守宿所、息七郎（貞陸）昨日元服故也、持太刀以下隨身之者也、○略中伊勢七郎（伊勢守息）先剋罷向問賀來、持太刀一腰隨身之、昨日元服之禮也、則令對面謝之、

十三日、戊申、幕府、鎭守八幡社ヲ改修ス、

〔實隆公記〕四　八月十三日、戊申、天顏快晴、今夜室町殿鎭守社造替遷幸、（吉田）兼俱卿奉仕之、

〔參考〕

〔山州名跡志〕二十洛陽寺院　御所八幡　在三條坊門万里小路西南方、地ヲ云八幡町、門北面、宮西向、所祭八幡、此所ハ古足利尊氏公ノ殿舍ノ地ナリ、其封境ノ內ニ、康永年中ニ勸請セリ、仍テ世人稱御所八幡、又公ヲ號等持院、故等持院八幡トモ號ス、古地封四町四方アリ、今境界纔ナリ、

〔山城名勝志〕二洛陽部一　五所八幡（坐京極鞍馬口北）　一說、此社室町殿鎭守也、時人號御所八幡、室町殿荒廢後遷此地、

日野苗子、小河第ニ徙リ、北小路第ヲ獻ズ、是日、勸修寺敎秀、甘露寺親長、廣橋兼顯等ヲシテ、之ヲ檢知セシメラル、

苗子新第ニ徙ル

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　七月五日、北こうちとのあなたの御所へゝふより御ゐいりと申、御いとまこゝはゝ御ゐいり、御さゝ月ゐいる、御名こりをしきゐと色々ゝ御申ゐり、御宮けゝとて、をり五ゝう、御さる三ゝゐいらをらるゝ、かさしけゐゝりゐいらるゝ、御もちあるやうゝとゐ、御あふきをもゐいらゐゝ、

女房休所

〔實隆公記〕四　七月廿六日、辛卯、晴、入夜參北小路禪尼許、去五日移徙他所新造、内藏頭中將等令同道了、

土御門有宣ヲシテ造作方位ヲ勘進セシム

八月九日、甲辰、晴、今日北小路雜舍等少々令渡進之、

〔親長卿記〕八　八月十二日、晴、參内、依召也、○中略次仰云、今度此間北小路三位居住之所々被開進之間、可被成末幷臺所局等、勸修寺大納言、予、兼顯朝臣等能々見計可申云々、勸修寺大納言有召、申□□□仍退出了、十三日、晴、晝間自兼顯朝臣許有使者、兩人參仕、予可參云々、卽參内、所々大概見定、但予參仕已前大略申定云々、北面有棚、令撤却可改障子云々、有宣三位同祗候、不可苦之由申之、予申云、爲御遊(脱アラン)不可然歟、由命之、誠不可然之由各諾之、暫退出、

修理職ニ命ズ

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月十三日、戊申、晴、有召、午天參内、近日皇居一圓被進之間、御臺所以下女房休所等御室禮事、勸修寺大納言、按察使、予等相共可計申沙汰由、被仰下之間、各檢知者也、土御門三位有宣卿召寄、御作事方角幷吉日等尋問者也、日比北小路三位尼同宿申處、自去々月小河殿御近所ニ移住之間、此御所一圓被開進者也、但御文庫尙被殘置御物以下番衆等者也、御造作吉日十九日由注申之、明日可祗候、可被仰付修理職仰也、勸修寺同前、十四日、己酉、朝程小雨洒、自午天晴、○中略午天參内、御室禮御作事等事可仰付修理職故也、○中略及晚玉村近江守參上、御造作之條々、勸大相共問答、申合御大工、重而可申入由令言上者也、御大工兩人同參上、御室禮以下事同申含了、及秉燭退出、

神事ニハ重輕服者ヲ憚ル

十五日、庚戌、權ニ石清水放生會ヲ停メ、尋デ、之ヲ行フ、

〔親長卿記〕八　八月十五日、陰、仰云、頭中將奉、放生會當日可爲御神事歟、予申云、御神事勿論之由申之、又重仰云、御神事之上者、可被憚重輕服之人歟、可被憚之由申了、但八幡御幸行幸、輕服之輩供奉例候へ共、御神事之上者、祭禮日可被憚之由申了、

延引

廿日、午後參內、被召御前、暫有御雜談、〇中略 次仰云、放生會延引云々、然者治定之日又如當日可爲御神事歟、已前御神事之上者、今度不可有御沙汰歟、予申云、有延引者、雖爲何个度、可被行日可爲御神事之由申入了、卽退出、

追行

〔石清水八幡宮記錄〕二 當宮緣事抄 石清水八幡宮放生會延引例文 〇山城 文明九年九月一日丑下刻、御行、於猪鼻後夜鳴、同八日一會行之、十日亥刻、還御、但依今福庄事、御殿司訴訟之間、御座舞殿、同十年四月廿七日、自舞殿御移于正殿、

〔續史愚抄〕四十後土御門院中之上 八月十五日、庚戌、放生會延引、祕抄、

還幸

九月一日、乙丑、有石清水放生會、宮寺沙汰也、而還幸延引、長曆、祕抄、親長卿記追、

法樂和歌ノ題ヲ遊バサル

十日、甲戌、今日有放生會還幸儀、祕抄、

題ヲ頒ツ

勅題ヲ義政夫妻及ビ廷臣等ニ賜ヒ、石清水八幡宮法樂和歌ヲ詠進セシメラル、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一 七月卅日、いと〳〵水の御ゐうらくの御さゝあるゝへ貴なり、めあさ〳〵、そハす、十五夜よりさねらるゝ、こりあそハ〳〵て、ふ〳〵ミとの、くろ御所〳〵、も八月一日、〻ふも御さゝのゝ、んをゐ、女中、おとこたちゆつりをさゝゐゝ、

義政夫人ニ賜フ

寄書ヲ義政ニ示サル

二日、むろまち殿御たゝの御りさへ、御さゝけさるいらきらるゝ、御さゝのの御方御さしあひのよし申されゝ、返しるいらせらるゝ、よつきて、ミん部卿よくゐしくさつゐられゝ、りさをてるいらるゝ、

十四日、あをの御さんさくともをう〳〵よりるいる、

十五日、〻ふの御ゐうらくりさねゐれゝ、御をゝのゝち、りさゐゝ御ゆゐなりて、御ゐうなとの御ゐ御さたあり、めてさし、

十六日 〇中略、義政夫人日野氏參內ノ日次ヲ問フコトニカヽル、二十八日ノ條ニ收ム、 昨日ゐよせりゐ、このつゐてゐむろまちとのへミをるいらるゝ、

短册ヲ重ヌ

〔實隆公記〕四 八月一日、丙申、霽、行水、入夜參內、來十四日石清水社御法樂御短册被下之、

百五十首續歌寄書

十二日、丁未、晴、今日詠草備叡覽了、及晩參伏見殿則退出、

十四日、己酉、陰、〇中略 今日石清水御法樂所々御短册參集、入夜於御前被重之、

親王名字ノ書キ方ヲ勸修寺教秀ニ問

十五日、庚戌、晴、今日猶候番、〇中略 石清水(水脫カ)御法樂百五十首續歌寄書、可仰政顯之由被仰下之間、則申含之了、抑親王御名字此間爲片字不審之間、如何之由言上之處、可相尋勸修寺大納言(教秀)之由勅定之間、令相談之處、儲君之外尤有不審、

ハシメラル

故式部卿宮（貞常親王）亦各別之御義也、宜載兩字哉、治定之儀猶可被申談禪閤等哉云々、其趣則奏聞處、今日可載兩字之由也、則申含政顯了、

〔親長卿記〕八　八月十二日、晴、○中略　參內、依召也、十五日御製、○中略　予書寫事等、有仰旨、

御詠三首ヲ下サル

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月一日、丙申、朝程雨降、自午天晴、○中略　自禁裏石清水御法樂御短尺三首被下之、來十四日可被重、可詠進由、以典侍殿奉書被仰下、

勅點ヲ賡橋兼顯ノ詠草ニ加ヘラル

三日、戊戌、晴、○中略　將亦禁裏御法樂和歌思案之外、無他者也、

四日、己亥、陰、自未刻許降雨、○中略　終日御法樂、愚詠吟味之外無他、

十一日、丙午、時正中日也、時齋看經、禁裏御法樂吟詠、

十三日、戊申、晴、○中略　入夜明日禁裏御法樂、愚詠草一紙備叡覽者也、

十四日、己酉、朝程小雨洒、自午天晴、早旦禁裏御法樂三首清書之、昨夕詠草備叡覽之處、今旦被加勅點被下之、愚詠注裏、○中略　禁裏明日御會、石清水社御法樂也、愚詠如此苔上月、月之百五十首云々、

うこぢあぎいとゝの苔にをく露をいく代ゝやとと月もすむらん

二條持通

道永入道親王

義政夫人日野富子

轉法輪三條實量

葦間月

あしはもる月こあふとゝはあれをもゝらてや海人乃こゝるゝゝほらむ

寄月尋戀

月にさゝあくかれぬとやいひあしてゝのふ中のゝとゝはさつ絲ん（る脫カ）

〔文明九年石清水社法樂百首〕文明九年八月十五日

入後慕月　持通（二條）

猶そうき老のね覺をなくさめし月より後のなかしてふよは

兼待十五夜　道永（仁和寺）

月のみやそらにしるらん待佗て秋の最中にかゝる心を

十五夜當日　一位局（日野富子）

けふといへは暮ぬさきより空はれて半の月はかねてしるしも

十五夜夕　禪空（轉法輪三條實量）

おとこ山峯にゆふゝる雲きえて空に名高き月そ待るゝ

十五夜待月　舊院上臈

名に高き夜半そと人に待れてや山の端を今月の休らふ

二條政嗣　冷泉爲富　轉法輪三條公敦　勸修寺教秀　庭田長賢

文明九年八月十五日

十五夜翫月　政嗣（二條）

あふきみん月の桂の男山神まつりする秋のこよひを

十五夜惜月　上臈

更行もわきてこよひはおしき哉名高き月の秋の半に

十五夜曉　爲富（冷泉）

石清水はなすいけるも影すみて月の有明もやとり添つゝ

十五夜易過　公敦（轉法輪三條）

水にせくしからみやなき月のすむ最中の秋の移りやすさよ

十五夜難忘　權大納言典侍

しはしなを心にのみそさやかなる秋のもなかの月は入ても

十五夜後朝　教秀（勸修寺）

池水にうつる朝日や過しよの最中の秋の月の面影

三日月　大納言典侍（廣橋勝光姉）

今しはし面影のこれ三日月のほのかにみゆる夕暮の空

夕月夜　祐紹（庭田長賢）



甘露寺親長　花山院政長　花山院兼子　庭田雅行　庭田朝子　滋野井教國　勘解由小路高清

夕附日入ぬる跡の山のはに影ほのかなる月をみるかな

上弦月　親長（甘露寺）

出つるとみえしも西の空なれはいる方はやき弓張の月

望月　政長（花山院）

わきてなを今夜名高くみえてけり秋も半の望月のかけ

不知夜月　東御方（花山院兼子）

山のはを出（つか）てるもかゝる白雲に心つくしのいさよひの月

立待月　雅行（庭田）

浮雲のなをきえのこる山の端にほのめく影や立待の月

居待月　新典侍（庭田朝子）

更ぬとも閨へは入らし名にしおふ居待の月のこよひなりせは

臥待月　教國（滋野井）

更過る程もあらしとしきたへの枕とらてやふしまちの月

廿日月　高清（勘解由小路）

臥待のそらは昨日に呉竹のはつかにやとる露の月影

下弦月　廣光（町）

ものゝふの名にもめてゝや小夜深み心ひくらんゆみはりの月

有曙月　勾當內侍

待出てゝなかむれは又程もなく影しらみ行有明の月

嶺上月　資益（白川）

いさきよき光をそへて男山峯もさたかにすめる月かけ

岡上月　宗綱（松木）

しゐてなほいかなる露か岡のへの草葉の月に秋風そふく

原上月　忠富（白川）

一しほの色こそまされはゝそ原露にうつろふ月の光に

橋上月　顯長（西坊城）

駒とめて今夜も爰に月はみん宇治の橋姫我なとかめそ

江上月　公兼（正親町）

芦根はふ玉江の水もくもりなくすむ影きよき秋の夜の月

池上月　景光（柳原）

くもりなき空さへすめる池水にわきてこよひの月そやとれる

湖上月　季經（四辻）

さやかなる光はかりそみちにける鹽ならぬ海の秋の夜の月

河上月　爲廣（冷泉）

影みれは水の緑もそめ河やそら行く月の色になりぬる

庭上月　兼顯（廣橋）

名にふりしをはの花の梨壷にうつろはぬ色や秋のよの月

苔上月　言國（山科）

うこきなき岩ほの苔に置露をいく代かやく（きゝ）月もすむらん

霧中月　實隆（三條西）

立まよふ霧のまかきの山の端をほのかに月の影そのほれる

山中月　季熙（小倉）

男山月のかつらもおりをえて秋の光そそらにさかゆく

水中月

惠ふかくいけるをはなつ河水にきよくもすめるよはの月哉

文明九年八月十五日

正親町三條實興　洛中月
雲ぱるゝこゝのかさねの秋の空月に嵐のこゑもきこえす
（正親町三條）實興

足利義政　禁中月
曇なき影をあけぬとすむ月の雪やはらはんともの宮つこ
（綾小路）俊量

綾小路俊量　閑中月
わきてなを月みる夜半の淋しさはこるはかり成柴の戸の内
（甘露寺）元長

甘露寺元長　閨中月
もる月の影をふすまにかさねても夜寒はおなしねやの内哉
（伏見宮）邦高

伏見宮邦高親王　籬中月
置まよふ草葉の露をよすかにて籬をさらすやとる月かけ
（勸修寺）政顯

勸修寺政顯　牕中月
ねられめや長き夜すから呉竹の葉分もりくる窓の月かけ
安禪寺宮

安禪寺宮　舟中月
難波潟あしまを分て行舟も月はさはらぬかけを見る哉
（薄）以量

薄以量　月下荻
秋風のはらはぬ程は荻のはの露にやとかる月の影哉
（五辻）源富仲

五辻富仲　月下萩
花のゑか月もえならぬ萩原や下葉の露に影をやとして　○以下十四首略ス、
宮御方

皇子　磯部月
荒磯によせくる波のかへらすは其まゝ月のかけや宿らん　○以下十一首略ス、
曇華院宮

連歌ヲ行ハル　寄月契戀
いく秋もかはらぬ月をうき中に契やをゝん行末の空　○以下七首略ス、
眞乘寺宮

寄月怨戀
思ひたえ今は月にやかこたまゝさても影見ぬ人のつらさを　○以下二十一首略ス、此書百首トアレド、兼顯卿記、實隆公記ニ據ルニ、百五十首ト見ユ、

○是日、連歌ヲ行ハルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　八月十五日、○中略こよひの御さゝ月いつものことし、おいくゝのゑゝおとこさちめして御れん歌あり、御さゝほすも又ゆれる、

〔實隆公記〕四　八月十五日、庚戌晴、○中略今夜有御連歌五十韻、式部卿宮、民

部卿、四辻宰相中將言國朝臣、元長等祗候、及曉天、

**參議右大辨柳原量光ヲ左大辨ニ任ジ、造東大寺長官ニ、左中辨廣橋兼顯ヲ右大辨ニ任ジ、尋デ、南都傳奏ニ補ス、**

右中辨勸修寺政顯左中辨ト

〔公卿補任〕四十三　參議正四位上藤量光卅、右大辨、八月十五日轉左大辨、同日補造東大寺長官、○辨官補任同ジ、

〔辨官補任〕下

右大辨正四位上同兼顯（藤）（廣橋）　八十五轉、十二卅兼參議、同（八月）廿八日爲南都傳奏、

左中辨正四位上同兼顯　頭、左宮城使、壬正十八被仰敷奏、同爲武家傳奏、八十五轉右大、二十四服解、父卿、復任、

正五位上同政顯　八十五轉、藏、

右中辨正五位上同政顯（勸修寺）　藏、轉左、

〔實隆公記〕四　八月十五日、庚戌、晴、今日猶候番、今日辨官轉任之事勅許、可令宣下之由有之、注別紙、○別紙所見ナシ、

十七日、壬子、雨降、今日辨官轉任造寺官等口宣、付冷泉大納言了、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月三日、戊戌、晴、○略中　昨夕自南都禪閤御返事到來、

兼顯轉任昇進

土御門有宣轉任日次注進

量光書狀

予昇進事無盡期間、雖不遂獻策、可昇進歟由申合儀也、以廣光卿申間彼方ヘ御返事也、雖然爲此儀間、令披見者也、

四日、己亥、陰、自未刻許降雨、○略中　自禪閤御報共送遣町中納言廣光卿許、予昇進事等也、予大辨轉任事、八座昇進以前太略佳例之間、當月中可申請間、吉日事相尋有宣卿處、來十五日、十九日、廿一日、三ヶ日分注進者也、八月轉任、又佳例也、

六日、辛丑、晴、○略中　町中納言來臨、終日雜談、又予大辨轉任幷八座昇進等事談合、師富朝臣同入來、各勸夕飯、秉燭程各被歸、

十二日、丁未、時、當番也、仍八時分參內、入夜自禁省參宰相中將殿、於馬場有御酒、御盃等拜領也、頃之歸參禁裏、遣書狀於右大辨許、度々來臨、不能面會條、無念之由謝之、口宣案一通所望之間、同書遣之、予敷奏以後、未奏事始、八座昇進以前可遂其節之由、有入魂之旨、彼返狀續左、辨官傳奏事、寔於當家一段爲規模者歟、入魂之旨、尤可然事也、先之自町黃門有書狀、昨日入來之處、不能面謁、無念之由也、以愚報懇謝也、同僧官一通所望之、同書進之、

芳翰委細奉了、先度參申候處、不能面展之條無念之餘、夜前又參申候處、折

節御出仕時分候間、空罷歸候了、必參商候歟、背本意存候、兼亦彼僧官事、國城寺住侶異于他申通輩候間、舉達候處、無相違被懸賢慮候、殊以恐悅候、定可畏存候、返々雖爲何時候、口宣案可申請之處、早速儀不知所謝候、御官暇時分猶可參申候、將又御昇進事、內々御治定候歟、珍重存候、以恩光此邊又自然拜任子細も候者、殊可爲高運事候、夜前も內々可奉尋心中候き、御昇進已前定御奏事始儀、可及御沙汰候哉、敷奏事、被申請候上者、雖同事候、當家殊規模子細、於御一流初被再興、且一門光華勿論候歟、就其嚴重御沙汰可目出候、是等之子細自元雖御存內事候、內々令申候、辨官奏事始作法、卿位以同前候歟、曩祖記置分亂來文書等不觸手候間、一事よても不覺悟候、折節口惜存候、さ樣之子細も內々御思案候哉、條々及巨細樣候歟、樣躰恐入候、心事期面謁候、恐々謹言、

八月十二日　　量光

十三日、戊申、晴、〇中略予昇進事、禪閤御意見之通、以民部卿奏聞之處、勅許不可有子細由勅答也、自愛々々、晡時分退出、

十五日、庚戌、天顏殊晴、月色清明也、誠無雙良辰、尤風流珍重々々、朝程民部卿忠富卿奉書到來、予大辨轉任之事、今日被宣下、量光卿轉任幷造東大寺長官等事、同被宣下、此旨可傳仰由也、彼狀續左、〇書狀所見ナシ、轉任之事勅許、忝畏申入之由、且可披露、以祇候尙可申入由返報、則以書狀相觸仰之旨於左大丞許、返狀同續之、〇返狀所見ナシ、次第昇進可任所存條勿論也、幸甚々々、午天參內轉任之事畏申入者也、於典侍殿局有賀酒、頃之直參宰相中將殿、申入轉任之御禮、少時參小河殿、同以右衞門督局、申入轉任之儀祝著之由、〇中略、南都傳奏ノコトニカヽル、次ノ條ニ收ム、及晚大外記師富朝臣入來、秉燭程山科內藏頭言國朝臣同入來、各入夜歸、入夜町中納言廣光卿、新藤宰相緣光卿等賀來、予大辨轉任事被賀之、數剋雜談、及晚更各被歸宅、

十月十日、甲辰、晴、今日吉日間、大辨轉任奏慶幷奏事始日次、相尋有宣卿處、兩日注進續左、

轉任宣下

兼顯義尙參內

兼顯義尙義政ニ謝ス

有宣兼顯ノ奏慶奏事始日次ヲ注進ス

吉日事

今月廿一日乙卯

廿七日辛酉

十月十日從三位有宣

奏慶

十一月十五日、己卯、晴、入夜町黄門入來、明日奏事始之儀等談、頃之被歸宅、

奏事始

廿六日、庚寅、晴、今日大辨轉任之拜賀日也、戌剋許出門、步儀也、勸解由黄門（爲裝束來）町黄門、民部卿、大外記等入來、事更三獻勸盃之後出門、自左衞門陣代入、至無名門代、小時申次卜部兼致出逢、予奏事之由、頃之歸出、仰聞召之由、但小揖如恒、予答揖、次舞踏、次入無名門代昇殿上、（此時賜笏於若侍）次藏人來告出御之由、則參進御前、奏事始故也、至當間簀子伺天氣、御目以後、則參進御前御座、當時疊敷爪也、仍構圓座儀無之、引寄裾後、自懷中取出目六持下、微々披之讀申、（微音）一个條奏了承勅答、其儀御氣色也、三个條奏了、早卷之入懷中起座、於簀子申入御次於常御所被下天盃、每事珍重々々、委注別記、（別記所見ナシ）

奏事目錄

今夜奏事目六如此、

文明九年十一月　日　兼顯奏（日二字、奏聞以後、仰詞同時加之者也、）

土御門殿御修理事、（當時修理時分也、仍幸加之、）

仰早可有申沙汰由可申武家、

日野中納言申敷奏事

仰不可有子細、

南都傳奏奉書案

師富朝臣申酒麴役勅裁事

仰同前、

廿七日、辛卯、晴、拜賀奏事始等事、人々多以賀來、拾遺政資賀來之間、入夜賀彼亭、隨身太刀、予又持向、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一　十一月廿六日、ゐろをしてゐんのをいろ、れれしくそうしハしめ申、のちは御さゝ月さふ、

〔實隆公記〕四　十一月廿六日、庚寅、晴、傳聞、今日右大辨奏傳（轉）任慶云々、同奏事始之儀有之歟、

〔親長卿記〕三十二　南都傳奏可被存知給者、依天氣上啓如件、

八月廿八日　左少辨元長

謹上　頭辨殿

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月三日、戊戌、晴、○中略　飯尾加賀守爲信參會、談云、南都傳奏事、予令相續可申沙汰由相存處、令斟酌歟、于今無沙汰、如何候哉由、自寺門事書到來、所詮急令披露可申定由、自寺門令申間、此子細只今可參申入

兼顯一旦傳奏ヲ辭ス

由令存候處、參會申間、且令申由相談間、予返答云、寔傳奏事于今未補、不可然歟、但兼顯相續事ハ、(廣橋胤光)故儀同病中ニ、已令辭退上者、重而又爲上意被仰出、就其所存分可令言上也、只今事ハ辭退事間、不及是非之由返答了、頃之退出、于時秉燭程也、

與謀寺雜掌柚留木重藝兼顯ヲ薦ム

七日、壬寅、自夜雨降、及晚晴、飯尾加賀守爲信入來、南都傳奏事、自寺門以理運人急被補之由、事書到來之間、令披露處、理運躰爲何人哉、可注申由、可尋南都雜掌以下由仰之間、柚留木大進ニ相尋處、予第一理運候歟、近者万里小路建(時房)聖院内府、唯稱院左府等外不覺語(樞下問ヲ)候、但勸修寺大納言於家有其例由承候、但不詳由大進法眼返答也、予存知分尋來云々、予答曰、寔南都傳奏事、於當家者一位仲(勸修寺光)—卿以來、至故儀同數代相續之段勿論也、其外者時房公、勝光公令存知條、各於家初例歟、將亦勸修寺事、不知其例候、凡此傳奏事、上古者無其儀、只南曹辨每事申沙汰候、傳奏事、近代之事歟、大方仲—卿存知初之樣候、何樣自餘輩存知之儀、不覺語候、然間理運躰事、更以不及覺語次第也、万里小路事一向童躰之間、不及沙汰歟、日野拾遺事、是又同幼少之間、共以非沙汰限候哉、□予事是又未練若輩之事候間、更以無其望候、此上者宜在上意之由、令返答者

古ハ南都傳奏ナク南曹辨每事沙汰ス

義政ノ内命

也、

十一日、丙午、晴、時正中日也、○中略早旦南都雜掌柚留木大進法眼重藝入來、南都傳奏理運躰事、自武家重而被尋下間、爲談合云々、令對面條々尋聞之、又所存之旨内々令入魂、

十五日、庚戌、天顏殊晴、月色清明也、誠無雙良辰、尤風流珍重々々、○中略、闕文アリ、無御疎遠之儀可聞食、不任便宜、雖何時可致披露由、忝別而被仰下間、其時爲懇上意上者、可存知由領狀申き、故儀同以如此、予事者云未練云若輩、殊以非無斟酌上者、可然樣得其意、先辭退分可申入由返答者也、何樣致披露、重而被仰下旨可申入由返答、歸參、頃之向春日局、南都傳奏事被仰下、祝著至極也、但御返事趣如此令言上之由相談、又謁民部卿局、南都傳奏事條々得其意可被披露由相談、於春日局有賀酒、頃之歸家、南都傳奏事被仰下上意祝著畏入者也、且者自寺門、予理運不能左右上者、急可存知由、可被仰付由望申云々、

十七日、壬子、雨降、○中略自春日局有音信、予南都傳奏事被仰出、尤珍重也、飯尾加賀守爲信定而雖可申、先内々爲可存知相告由被命、誠面目之至、祝著多端也、何樣罷向御返事之旨等可相談由返答、頃之向彼局條々相談、此儀一品以

義政兼顯ヲ薦ム

來、代々令存知上者、云理運云家例、御沙汰次第不能左右候、可預神助之條勿論也、万幸甚々々、自亥剋屬晴、月明々、

兼顯小河ノ第ニ參賀ス

十八日、癸丑、晴、飯尾加賀守爲信入來、南都傳奏事、自寺門以理運之躰可補由申入候間、此間被經御沙汰處、予理運不能左右之上者、急可存知由、室町殿仰也、可申沙汰由、自御臺御方被仰下云々、則令對面、返答云、南都傳奏事、可存知由被仰下之條、先以祝著之至、忝畏存者也、但此段故儀同モ再三令斟酌間、於南都之儀者、涯分（○以下闕ク、）

興福寺賀札ヲ兼顯ニ送ル

廿八日、癸亥、天晴、今日吉日之由、有宣卿令申間、南都傳奏之御禮申入公武者也、早旦先參賀小河殿、以春日局進上御太刀（糸卷、）同參御臺御方、以民部卿局申入祝著之由、少時歸家、

九月七日、辛未、晴、布施彈正大夫英基入來、南都傳奏事賀之、仍糸卷一腰持來、

十一日、乙亥、晴、終日餘醉之外無他、南都雜掌入來、（○中略）中將亦予南都傳奏事賀札到來、樒代二百疋有芳志、

十月七日、辛丑、晴、自南都興福寺學侶傳奏事珍重之由送賀札之事書、仍柚留木大進法眼持來之、予對面謝之、則調返事遣大進許、樒代送之間返遣者也、賀札到來祝著由仰含、次持太刀一腰賜柚留木大進、祝著之由謝之云々、

勸修寺政顯奏慶

〔大乘院寺社雜事記〕（六十四）　九月廿八日、

一自學侶書狀到來、南都傳奏廣橋殿拜任之間、可賀申云々、近日可上人歟、仍昨日內書返事可有歟、次以可上云々、

〔親長卿記〕（八）　九月五日、晴、左中辨政顯申轉任奏慶、（日比右中辨、）

〔實隆公記〕（四）　九月五日、己巳、晴、終日無事、（今夕政顯奏轉任慶歟、但不及舞跪、內々參內云々、且者爲例、）

十八日、（癸丑）賀茂神宮寺別當興祐ニ命ジ、南禪寺善住庵領ヲ押妨スルヲ停ム、

〔親長卿記〕（三十二）

南禪寺善住庵申、境內寺領田地事、支證分明之上者、可被止其妨之由、可申旨候、恐々謹言、

八月十八日　　親繼

千手院律師（興祐）御坊

前別當隆算沽却ノ田地

境內田地（以下同ジ）

善住庵領事、於隆算法印沽脚之一段者、追可有糺決、先當所務事、無其煩可被

渡寺家之雜掌之由、可申旨候、恐々謹言、

親繼判

九月一日

賀茂神宮寺別當律師御坊

隆算法印沽脚賀茂境內田地事、別相傳歟、神宮寺田歟否事、追可被糺決、於當所務、先可止其妨之由、被申付別當、與祐律師(出脫カ)可申下(旨カ)候、恐々謹言、

九月一日　　親繼

善住庵納所

千疋ノ犬追物

十九日、甲寅、義尙、犬追物ヲ興行スルコト三日、義政、夫人日野氏ト共ニ、往テ之ヲ觀ル、

〔長興宿禰記〕上　八月十九日、今日於將軍御所馬場、千疋之犬追物被始、三(ヵ)十日可有御張行云々、小笠原(政清)備前守申沙汰也、

廿一日、今日將軍御所犬追物(マヽ)詣也、准后同御臺等渡御、有御見物云々、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月十七日、壬子、雨降、自今日於宰相中將殿千疋之犬追物可有之處、依雨延引云々、明日室町殿以下可有渡御云々、御見物故也、



第一日

十九日、甲寅、晴、自今日於宰相中將殿有千疋之犬追物、可見物由、自兼日度々仰間、午天參祖、二百疋有之、初百疋、檢見小笠(原脫カ下同ジ)民部少輔政清、喚次拼和與二郎政爲、次百疋、檢見伊勢守貞宗、喚次伊勢二郎貞賴男也、今朝二百疋有之、仍今日以上四百疋也云々、手組廿餘騎歟、記無益間略之、藤(高倉永繼)宰相永繼卿手組也、射手裝束每物不相替武家輩、每事不可說々々々、莫言々々、

高倉永繼射手トナル

第二日

廿日、乙卯、晴、宰相中將殿犬追物第二日也、朝犬二百疋、夕百疋云々、今日同可見物由有仰之旨、雖然來廿三日御會愚詠不出來之間、今日不祇候、傳聞、小笠民部少輔任備前守、舍弟八郎男任刑部少輔云々、御師範賞歟、未及御執奏、先御免云々、

小笠原政清兄弟師範ノ賞ニ依リテ任官ス

第三日

廿一日、丙辰、晴、宰相中將殿犬追物爲御見物、四時分室町殿御臺御方等渡御、予拾遺政資等祇候、先朝犬百疋之後、頃之又二百疋、以上千疋也、申斜事終、有一獻、予伊勢守同子七郎等祇候御前、射手少々有召出、及半更事終、今夜依被留申、室町殿御臺御方共以御逗留、抑今度犬追物御禮、射手衆以下武家輩進上御太刀、予祇候之間、可進上哉由、相談伊勢守貞宗處、誠祇候之間、進上可然由返答之間、侍從予兩人同進上之、金覆輪也、拾遺早出之間、遣使者相告之間、

義政夫妻伊勢亭ニ赴ク

義政夫妻逗留

永繼落馬

重而參祗進上御太刀之後退出、進上准后、宰相中將殿兩所者也、藤宰相今日落馬、諸人笑之、不可說々々々、撿見以下雖可委記、無益間令省略者也、及曉更退出、

酒宴

廿二日、丁巳、晴、午天參宰相中將殿、○中略、幕府和歌會ノコトニカヽル、二十五日ノ條ニ收ム、今夜尙御逗留、大飲連續沈醉忘他事、如何之、

素襖脫キ

廿三日、戊午、晴、餘醉之外無他、自宰相中將殿有召、急可祗候由被仰下間、參候之處、頗大飲御酒也、予、右馬頭、伊勢、藤宰相以下祗候御前、觀世申音曲、被下室町殿御臺等之御服、則著之、飜袖、又スワウヌキアリ、室町殿、宰相中將殿、御直垂之上被下之、藤宰相、予同之、右馬頭、伊勢守以下御供衆、御方衆、御臺御供衆、伊勢名字輩、奉公之者以下、悉スワウヲヌク、伊勢母、右馬頭同小袖ヲヌク、頗大飲也、及半更室町殿御臺御方等還御、宰相中將殿降庭御蹲踞、予伊勢守等祗候此所、

義政義尙直垂ヲ與フ

義政夫妻小河第ニ還ル

廿五日、庚申、晴、○中略、宰相中將殿渡御、今度御成之御禮也、昨日御衰日之間、今日渡御云々、

義尙小河第ニ至リ謝ス

〔實隆公記〕四　八月十九日、甲寅、晴、○中略、自今日三ケ日、於勢州、大樹羽林犬追物被遊之云々、

題ヲ頒ツ

二十五日、庚申、幕府和歌會、皇子仁勝、及ビ邦高親王御歌ヲ賜フ、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月十三日、戊申、晴、○中略、入夜自室町殿有御使、德阿、和歌題被仰之、若宮御方、伏見殿以下公武數十人、各可詠進由可相觸由也、御人數御筆被遊之、宮御方幷伏見殿、各御題可持參之由也、自餘廻覽分也、室町殿御會題、明日兩所ニ可持參之由也、仍今夜不及持參、自餘同明朝可相觸者也、御人數書立御自筆之間、加和歌文書、委細又注他記者也、十四日、己酉、朝程小雨洒、自午天晴、○中略、先之室町殿御會題持參若宮御方幷伏見殿、各可被詠進由也、自餘面々、以使者各相觸者也、町中納言、頭中將、勸修寺等、於禁裏參會、直可詠進由有返答、向勾當內侍局、同可被詠進由達之、○中略、以次、參宰相中將殿、頃之祗候之後、直參小河殿、御會之事、各相觸旨、以珠鶴喝食申入之、次參御臺御方、少時歸家、于時亥剋許歟、

廿日、乙卯、晴、○中略、義尙、犬追物興行ノコトニカヽル、十九日ノ條ニ收ム、雖然來廿三日御會愚詠不出來之間、今日不祗候、

廿二日、丁巳、晴、午天參宰相中將殿、明日室町殿御會愚詠草一紙爲入准后見

伊勢貞宗延引セン コトヲ請フ

二十五日和歌會ヲ興行セントス

義政兼顯杉原盛賢等ノ詠草ニ注ス

參持參者也、杉原伊賀守賢盛同弟安藝守長恒等草、備上覽度由令申間、同持參之處、依伊勢守申請、明日先御延引也、還御以後、靜可被御覽由仰也、仍欲退出處、可祗候由被仰下間祗候、參御前被下數盃、又沈醉之外無他、終日祗候、及深更退出、今夜尙御逗留大飲、連續沈醉忘他事、如何之、明日御會人之詠歌、多以到來、町中納言持來云々、若宮御方、伏見殿等御詠同被下之、

廿四日、己未、晴、地藏菩薩緣日也、依餘醉所作無沙汰、但心中祈念異于他也、早旦自室町殿有御使、昨日御會明日可被重、可令存知由也、畏奉由申入者也、藤宰相、伊勢守等詠歌未到之間、飛鴈札令催促之、則參祗之處、御座御臺御方之間、參彼御方、若宮御方以下御詠少々入見參之處、而ニ取重可進上由被仰下、予并杉原兄弟詠草被御覽被返下之、殊御懇被注下之間、祝著千万也、則以使者送遣杉原兩人草、及晚自禁裏有召間參內、條々被仰下旨有之、入夜退出、直又參候小河殿、於御前被下數盃、又沈醉也、半夜時分退出、

廿五日、庚申、晴、早旦御會一座取重、持參小河殿、御座御臺御方程也、頃之祗候之後退出、午天又有召參候、可有御酒可祗候由被仰下、面目之至畏入者也、拾遺聯輝軒等同依召祗候、准后御沙汰也、爲可被申御臺御方御張行云々、

日野氏參內ノ日次ヲ問フ

御宴アリ

義政初雁ヲ獻ズ

〔實隆公記〕四　八月十四日、己酉、陰、今日自武家被下三首題、來廿三日、各可令詠進之由也、

廿二日、丁巳、天顏快晴、終日無事、入夜茶々來話、今日武家御短冊詠進之、今度御人數、新衆五人有之、若宮御方、伏見殿、舊院上萬、勾當、冷泉父子、勸修寺父子、藤大納言父子、新中納言、廣滋野井、藤宰相、柳原、廣橋、予、中將、政國、貞宗、賢盛、長種等也、

二十八日、癸、義政夫人日野氏酒饌ヲ獻ズ、義政、義尙參內シ、皇子仁勝及ビ邦高親王モ亦、參內セラル、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一

の事、御さひの御方よりゐ去やう院つゝ井よゝ御申あり、けさめ御申あゐ、廿八日、げさの御さゝ月ゐいる、御たゝ井の御ゝさ御申けさこて、むろまちとの、宰相中將との、御さんたいゐ、ふしゝ殿□□□□□なる、宮の御ゝさゝ、御そんゐりおそゐゐりて、そゐほとに御いてあゐ、御さゝゐ御てんしむゐて九こん、その外御れり十ゝう、御さゝ月のさ井二ゝ、をさへ物あまさふゐうのまゐゐいる、御さる十ゝ、このゐゝゐ中□へちよゐいる、御ねしゝゝて、千しゆう万をゐ、めてさしゝ、むろまち殿よりそつゝりゐいる、

日野氏雁及ビ茶ヲ進獻ズ

廿九日、昨日の御てうゑう色々ゐいる、御つゝ井頭辨ふま、御たゝ井の御かさとて、大ゑもし御ゝさへ御ふゑまてゐいらさきらゐゝ、くろ御所々々御方おをしまゐいる、日野ニてゝさねて御ぬるまゝなとゐさらさをわしまし、一こんありゝ、みあ〳〵御ゑひともこて、御ねし〳〵ありまさ御たゝ井よりかん御ちやゐいる、

火災以後義政初テ參内數獻深更ニ及ブ參内ノ人々

〔親長卿記〕八　八月廿八日、晴、○中略今日室町殿、宰相中將殿、御臺等御參内云々、予云母正忌云不具、旁以不參、元長宰相中將殿御劍役被相催之間召進了、

宴ヲ賜フ

廿九日、晴、昨日不祗候無念、後朝雖無殊事、有一獻、女中許也、可祗候之由被下女房奉書、卽參内、入夜退出、予之外無祗候之輩、

〔實隆公記〕四　八月廿八日、癸亥、天顔快晴、請瑜首座設小齋、今日室町殿御參内、廻祿以後初度、一位殿御申沙汰云々、仍著束帶參内、數獻及深更、勸修寺大納言、源大納言、民部卿、四辻宰相中將、兼顯朝臣、下官、言國朝臣、元長、政資、菅原在數、源富仲等祗候、伏見殿以下宮々、大樹羽林、御臺等悉御參、今日無爲無事、珍重珍重、雖爲當番、令相博、菅在□(歟カ)退出了、時寅剋也、

折盃臺等ヲ進獻ス

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　八月廿八日、癸亥、天晴、○中略著朝衣急參内、今日室町殿御參内、故也、御臺御方申御沙汰也、仍折十合、盃臺二、押物小折十五合、同枝作物風流也、二、柳十荷、河内酒二荷被進之、依仰予爲御使持參、

兼顯引出物ヲ受ク

廿九日、甲子、晴、時々小雨、酒、餘醉之外無他、早旦有召、參御臺御方、則可參御前由被仰下間、構見參、被仰下云、昨日依御參内申御沙汰、可被進御引出物、但御物以下去年悉紛失之間、可然御物無御所持間事、更可被進事、可爲如何樣御申之由、有御談合間當時事候間、聊雖爲不足之御沙汰不可告(苦カ)、只今何よも御進上可目出之由申入間、然者爲御使可持參由、依仰持參禁者(省カ)御目六并典侍殿への御書ヲ被遊下間、予賜之持參、以典侍殿局奏聞、仰之旨御引物之外、初鴈并御茶百袋、同被進之、悉付典侍殿進上之、

〔歷代殘闕日記〕七十八重胤記　八月廿九日、晴、

一室町殿御參内、御方御所、大御所、御供本所、御劍、御方御所、甘露寺の辨殿也、御劍、御出時御沓役也、本所御出候、

今福莊ノ事ニ依リ殿司訴訟シ舞殿御座

祇候ノ輩

## 九月 大乙丑朔盡

一日、乙丑、石清水放生會ヲ追行ス、

〔石清水八幡宮記錄〕二 放生會延引例文○山城 石清水八幡宮 文明九年九月一日丑刻、下御行、於猪鼻後夜鳴、同八日一會行之、十日亥刻還御、但依今福庄事、御殿司訴訟之間、御座舞殿、同十年四月廿七日、自舞殿御移于正殿、

〔放生會上卿已下歷名〕文明九年九月一日、式月日等延引、十日還幸、

〔續史愚抄〕四十 後土御門院中之上 九月一日、乙丑、有石清水放生會、宮寺沙汰也、而還幸延引、長暦、祕抄、親長卿記、追、

十日、甲戌、今日有放生會還幸儀、祕抄、

御祝、

〔御湯とのゝ上乃日記〕一 九月一日、御いゐはいつものことし、きう上らゆあさ御さゝ月よゝ御さふらひあり、

〔實隆公記〕四 九月一日、乙丑、晴、行水如例、入夜參內、御祝祇候輩、源大納言、民部卿、四辻宰相中將、下官、言國朝臣等也、

今夜可令祇候之由、依勅定、不退出、候若宮御方了、

足利成氏ノ命ヲ承ケ出陣ス

禪長秉炬

芳賀成高成高寺ヲ建テ正綱ノ冥福ニ資ス

下野守宇都宮正綱、上野川曲陣中ニ卒シ、子成綱嗣グ、

〔下野國志〕九 宇都宮系圖 古城盛衰

正綱 從四位、侍從、左馬頭、下野守、太郎丸、芳賀右兵衛尉成高男、始武茂家督、號武茂太郎、後宇都宮明綱依早世、宇都宮家督、母宇都宮侍從持綱女、依外孫也、文明九年丁酉九月朔日、承古河公方成氏朝臣命、上州曲出陣之刻、依病卒、三十一、法名繼巖長胤、號能延寺、

成綱 正四位、左少將、右馬頭、下野守、彌三郎、母佐竹掃部助源義親女、

興綱 芳賀左兵衛尉、彌四郎、續家督、任下野守、

兼綱 武茂右兵衛尉、彌五郎、別在系、

孝綱 鹽谷伯耆守、彌六郎、別在系、

〔下野國志〕十 古城盛衰 芳賀系圖

成高

正綱 宇都宮明綱家督、稱下野守、

興綱 芳賀彌四郎、後宇都宮家督、稱下野守、

〔日本洞上聯燈錄〕六 永平下第九世 龍興大見禪龍禪師法嗣

野州成高寺傑傳禪長禪師、○略中 文明九年、野州刺史藤正綱、宇都宮氏、從軍於將帥成氏、入上州病卒、野州藤成高、芳賀氏、請師作秉炬佛事曰、往昔不生今不滅、本來面目露堂堂、閻浮三十餘年夢、塞雁聲寒送夕陽、翌年成高、於宇都宮中川原新

建精舍、資冥福、延師主之、號曰東廬山成高寺、

〔下野國志〕九　古城盛衰　横田系圖

綱俊

綱親　越中守、四郎兵衛尉、實大山田美濃守氏朝二男、母横田綱業女、文明九年丁酉九月朔日討死、于時四十八、承古河公方成氏朝臣命、宇都宮正綱、於上州川曲、與上杉憲忠合戰之刻討死云々、（編定）

綱英　四郎左衛門尉、母佐竹六郎左衛門尉源義泰女、

保業　五郎左衛門尉、與父共討死、

清業　七郎兵衛尉、與父兄共討死、

辰業　九郎兵衛尉、領河内郡桑島郷、

〔下野國志〕九　古城盛衰　今泉系圖

盛朝

盛泰　四郎左衛門尉、法名道光、文明九丁酉九月朔日討死、

盛高　四郎兵衛尉、

〔常陸遺文〕七　源家佐竹岡田高橋系圖

義彌　高橋左宮、

横田綱親正綱ト共ニ戰死ス

今泉盛泰ノ戰死

義康　高橋五郎、後圖書、號橋（ヤ、）啓、若狹守、母大沼五郎左衛門泰孝女、文明九年八月、上野國河曲御陣討死、

義景　高橋右近、母松本五郎大夫越智通和女、

○明綱卒シ、正綱家ヲ嗣グコト、寛正四年十月十三日ノ條ニ、足利成氏、兵ヲ率キテ、上野瀧ニ出デ、長尾景春ヲ援クルコト、七月是月ノ條ニ見ユ、又横田綱親、今泉盛泰等、川曲ニ戰死スルコト、便宜合敍ス、

〔參考〕

〔花押彙纂〕ウ部之　宇都宮正綱

花押

○一向寺文書（上野）

寛正七年八月七日安堵狀

三日、丁卯、細川政元、丹波出雲神社ニ天下靜謐ヲ祈ル、

〔出雲神社文書〕○丹波

丹波國一宮社立願事

右天下靜謐幷今度攝州之儀、則令屬無爲之上者、專當社造畢功、付可參詣仕者也、仍立願之狀如件、

攝州無爲ノ上ハ社殿ヲ造立シ參詣セントス

文明九年九月三日　　聰明丸（細川政元）

○政元、段錢ヲ國中ニ課シテ、出雲神社ヲ修造シ、祈禱ノ精誠ヲ致サシムルコト、八年十二月二日ノ條ニ見ユ、

六日、庚午、從二位庭田雅行、武者小路資世ヲ、竝ニ正二位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十三

權大納言從二位源雅行、四十四、九月六日敍正二位、

藤資世、六十、九月六日敍正二位、

〔實隆公記〕四

九月七日、辛未、晴、今日爲菅在數番代參內、晝夜祗候、昨日雅行資世等卿、敍正二位可令宣下云々、承諾了、

三條西實隆ニ命ジテ宣下セシム

八日、壬申、晴、早旦退出、神宮權禰宜度會有用敍爵事幷兩卿正二位事等、口宣付冷泉大納言、

○小槻賴敏等敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔歷名土代〕　從五位下槻（小槻）賴敏　同九九五改時元、

〔親長卿記〕八　九月五日、晴、長興宿禰申賴敏（長興宿禰養子、佐波彦四郎子云々）、敍爵事、奏聞、勅許了、

小槻賴敏

〔長興宿禰記〕上　九月五日、今日予猶子（七歲、賴敏）、敍爵事、□□藏人左少辨元長奉行也、翌日予向甘露寺亭畏申畢、

〔歷名土代〕

從五位上卜（吉田）兼枝　同九九十一、

從五位下藤（飛鳥井）雅俊　同九十十八、

正四位下安有宗　同九十一十八、

從五位上安有敏　同九十一十八、

吉田兼枝

飛鳥井雅俊

幕府、丹波守護代內藤元貞ニ命ジテ、被官人等ノ、料所同國桐野牧河內村寺社領ヲ、違亂スルヲ停メシム、

〔古文書〕三　○內閣記錄課所藏